

若者でも、朝飯前だなんて云ふ様な考で出掛けると、途中で非道い目に逢ふ事があ
るのです。」

三太郎「夫は眞理です。必しも湯殿山に限つたものでは無く、萬事世上の事は其通
りですが、殊に深山幽谷を旅行する際には、前途瞭遠であると云ふ考を常に念頭に
置いて、大事をとらないと大失敗をする事が有ります。」

山伏「今日は何所から、御出になられたので御座います乎。」

學生乙「大沼の大行院から、随分早いでせう。此勢で行けば、湯殿山も朝飯前であ
りません乎ね。」

彌次「浮島様が御出でになりましたてす乎。」

學生乙「僕等は精進が良いから、浮島が惣出揃つて歓迎會をやつたよ。朝の七時半に
は西の方の灣内に淀泊して居つた諸島が運動を開始し、八時には西岸の中央部に三
個の浮島が集中し、十時頃には其内の一島は北岸を離れて葦原島の東南を過ぎ、少し

く逆行して更に南に向ひ、岸に浴ひて再び中央に出て、竟に沼の南方に到りて靜止
したが、こんな大活動は容易に見られないさうです。午後三時から六時迄の間に、
更に非常な活動で、恰も海軍の演習其儘でした。」

彌次馬「そんなに朝早くから、夕方迄も見物して居られたのです乎。」

學生甲「浮島の研究に出掛けたのですから、四日間滞在して居つたのです。」

山伏「浮島様丈は、いくら學者が研究しても知れますまい。全く神様の仕業で御坐
いますからね。」

學生乙「必しも左様とは限りません。神様がどんな事を成さる乎、夫を探るのが理
學者の本分なんですから。」

彌次馬「谷地町やちの人が見物に行けば、浮島が出ないと云ふ事を聞きましたが、さう
云ふ理屈は有りませう乎。」

三太郎「見物人の誰彼に依つて、出たり引込んだりする筈がありませんが、大體か

ら言へば、朝の日出後と、夕方日没前後が尤も能く運動するので、其外は天氣が蒸し熱く、天の一方に突然雲が現はれ、今にも雷雨が來さうな天氣の折には、一番能く浮島が活動します。従て三四里の所から日歸りて、更に天氣が慥に良好であると見極めが付いてから出掛ける様では、浮島の運動に出逢はぬのが當然です。」

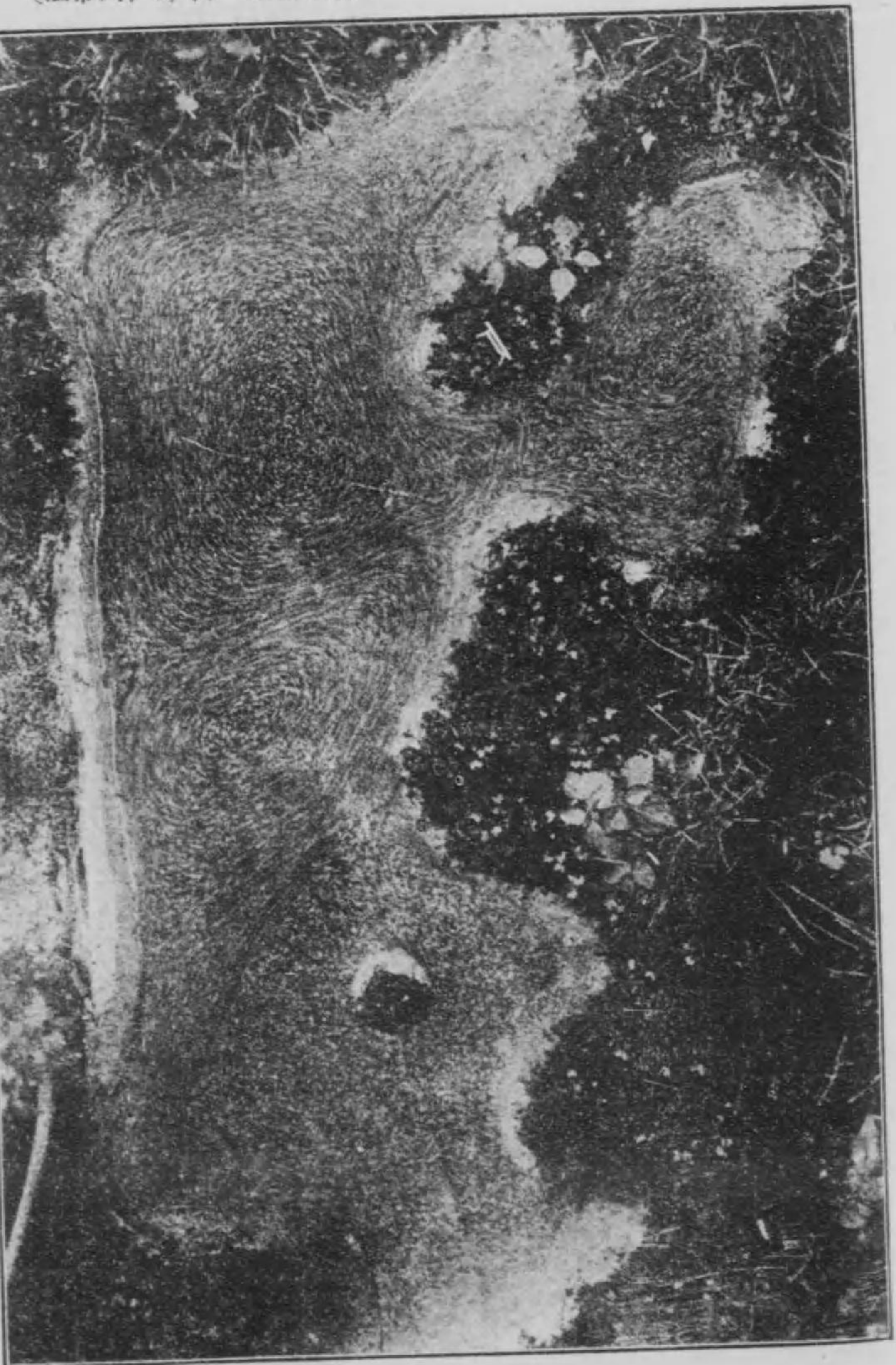
學生乙「浮島の運動と天氣との間に、どんな關係があります乎。」

三太郎「浮島の動くのは、沼の水が動くので、水と共に島が流れて行くのです。而して水の動く最初の原因は、水及び空氣の溫度が場所に依て、非常に高低あるに基くのであります。」

學生甲「道理で浮島が動く時には、湖水面に少しも波が立たないのですね。鴨が浮いて行く時には、立派に波が左右に長く、後の方に擴がつて行くのが見えましたが。」

彌次「水が動けば波が立つ筈ではありません乎、なぜ波が立たないのです乎。」

學生甲「浮島と水とが一緒に成つて動いて居るからです。浮島が水に對して動くな



第一四圖 (一七八頁参照)

灣の方上ち即院の奥はに合場此。す示を況情るす動運の水の沼に合場るお流氣りよ間谷る當に角の右下。りお事るす動運てれ分に右左ばれ來に近附の岸し進直に向方る居の者拜參ち即方下は島浮るたで出りよ

らば、其前面に波が起る事になります。」

學生乙「水や空氣の溫度に、差があるのはなぜでせう」

三太郎「夫は浮島沼の周圍の地勢が非常に複雑で、山あり谷谷あり、深林あり、一方は日光に照らされても、他方は綠樹の蔭になつて居ると言ふ様な事から來るのです。例へば湖水面が日光に照らされて、溫度上昇せる際には、外氣は湖水の東北部に於て北から南に向つて流れ、中央部に於て東より西に向つて流れなければならん様な地勢になつて居ります。又日沒の際には、東岸の岡陵は遅くまで日光を受くる故に、東に向ふ氣流を生じ、全く沒せる後は森林に覆はれたる西灣内の氣温は比較的遅く冷却するが故に、氣流は逆に西に向ふ筈である。従て日沒前後には幾多の浮島が奥の院より浮み出て、暗ら／＼かけて再び奥の院に歸り行く様に成るのであります。」

彌次「氣流と言ひますのは、つまり風の事ではありませんです乎。」

三太郎「風の極めて弱い者で、通常は風として吾人の眼に付かぬ程のものが起るのです。風らしい風が吹けば、浮島は凡て岸に吹き着けられて、却て面白い運動をする事が出来なくなりませう。」

學生甲「氣流に依て動くならば、凡ての浮島が同じ方向に動く筈では無いでせう乎。」

三太郎「其處が此浮島の天下一品たる所以なのです。小さいながらも、灣があり、岬があり、沼の形が非常に複雑である爲に、氣流並に水溫の差に依て起る湖水の流動は、數個の部分に分れて、複雑なる還流をなして居ります。従て甲乙二個の還流が相接觸する所では、相並んで前進した島も、右の物は甲還流に乗りて右の方に曲り、左の物は乙還流に乗りて左に曲る故に、途中から左右に分れる事になります。而して是等の還流は容易に生ぜざるも、一旦生ずれば永續する故に、全く無風の時にも、此流に乗りて浮島が動き、或は微風に反對して動く事も出来る道理であります。」

せう。」

學生乙「其理論から行けば、平地にありて簡単な沿岸線を有する沼には、假令浮島が有つても、面白い運動は出来ない筈ですね。」

學生甲「夫だから外には例が無いでせう。浮島は到る所にありますが……」

二十三 不思議なる現象

彌次馬「さう説明が出来れば、浮島が動くのは神様の力でもなんでも無く、別に不思議な者ではなくなつて仕舞ふですね。」

學生甲「不思議と云ふのは、つまり見る人の理性が幼稚である場合にのみ有る事で、理學が進歩すれば、不思議がなくなるのは當然です。私の國には三不思議があると云ふ、七不思議が有るなど言つて自慢する人も有るが、夫は自分の國の人間は文明の程度が低いと言ふ事を吹張るので、馬鹿の骨頂です。」

彌次馬「けれども、實際不思議の事も多いです。例へば信州上諏訪に薬師堂がありますが、其堂の裏の羽目板に節穴が御坐います。處が此穴からして境内の景色が室内に寫りますが、暮になれば消えて白晝殊に太陽の直射して居る日が最も明瞭なので、狐や狸の仕業とも思はれません。是などは矢張り不思議の一つで、薬師様のなされる事と思ふ外は無い様に思はれますがね。」

三太郎「夫は大した問題ではありません。寫眞の暗箱の原理は其所にあるのです。何も薬師堂の節穴に限つた者では無く、太陽が高く昇るまで朝寝をして雨戸を閉ぢ切つて居て御覽なさい、其雨戸に節穴があれば、室の障子に庭の景色が奇妙に寫ります。諏訪の薬師堂の室内が白晝でも薄暗い様に作られて居るから寫るのです。室の内外が同じ明るさならば、全く消えて仕舞ひます。」

山伏「世の中に不思議な事はないと一概にも言はれませんよ。南部の恐山には地獄極樂がありまして、其所に行けば死んだ子供や妻に逢ふ事が出来ます。是などは何

と言つても不思議ではありません乎。」

五九郎「死んだ人に逢はれると云ふのは、例の口寄の事ではありません乎。」

山伏「口寄とは違ひます。あれは死靈と言へば死人の靈であるが、實際の所は生きた人間が話をするので、何も不思議な事は有りません。つまり素顔では言へない事を、酒を飲めば遠慮なく言へる故に、酔つた場合に言ふ事は却て眞理を穿つて居るので、平生言ふ事は餘りあてにならないものです……」

五九郎「さう言へばそんなものではね。いつか御話がありました要石の事なども、一寸素顔では主張し悪いが、易の上にかう顯れたと平、死靈が其様に申したと言へば世間態は宜しい様ですから。」

三太郎「昔は自分の考を發表するに、夫を自分の意見だと言へば、相手方から信用されない様な場合には、屢々さう云ふ手段を講じたものです。神の御告であると平、御夢想であると平、或は天文に表はれたと平、雲氣を見て知れると平、何れにして

も自己以外に神祕的なる者をつぎ出して、其威力に依て自説を採用せしめんとする計略に過ぎないです。例へば大革命を起さんとする際には、日蝕や彗星の出現を以て、世が亂れる前兆であると呼、現政府が倒れる前兆であるとか言ひ觸らし、是に依て衆人をして、暗々裏に、自分が立つのは天意に基くのであると呼、今起てば必ず成功すると言ふ事を信ぜしむる一つの手段であります。」

學生乙「キリストが豫言者を引合に出すのも、同一筆法でせう。自分が斯る仕事をすると言ふ事は、數百年前の昔から既に豫言されて居ると言へば、自己の人物に非常な裏書をする事に成りますからね。」

五九郎「死んだ人に逢はれると言ふのはどうなんでしょうか。死んだ人が蘇生して來て面會するのでせう乎。」

山伏「左様では御座いまん。死んでしまへば、肉體は火葬にすれば灰になるし、土葬にすれば腐つて仕舞ひますから、再び元の肉體を見る事は出来ませんが、靈魂は

宇宙の何所乎に永住して居りますので、恐山に行けば、其靈魂に逢ふ事が出来るのでせう。」

學生甲「靈魂が矢張り、我々の眼に見えるのです乎。」

山伏「見えはしませんですが、話をする事が出来るのです。恐山に行けば、死んだ人の聲が聞えるのです。」

學生乙「夫では聾は駄目乎、私の祖父は今年七十ですが、孫を亡くして非常にがっかりして居るから、一つ恐山に逢ひにやらう乎と思つたら、相憎耳が遠いので、話を通ぜぬから、折角の恐山行も無意味です乎ね。」

彌次馬「左様とも限りませぬ。我々は幽霊と言へば、足が無くして怨めしさうな顔して、黙つて人の前に顯はれる者だから、盲目になれば幽霊に出會ふ心配があるまいと思つて居つたら、先日近所の盲目が、矢張死んだ友人の幽霊が來たと嘯をして居るので、盲人に幽霊が見えまいと言つたら、見えはしないけれども、足音がする

ので知れたと言つて居つたです。して見れば、幽霊も盲人に出る時には、氣をきかして、臨時に足を附けて來ると見えるから、聾が會ひに行つたら、先方でも其積りで、何乎よい工夫をして來る乎も知れないさ。」

五九郎「幽霊の話聲が、實際に音波として空中を傳はつて來る者ならば、聾者には聞えない事當然であるが、單に其本人に聲として聞える丈で、途中は音波でないものならば聾者にも聞えませう。聾者と言ふのは、空中を傳播する音波の作用を受けても、之を感じぬと言ふ丈であるが、音波を受けずとも、他の作用に依て聲を聞く事が出來ます。例へば外界に何等の音波が無くとも、耳鳴と言つて、本人には非常な音響が聞える事があります。聾者だからつて耳鳴もしないと言ふ事はあります。」

學生甲「其論法で行けば、盲人でも幽霊が見える筈ですがね。普通の盲目と云ふのは、外界から來た光波の刺激を感じぬと言ふ丈だが、衝突して眼から火花が飛ぶ時

などは、外界から光が入射せんでも、火花が見えるのであるから、瞳子が塞つたり、水晶球が濁つたりした盲人には、我々同様幽霊が見えても良い筈ではありませんか」

山伏「大層六かしい學術上の議論で、私には了解出來ませんが、兎に角恐山で死人に逢はされると云ふ事は、昔から有名な事でありませう。」

學生乙「噂丈では幾ら有つても信用は出來ますまい。何處の誰が、何時、死人の聲を聞いたと言ふ確な實例が有りませんでは。」

山伏「夫はあります。年代は正確に今記憶しては居りませんが私の祖父が十八歳で金華山參詣に行つた歳だと言ひますが、其祖父が八十五歳で亡くなつて今歳は丁度其十三回忌に當つて居りますから、あなた方の様に歴史に明るく、十呂盤そろばんの達者な方には、直ぐ其年代は知れる事と思ひます。」

五九郎「其祖父さんが恐山に行つて、死んだ人に逢つた事が有ると言ふのです乎。」

山伏「左様では御座いませぬ。其祖父が金華山參詣に行きましたが、其當時は現今

の様に汽車や汽船の便利が有りませんので、仙臺の城下から鹽釜松島を見物し、野蒜を経て石の巻港に出て、夫から渡ノ波と言ふ所で、萬石浦を渡り、萩の濱を見物し、愈々今日は金華山に着くと言ふのを樂にして、途を急いだ所が、金華山と言ふのは陸續きの山ではありませんで、牡鹿半島から海上十八丁、山雉之渡やまざりのわたしと云ふ難所があります。此山雉渡と言ふ所は又一つの不思議で有りまして、不信神の者は一人でも居りますと、如何に晴天の日でも荒波が立つて、渡る事が出来ないのであります。

彌次馬「天氣が悪くなつて、海が荒れて来るのなら當然だが、如何に良い天氣でも、波が立つと言ふ筈は有りますまい。」

山伏「其處が即ち不思議な所で御座いまして、つまり金華山の有難い證據と思つて居りますので御座います。」

三太郎「天氣がどんなに良くとも、大波が寄せる事は有ります。天氣は突然悪く

なるのではなく、日本では通常低氣壓が、小笠原乎、八丈島邊の南方に起り、之が次第に北上して、竟に本州を襲ふのであります。其處で、東北地方ではいくら上天氣の日でも、小笠原島邊に暴風が既に顯れて居れば、太平洋上に大きな浪が出来、夫が押寄せて來まして、海岸は非常に浪が高くなります。此大浪が來たならば、其後二三日内には天氣が悪くなる前兆とも見る事が出来ます。大浪が寄せて來た際には、仙臺市の様に二三里も内地に引込んだ所まで、浪が岸に打ち上げる音が夜の沈黙を破つて聞えますので、地方の人は海鳴と言つて居ります。」

五九郎「東北帝國大學の觀象所にある地震機械は、其太平洋が荒れた爲に、陸が振動するのを明かに記録すると云ふ事です。」

山伏「兎に角そんな譯で、山雉渡を越える事が出来ないで、三四日間鮎川と言ふ所に滞在して居つたのださうです。山中で天氣が悪くて滞在する時程、退屈な事はなにもので、隣室の客とも色々往復して、茶飲話をする機會が出て參ります。」

學生乙「なか／＼前口上が長いすね。恐山の話はどうなつたのです乎。」

山伏「其時です。丁度恐山參詣に行つて、死んだ子供の聲を聞いて逃げ歸つて來たと言ふ夫婦が、隣の室に泊まり合せて居つたさうです。」

五九郎「折角逢つたのに、逃げて歸つたと言ふのはどうしたんでせう。」

山伏「いや、生物が殺される時の怨みの一念と言ふものは恐しいものです。此夫婦は元會津の田舎の長者だつたが、如何なる前世の因縁があるの乎、夫婦の中に子供が出來ない……」

彌次馬「前世の因縁も何も有りはせんです。淫亂は孕まずと言つてね、財産家は兎角不品行だから、子供が出來ないので。子供が大勢丈夫で育つて居るならば、先づ品行方正と認定しても差支ないです。」

山伏「所が、可なり年を取つてから、今の御話の様に、品行方正に成つたせい乎どう乎は知りませんが、兎に角妻君に一人の子供が、而も玉の様な男の子が出來たので

す。」

彌次「子供が旦那に出來る筈がないから、妻君に出來たまで云はなくても良いではありません乎。」

學生乙「左様とも限りますまう。」

さあ事だ、下女はづまきを腹にしめ

と言ふ誰やらの句もありますから、妻君にばかり子供が出來るとは限りませんよ。」

三太郎「そんなに彌次らないで、山伏さんの話を聞いては如何です乎。」

山伏「折角出來た一人子が、やつと小學校に通學する年頃になると、突然死んだのださうです。其所で長者夫婦は、つく／＼此世を悲觀して、財産は身内の者に分配し、十分の旅費を懐中して、千ヤ寺參りに出掛けたが、途中で道連になつた南部生れの者から、恐山に行けば死んだ者に逢はれると言ふ事を聞いて、早速恐山に出掛けたのださうです。」

五九郎「恐山と言ふのは、何所に御座いまする山です乎。」

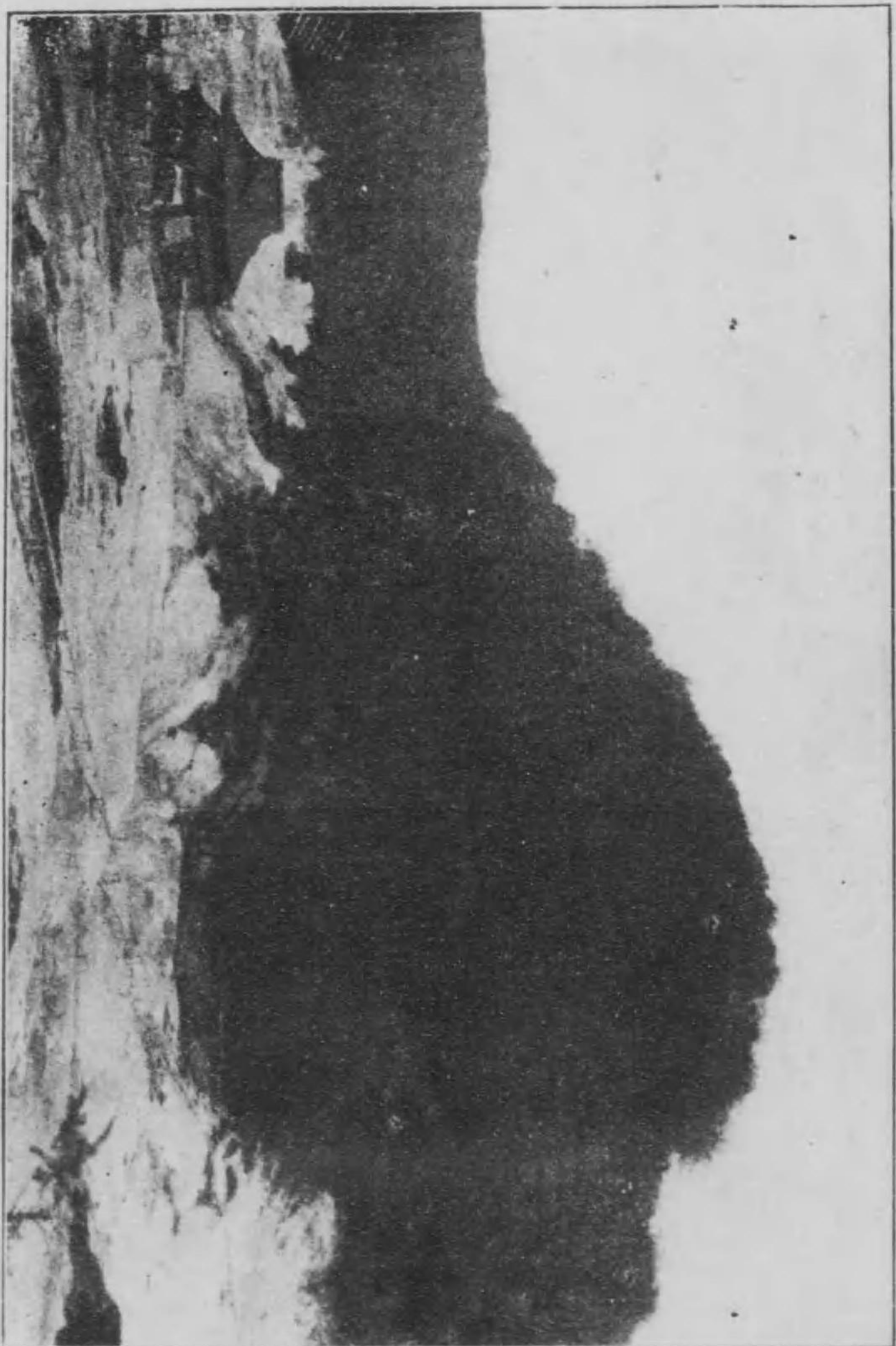
山伏「南部の恐山と言ひますから、南部に有るてせう。」

學生甲「恐山は青森縣下北郡にありますので、本州の最北端を成し、津輕海峽を隔て、北海道の駒ヶ岳と對峙して居る舊火山です。」

五九郎「夫では北海道に渡る際には、其所を通りませう。」

學生甲「北海道へは青森から直に乘りますが、恐山は北南半島と言つて、青森灣の外圍をなして居る部分にありますから通りません。併し汽船からは能く見えます。又青森から舟で大湊に上陸すれば、夫から三里強です。」

三太郎「恐山に出掛て其可愛い子供に逢つたら、逃げる必要もありませんが。」
山伏「逃げる丈の理由が有つたのです。三途の川を涉り、無事に恐山の境内に入ると、菩提寺に參詣し、供養を頼み、木堂に籠り徹夜をして居りますと、草木も眠る丑の刻夢うつゝの間に人聲が聞えるので、扱てはと驚き耳をそば立て、聞くと、夫



(照參頁二九一) 圖五一第

寺 提 菩 山 恐

は奥之院なる賽の河原で慥かに自分の死んだ子供が其友達と相談して居る聲であつたさうです。」

彌次馬「其聲を聞いて逃げ歸つたのです乎。憶病者ですな。」

學生甲「夢に強盜に襲はれて警察に駆け込む者もあり、或は夢を見て、側に寝て居る友人を本當に惨殺したりする實例が今日でも往々ありますから、夢に死人の聲を聞いて逃げる位は當然ありませう。」

山伏「聲を聞いた丈で逃げ歸つたのでは有りませんです。其の相談が恐い事なのです。子供は前世には人間でなくて、會津の長者の屋敷に住んで居つた蛙であつたのです。其蛙が或時長者の家の臺所に上り込んで、家の内の様子を見て、其綺麗なのに驚いて呆然として居ると、流し下で化粧をして居つた妻君、が無慈悲な女で持つて居る楊子の先で突然其蛙を突き刺した爲に、殺されて仕舞つたのです。其所で其怨を報ずる爲に、假に其女の腹を借りて子供と生れ、天死して心配させたのであ

るが、今度態々恐山まで逢ひに來たから、一つ此機會を利用して思ふ存分ひどい目に逢はせて見たいが、何か良い工案は有るまい乎と言ふ相談で有つたさうです。」

學生乙「夫は恐しい相談です。死んだ亡者どもが集つてさう云ふ事を相談して居る所では、恐山と言ふ名の出來たのも當然です。」

學生甲「恐山と言ふ名は元來當字であつて、あの地方はアイヌ語でウソリと言ふのが正當で、今でも宇曾利川と乎宇曾利地藏など書きます。ウソリと言ふのは灣の事です。恐れると言ふ意味はありません。」

二十四 三山參詣

本導寺から志津に通ふ道は險山の山腹を切り開いたもので右を仰げば千丈の岳を望むべく、左を見下せば百尋の谷底に、岩打つ水の音、物すごく、さながら仙境に近き感がある。

學生甲「此地方は昔は保土内村ほとうちと言つたものです。ホドは日本語で凹んだ所、即ち此邊は山の陰部に當るから保土内と言ふんです。夫を仙藏院が三山參詣の本導である乎の如く誤魔化して本導寺村と書き換へて仕舞つたのです。」

五九郎「三山參詣には是より外に、本當の道があります乎。」

山伏「登山口は總計七つ有りますが、庄内方面が表口で、先づ羽黒山に登つて月山湯殿山と入るのが順序ですけれど、近頃は裏口から參詣する者が多いです。昔は羽黒で修業をしてから娑婆の關を越え、生死の海を渡つて、月山に登り、極樂淨土の妙を聞き、深重の苦力に依て苦域の關を越渡り、初て寂光淨土の湯殿山に入る事が出来るものと信じて居つたものです。従つて三山參詣二度目以上の者は、裏口からでも差支ないが、初參詣は必ず羽黒表口からと定まつて居たのですが、表口からは十二三里もあり、裏口からは僅に五六里ですから、近頃は裏口の方が却て繁昌する様に成りました。」

學生乙「六が現代式です。物事は兎角表口から行つては駄目です。玄關を通るのが第一容易ではありません。夫よりは裏口に廻つて宜敷くやれば成功が早いです。神様だつて人間と同じ事でせうから、裏口が繁昌するのに不思議は有りません。」

山伏「御山の開山能除太子は、人皇三十三代崇峻天皇の御子蛭子皇子と申された御方で御座ります。蛭子と御名乗なされた程に、容貌至て醜き爲に、世間を厭はれ、發心して抖擻行者となり、東北地方へ下向せられ、先づ羽黒に修行、夫より月山を経て、湯殿の靈泉に浴せられたと言ひ傳へてあります。」

彌次馬「蜂の巢の様な容貌から蛭子と言つたの乎、骨が柔かて足が立たんから蛭子と言つたり、昔はいやな名を附けたものだね。」

山伏「夫で今度は、能く衆生の一切の苦を除くと云ふ旨意から、能除太子と改名されたのです。湯殿山に參詣すれば、癩病でも平癒すと信ぜられて居ります。」

五九郎「餘程効能の有る温泉と見えるですね。山伏修業なんて畢竟温泉へ入浴に行

くのてす乎」

山伏「さうでは有りません。山伏の修業と申すのは、普ねく山峰の巍峨たるを經歷し、心を菩提の道に懸け、諸の煩惱及び魔業を降伏し、本有佛性の妙理を觀じ、身には苦行普ねく忍び堪へ、嶺岳の峻山をも嫌はず、山巖の苔の床には、八苦の寒風に逢ひて、罪障の凝積を拂ひ、曠野原上の草の枕には、調伏難調の心馬を繋ぎ身心の二行圓滿して、理智不二の妙旨を觀ずるのが、其本旨であります。従て山峰が有する所の巖石樹木は、凡て是大日本如來の法身なりと觀じ、之を直に本尊として崇拜致しますが、唯愚蒙風俗の輩を引導するには、専ら化儀事相を示さゞれば、其機根に應じ難き故に、假に不動明王などを安置して置くに過ぎません。」

志津に着すれば、五色沼の水をあさむく冷水に浴して、夕食を終り、二間四方もある布圍を室の真中に置きて、同行者は四方より之にもぐり込み、晝の勞に假寢の夢を結び、午前三時頃起き出て、幾組となく御山をさして登り行く。夜まだ明けざ

れば、先達が振りかざす提灯のみ山腹に輝き、御山繁昌の掛聲は、彼所よりも此處よりも聞え来る。やがて夜も明けたれば、提灯は道の側に捨て置かれ、日高く昇り山險しくなるに従ひ、着衣を脱ぎて道の側に置き去るも稀ならず。

五九郎「着物まで捨てて仕舞ふのです乎。」

山伏「捨てるのではありません。歸りに着て行きます。」

五九郎「歸るまでに紛失しません乎。」

山伏「御山には盜賊は居りません。他人の品物を盗む程の人は参詣に來ません。」

彌次馬「賽銭が此通り道に澤山落ちて居ります。夫さへも拾ふ者は無いのです乎。」

山伏「湯殿山浄土口より御寶前迄は、娑婆世界で無いから、此處へ落した物は、最早娑婆に用の無い物として、之を拾はない事に成つて居ります。」

五九郎「金錢は天下國家の通寶であるのに、夫を捨て、了ふのは不都合でありません乎。」

學生甲「落ちた物を拾うて悪けれども、落ちない内に取るのは差支ないと言ふので近頃は参詣者が賽銭を上げる時には、先達が自分の笠を前に置き、其内に賽銭を投げさせて、是を懐中して歸ります。」

學生乙「旨い事を考へたものだね、地藏様と一六勝負をして、賽銭を持つて行くのよりも上手ですな。」

五九郎「地上に落ちた物は、今でも拾はんのです乎。」

山伏「まあ社務所で集めて歸ります。」

學生乙「社務所の人が拾つても、罰が當らないのです乎。」

彌次馬「拾ふ時には囃つ這になつて、ワン／＼と吠えながら拾ふのです。犬なら神様も見逃すです。」

山伏「此處から先は湯殿山の境内に成りますから、茲で皆さん新しい草鞋にはき換くつたか。」

學生乙「そんな面倒な事をせんでも好いではありません乎。」

三太郎「此先は非常に危険な難所が澤山有るので。夫て途中で草鞋が切れたり、紐が解けたりすると困難するから、此所で完全なる旅装をするので、軍隊なら武装検査と云ふ所なのです。」

實際進んで見ると案外の難所で、各員何れも一生懸命、到底談話などして居る餘暇がない。少しく安全な場所に出たので、「御山繁昌」と乎「六根清浄」と乎唱へて景氣を附ける様子が見えだが、一學生は「一根不清浄」と彌次つて、山伏から大眼玉を喰つた。

山伏「さう云ふ不信心な者が居ると、今に御山が大荒になつて、同行一同が迷惑をするから謹みなさい。あなた一人丈ではすみませぬぞ。」

一同は再び沈黙した。聞かば語るな語らば聞くな。兎に角無事湯殿山を參詣して月の山の絶頂に達したのが、午前十一時であつた。途中に嘗て名劔片山丸を鍛へた古跡



(照參頁〇〇二) 圖六一第

瀧御及須鏡子梯鏡るおに澤御山殿湯



(照參頁一〇二) 圖七一第

社神山月上頂山月

を見た。山頂には小さな沼が有り、山上一體疊々たる岩石で、樹木などは無論ない。金杯で御神酒を頂戴し、晝食を取りながら遙かに山形平原を眺望して居ると、天上に一圓の雲が見え、黒龍其尾を地上に垂れ下げて居る乎の如き形體をなして居るのが眼に附く。

學生甲「龍卷らしいですね。地文の教科書で見た事のある龍卷の圖は、丁度あんなてしたよ。」

彌次馬「龍は本當に居るのでせう乎。昨年私の地方では往來を歩いて居ながら龍に巻き上げられたが、電線につかまつて逃げて來た爲に助かつた者がありますよ。其人に聞いて見たが、本人は丸で夢中で、何がなんだか少しも知らないと言つてます。」

學生乙「龍なん乎此世界に居りませんよ。龍卷と言ふのは、空氣中に渦が卷くので、丁度沼や地を排水する時に、水が渦を卷くのと同じ事です。」

學生甲「つまり阿波の鳴戸を逆にして天上に吊した様なものさ。鳴戸では舟が下の方に巻き込まれるが、龍巻では上に巻き込まれる丈の相違です。従て龍の尾丈が天空から下つて居る様に見えるが、其頭は見えない筈です。」

三太郎「天候がそろ／＼變に成つて來さうだから、急いで出掛けませう。話は歩きながらも出來ますから。」

山伏「我々は是から本導寺に下りますから、茲で別れる事にしますが、是から羽黒山へは一本道ですから、迷ふ様な事は御座いません。」

五九郎「何里程御座いませう。」

山伏「石原三里、木立三里、茅野三里と申しますから、都合九里に成りませう。」

學生乙「また石跳七十五里と同じ論法ではありませんか。」

學生甲「本當に九里有つたつて驚く事は有りませんさ。是からは全くの下り坂で、重力が仕事をするのですからね。今丁度正午です。日没前には充分羽黒に到着しま

すよ。」

同行四人は山形の平野を後に顧みながら、庄内平野を指して月山を峯續きに降つて行つた。今朝來の上晴天は次第に變りかけた。高山特有の氣象として、午後荒れるのは普通である。夫故登山者は未明に出發して、正午前後までには下降するを慣例として居るのである。谷底の方で轟く音が聞えて來た。言ふ迄も無く雷である。始は足下で雷がなり、自分等は雲上人て有つたから平氣で居たが、次第に下るに従て、雲霧四方を鎖し、竟には大粒の雨が襲うて來た。大急ぎに急いだ爲に、大雨沛然としてそゝいだ頃には、幸にして道が木立の中に這入つて居た。雷鳴は天地に轟き山谷に響き、電光は上下左右に閃めく。降りしきる雨は大樹の小枝から大枝に集まり、瀧の如く幹の中途から飛流して居る。電光上下に閃いたので、扱は落雷と思ふ間もなく、地響は恐しく左右の脚にこたへる。一言半句も出さずに、唯々歩みを急ぐのみである。三里の森林は殆んど夢中で通過したので、忽にして茅野が眼界に開

いた。大雷雨に際して平野を通過する程危険な事はない。落雷に打たれたら、生命には掛換が無いのである。幸にして一軒の茶屋がある。是が所謂救助小屋乎も知れん。二十分間ばかり休息して居る内に、雨の空が晴れた。

學生甲「占めたぞ、モ、大丈夫だ。西が晴れたから。」

學生乙「茲も晴れます乎ね。」

學生甲「私が子供の時に、麥もやしと云ふ題で、雨曇りと解き、其心は飴(雨)となる、と云ふ事を聞いた事があります。」

三太郎「天氣は一般に西から東に移つて行きますから、西が曇れば雨となり、西が晴れたら其内に晴天となります。」

果して雨が止んだから、大急ぎで出掛けた。既に夕方に近いので、心が急ぐのである。既にして人里近き處に來たが、道が二本に分れて居る。左せん乎右せん乎と迷うて居ると、左側にある茶屋の者が、左の道を下りなさいと注意してくれたので、

有難うと御禮を言つて、五六丁行くと、五十ばかりの男に行き會つたので、羽黒山迄何町位ありませう乎と尋ねたら、是は手向てむかひに行く道です。羽黒山に參詣するのなら五六丁手前で、右に岐れる處があつた筈ですと教へられたので、戻つて來て右の道を進んだら、間もなく羽黒山神社の境内に出た。

學生甲「茶屋のヤツは、なんだつてあんな事を言つたのだらう。御禮を言つたのが残念だね。」

學生乙「御休みなさいと言つても、我々が返事もせずに行き過ぎようとしたからせう。」

三太郎「羽黒山に參詣するには、手向の坊に泊まるのが正式だから、手向の方へ我々をやるつもりなんだらう。」

學生甲「手向迄下つて、夫から再び十八丁の石段を昇つて參詣するのでは、大變な損になりますね。」

學生乙「我々は損をするが、村内の者は夫だけ利益を得る勘定でせう。」
社内に來て見ると、二三人の若者が、甲の長さ六七寸程もある龜を持つて立ち話を
をして居る。聞く處に依れば、先刻の大雷雨に際して、此龜が天から降つて來たの
であつた。無論何處かて、龍卷に巻き上げられて、茲に降つたものに相違ない。天
から龜が降つたのは、誠に芽出度いと言ふので、昔の日本ならば、天龜と年號でも
改める筈であつたらうが、龜には全くの災難である。

二十五 大物忌神社

翌日は庄内平野を横斷し、大山町に善峯寺を見物し、日本海の岸に沿へる湯之濱
温泉に出て、茲に一泊して三山たまつた身體の垢を流す積りであつたが、我々の服
装が貧弱な爲か、手荷物も持たない凡來者と見た故乎、鶴龜屋と云ふ旅店で門前拂
を喰つた。

奇「三山の崇りの恐るべきは、今に成つて知れたては有りません乎。」

學生甲「私は鎌倉の光明館で門前拂を食つて、癪にさはつたから、五六丁戻つて來
て人力車で乗り込み、女中が玄關に平身低頭して入らつしやいと言つて居る暇に、
さつさと階段を昇つて仕舞つたが、先刻の客と氣が附いて、變な顔をして居るのを
見た時には痛快だつたね。」

學生乙「旅店で有りながら旅人を泊めないのは、一體不都合では無い乎。巡査の處
に行つて一つ談判して來よう。」

二三度聞き質して、駐在所の位置が知れたと見え、學生が巡査を引き連れて來た。
今度は巡査の先導で押掛けると、

旅屋主人「實は全く部屋が無い譯では御座いませんが……」

學生甲「有るなら泊めて呉れても良いては有りません乎。まさか喰逃する程の者で
も有りませんぞ。」

旅屋主人「どう致しまして、十疊間が一間只今は明いて居りますが、之は既に約束が致して有りますので。」

三太郎「長く滞在するのでは有りません。今夜一泊する丈ですから、今夜あいて居るのなら、差支ないでは有りませんか乎。」

旅屋主人「福島縣の知事閣下が明朝御來臨になる筈に成つて居りますから、明朝間違なく御室を明けて下さるならば、差支御座いませんです。」

五九郎「鹿島では郡長さんだつたが、湯之濱では知事さん乎。」

學生「鹿島でもこんな事が有つたてす乎。」

五九郎「是とは違ひますが、郡長様でなければ、上等の御膳を出さないと云はれたのです。」

學生「田舎に來ては郡長乎知事でなければ駄目だね。」

三太郎「新潟から酒田に通ふ汽船が、此處を通る筈ですが、今日は既に通つたてせ

う乎。」

巡查「未だて御座います。大抵午後四時に寄りますから、間もなく参りませう。」

三太郎「汽船があるなら、酒田に往きませう。別に山中で夜に成つた場合とは違ふので、そんなに無理に願つて泊めて戴くにも及びませう。」

一行が早速海岸をさして急いだので、巡查はあつけにとられ、旅店の主人は鳶に魚をさらはれた様な恰好で、我々を見送つて居た。遙の沖には黒烟次第に濃厚となり、暫時にして汽船が寄港したので、直に之に飛び乗り、鏡の如き日本海の涼風に吹かれながら、甲板に立つて水陸の景色を眺め、日の暮るゝ頃最上川の河口に入り、酒田に一泊した。

早朝日和山に立ちて北天を眺むれば、傲然として雲際に聳えて居る七千餘尺の高山が殊の外眼に付く。是が即ち出羽の鳥海山で、西方の山の脚の盡くる處は日本海で遙に飛鳥が見える。嘗て強力無双なる朝比奈が、鳥海山頂を蹴飛ばした所が日本

海に落下して、此島が出来たものである故に、此處から飛島を見得る時てなければ、
鳥海山の頂上を見る事が出来ぬと、土地の老人が説明して呉れた。

學生甲「飛島は別れの島、或は鶴路之島と言ふ名で知られたもので、
別るれどわかると思はず出羽なる

つる路の島の絶えずと思へば

と云ふ歌がある。」

學生乙「夫が古歌乎、丸て句になつて居ないではない乎。」

頂上は明かに二個の火山丘よりなるを認められ、最も高きは享和年中の噴出に掛
る新山で、海拔二千百二十三米と地圖に記されて居る。之を包圍せるは七五山連嶺^{なづね}
其西方遙に分立せる筈ヶ嶽より下は、傾斜急にして中腹に瘤の如く出て居るのは、
観音森と知られた。

酒田から吹浦までは半日の行程であるが、炎天と先日來の疲勞とて非常に苦しか



(照參頁〇一三) 圖八一第

つた。一行が大概消化器を損じた。一度休息すれば氷水を四杯にラムネを三本平げ
る程の豪の者であるから無理もない。烏海山には國幣中社大物忌神社が祭られて在
り、吹浦は其表口である。

吹浦は田舎の寒村で宿るに足るべき旅宿もないが、夫を通り過ぎて一哩程行けば、
湯之田温泉がある。其處に一泊する方が往復二哩の行程を損するけれども、却て策
の得たる者であると説明せられ、湯之濱温泉にこりたので、酒田の旅店から紹介状
を持つて出掛けた。

學生乙「此紹介状には何が書いて有るだらう。」

學生甲「宿屋の紹介状だから變つた事もあるまい。御客様四名御紹介申上候位にき
まつて居るさ。」

五九郎「此客は茶代が少いから、其積りてと言ふ様な注意をしたの乎も知れんぞ。」
學生乙「一つあけて見よう乎。」

三太郎「紹介状と言ふのは、一體其本人に一應文面を見せるのが禮でせう。」

五九郎「あけて仕舞つたのか、夫では持つて行く事が出来ないではない乎。」

學生乙「元の通りに封じませう。博士一行を御案内申上候間、疎末なき様丁寧に御取扱下され度候。と書いてありますよ。」

學生甲「宿屋の紹介状はどれ丈の價値が有る乎ね。單に宿屋同志の連絡を取る丈で、反對派の宿屋に客を奪はれぬ様に、宿屋自身の利益から割出したもので、客の利益の爲に書くものではありませんまい。」

三太郎「海岸の景色はなかく佳いですね。」

學生乙「東北の田舎にも、こんな佳景があるから、馬鹿に出来ないよ。」

五九郎「日本三景之一が東北に有るでは無い乎。天然の景色は東京や大阪の様な處に有り様がないです。山と言へば播鉢山位、川と言へば隅田川の様な泥水ばかりでせう。」

學生甲「松島に次いで景色の佳い處が此近所にある筈です。芭蕉の紀行文に依ると、松島から此邊を通つて象潟きさかたの景色を見に往つて居ります。」

五九郎「象潟と云ふのは鳥海山が出来た時に陥没して、海に成つた所だと傳説に残つて居ります。」

學生甲「昔此邊に羽縣と云ふ半島があり、東西十里南北二十里の入海を成して居たが、嘉祥二年以後數度の大地震で大海と化し、其一部分残つたものが飛島であると書いた記録もあります。」

五九郎「近頃の研究では、飛島が鳥海山系に屬せずして、却て彌彦山系に屬すると言はれて居りますよ。」

湯之田の温泉に着いて見ると、二三軒の家が海岸にある。學生の一人が開いて見て、復び封じた紹介状を持つて、旅店の玄關に立ち案内を乞うたが、満員と云ふ名義で門前拂を喰はされた。思つて通へば千里も一里と言ふが、肘鐵砲を喰うて空戻

りする一里は、正に千里の行程にも比較する疲勞を感じた。夕陽は遠慮なく頭上を照らし、鏡の如き日本海は更に之を照り返して、山は眠れるが如く静止して居る。松の木蔭に休息する事幾度なるを知らず、日没して後辛うじて名ばかりの宿屋に投じたが、便所に御百度を踏む者もあるのて、翌日は滞在と決定した。折角の好意に成つた鱒の御馳走も、丸煮である爲に、碗の蓋を開いた丈で顔の色を變へて仕舞つた人もある。

學生甲「大物忌神社と言ふのは變つた名です。日本には物を嫌ふ神様も有るてせう乎。」

五九郎「ものいみと讀むのではありますまい。もつきと言ふ鬼が、昔迦毘羅衛國內の桃林の下に住んで居つて、近郷近在に大威力を示した爲に、他の小さい鬼共は寄り附けない。其處で物忌もつきと書いて門前に張つて置けば、妖魔鬼神は其名に恐れて、其家に近寄らないのであると、或老人から聞いた事がありますよ。」

學生乙「巡查何之誰と書いた門札を出して置くと、乞食や押賣が素通りして行く様なものですね。さう云ふ高い所に、大物忌神社を立て、置けば、兩羽地方には小さい鬼共が入り込めないと云ふのですか。」

學生甲「迦毘羅國と云ふのは印度の一部ですが、印度には桃林が無い筈ですから、夫は支那で作り上げた附會説である乎も知れませんが、古事記にも、桃に不思議な力がある様に書いた所があるが、是なども支那の思想の混入乎と思はれますね。」

三太郎「必しも支那から來たとばかりは限りません。日本語では、桃と股とは同音であるから、桃が割れて桃太郎が生れたなどは、少しも不思議ではないでせう。佛國語でも、桃と婦人の陰部とは同名で、僅に單數と複數とで區別して居る。して見れば、桃に不思議な魔力があると云ふ信仰の起源も、推察が出來ませう。併し物忌の事は必しもモッキと云ふ鬼の名とは限りません。昔は神に供ふる御饌其他の物を齋み清めるを職とする處女を、物忌ものいみと呼んだ例もあります。」

學生乙「處女の股なら大魔力を持つて居るに相違ないが、昔は兎も角として近頃では日に吉凶があり、例へば何の日には嫁娶や著袴を忌み、何月には轉宅を忌むと言ふ風に定まつて居る様ですから、物忌と言ふのは夫から出たのではありますまい乎。」

五九郎「君にも似合はず、良くそんな御幣かつぎのやる事を知つて居るね。」

學生乙「先年僕の先生が、新宅を築いたので、轉宅をしようとしたが、奥様が大のかつぎやて、何でも來月は月が悪いと乎、方角がどうと乎言つて、到底建具も出來ない家に、一晚無埋に宿泊に行つた爲に、風邪にかゝつて入院した事があるので、迷信の恐しいのを記憶して居るのです。」

學生甲「君の話は物忌の事ではなく、方違と言ふのではありません乎。方違と言ふのは、例へば本郷に居る人が麴町に轉居しようとした時に、其方角が悪いと言はれると、先づ假に小石川に轉居して、夫から麴町に行けば、方角が違つて仕舞ふから差支ないと言ふのです。」

學生乙「そんな簡単な仕方て、神や鬼を誤魔化す事が出来るの乎ね。」

學生甲「昔の人の考は簡單だから、其考から割出した神様だつて簡單でせう。例へば徳川時代などは、素性を非常に八ヶましく言つて、百姓町人は殿様に御目通りも出來んとして置きながら、其百姓町人の娘も、一旦家老の養女と云ふ名義にすれば、夫を奥方にする事も出來たてせう。つまり、是と同一思想から割り出されて居るのです。」

五九郎「そんな事は何も昔ばかりではありません。現代の日本にだつて、いくらもありません。」

三太郎「物忌と言ふ事では面白い事があります。或女が若い僧侶に頼んで、毎日其日に爲て悪い事を書き止めてもらつた處が、初の中は和尚さんも眞面目に坎日なり他出すべからずと乎、凶會日なり萬謹むべしと乎、何品にても澤山喰ふべしと乎、書いて居つたが、段々末の方になると、書く種子が盡きたので、飯を食ふべからず

と乎、小便する勿れなどと、出駄良目に書いて與へたのを、女は熱心に守つて居たが、竟には、本日小便すべからずと云ふ日が、二三日續いて出たので、我慢しきれなくなり、左右の手にて尻を抱へて、如何にせんくとよぢりすぢりして居る内に、氣絶して仕舞つたと言ふ事が、宇治拾遺物語に書いてあります。迷信と云ふものは恐ろしいもので、無理想、無節操、一人前の人間にも足りない説教者や、奸智の口車に載せられ、占筮、巫術、印符、呪詛、禁厭等を信じて、自己一身のみならず、親族知友を誤まる者が、大正の今日でも、案外多いのには驚きます。」

やがて中食の時刻が來たが、胃腸を損じたのと、料理が悪いのとて、食事が少しも進まぬ。折角宿屋で御馳走に出した頭附きの魚も、其儘手も附かずに残つたが、給仕に出た婆さんは、之を大切に押入に仕舞込んだ。隣室に五十歳程の客が一人滞在して居る、田舎の骨董屋で、午後からは室の四方に軸物を掛け並べたから、退屈し過ぎに見に行つた。

學生甲「此達摩様はいくら位します乎。」

骨董乙「夫は十三圓で御座います。表装は少し古くなりましたが、探幽の筆であります、滅多に得られない軸物で御座います。」

學生乙「探幽と言ふのは何年位前の人です乎。」

骨董屋「探幽と申しますと、徳川三代將軍の頃で御座いますから、彼是五六百年には成りませう。」

學生乙「五六百年前の物としては、割合損じないですね。夫が僅か十三圓とは案外安いね。」

骨董屋「之は佐竹様の元家老を移めて居つた方が拜領したので、寶物として丁寧に保存して置いた爲に、全く新しい様に見えまするので、全く天下一品の優物です。かう云ふ物は二度と我々の手に渡るものではありません。旦那方が東京に持つて行きなされば、何萬圓何千圓にも値が出る品でありますが、私共は資本が薄い爲に

出掛て行く譯に行かず、よしんば非道工面をして出掛けても、賣れる迄には雑費まけして、何にも成りませんから、御安くして差し上げます。一つ如何で御座いますか。」

學生乙「何萬圓の値がある品を、十三圓に買つては、不當利得て罪に當るから、まあやめて置ませう。此山水はいくらなんだい。」

骨董屋「その方は、少々値段が張つて居ります。何にしても、藤田東湖の書いた物に、山陽が賛をしたのでありますから、夫に絹地で三段表装と來て居りますので、ごく掛値のない所を申しまして、二十八圓五十錢で御座います。」

學生甲「藤田東湖が書いたのに、山陽が賛をするなんて、そんな時代の錯誤した事は有り得ないではない乎ね。」

骨董屋「有り得ない筈の物が、此通り有りますから、真に天下一品なので、其所に本當の値打が御座いますのです。何處にでも有る様な品なら、いくら安く上げられ

れます。」

骨董屋相手にひやかしたり、碁を圍んだりして居る内に、夏の永い日も暮れて仕舞つた。骨董屋さんは酒を一本注文して膳に向つたが、給仕に出た婆さんは、晝食の際に押入に仕舞ひ込んだ頭附の焼魚を出して來て、客に進めかいので、婆さんは夫を自分で喰べながら、御酌をして居る。斯ういふ骨董屋も、自分一人で飲んで居る譯にも行かず、婆さんに杯をささざるを得ない。敵は本能寺にあり、是で婆さんが焼魚を客に進めた目的が達せられた筈である。明朝は午前三時出發と云ふ豫定で、食後間もなく床に就いた。

二十六 鳥海登山

豫定の通り床を起き出て、見ると、下弦の月は中天に輝き、晴れ渡れる空に大きな星のみ數少く残つて居る。出發の準備は出來たが、案内者が來ないので、惜しき

時間を浪費し、愈々出發したのは午前四時である。吹浦より一里と刻んだ里程表があるので、携帯せる歩度計を見ると、約三哩を指示して居る。更に二哩半進んだ所に、二里の里程表がある。二哩半が一里に相當するので、無論何等の不思議もない。唯吾人の携帯せる歩度計も、地方の有志家が建てた里程表も、共に正確である事を事實の上に證明した文である。間もなく夜が明けたので、提灯は路傍の藪中に隠して仕舞つた。吹浦口は立派に道路が修繕されてあると聞いて來たが、噂に違はず田舎の山道としては行き届いた方で、靴の儘で登るに少しも困難を感じぬまでに、必要なる個所には、石や丸太で階段が造られてある。唯登山の常として、清水の缺乏に閉口するのは、此所でも同じであるが、盛夏の今日でも、所々に雪が残つて居るから大に助かつた。山腹の小高き點に到達する毎に、腰を下して日本海沿岸の景色を眺望する。但し其目的は、果して精神を慰めんが爲に佳景を賞するにある乎、乃至は疲勞せる肉體を慰めんがための休息である乎、夫は同行者の面々必しも一致

しては居らぬ事明かである。案内者は初に一行の荷物を全部持つてくれたので有つたけれども、學生が大元氣で、どん／＼先に登つて行く故に、竟に其荷物の一部を返さんと考へ、

案内者「學生さん方は運動盛りですから、こんな山に登るぐらゐは、一寸散歩に行く様なものでせう。」

學生乙「そんなものだね。此富士へ散歩した事があるが、日本一の高山と言つても、登つて見れば低いものですよ。」

案内者「富士山ならば、一萬二千四百尺と言ふのですから、何と言つても高いには相違ありませんよ。」

學生甲「君等は一萬と言ふ數に驚いて、大層もない高い山だと思つて居るが、一萬二千四百尺と言つても、其實は一里にも足らないのですよ。」

案内者「一里にも足らない、夫ては地理の本に書いて有るのは、うそなんてす乎。」

學生甲「一萬二千四百尺あると言ふ事はうそでないさ。けれども一里には足りないのです。」

學生乙「一里は尺に直すと一萬二千九百六十尺となるから、富士山よりは五六百尺高くなりますよ。」

案内者「此御山は、ざつと七千百尺あると申して居りますが、夫では半里より少し多い丈ですね。」

學生乙「夫だから、こんな山などは、足駄ばきで散歩が出来ると言つて居るのさ。」

案内者「口で歩くのでないから、何とでも言ひますが、其實足の方は大弱りなんては有りません乎。」

學生甲「誰がこんな山ぐらゐに弱るもん乎。我々丈ならマラソン競走のつもりで、一息にかけ登るんだが、同行者もあるから遠慮して居るのさ。」

案内者「そんなに元氣が良いのなら、一つ此御荷物を願ひます。四人分を引き受け

ては、いくら専門の強力でも叶ひませんから。」

三太郎「旨く乗せられたね。昔から、おだてともつこには乗りたくないと言つて居るのは、其處の事ですよ。」

自慢が禍をなして、學生連は自分の手荷物を自分で持つて登らなければならん立場に成つて來た。口は禍の門とは能く言つたものだ。旅行には慣れて居るので、少しも勞れないが、急がず騒がず、牛の如く案内の後に附いて登つて居る。三太郎と五九郎とは、くすくす笑ひながら濟まして居る。海拔二千三百尺の山腹には鳥居があり更に一千尺程登つた時に、險はしい處に出た。是が傳石坂と呼ばれて居る名所である。遙拜所に一休みして、氣壓計を見ると、五千五百尺を示して居る。力餅は例に依て大好評である。茲に猫額大の平地があるが、其實は南方に開口せる火口の外壁で、舊爆烈火口の湖化した物を鳥之海と稱し、此湖水を隔て、鍋森や笠ヶ嶽屹立し、更に頭を廻らせば、東大澤西大澤の絶壁を隔て、稻村ヶ岳を望む事が出来る。

力餅に元氣を回復して出發すれば、間もなく仙者谷の急坂である。

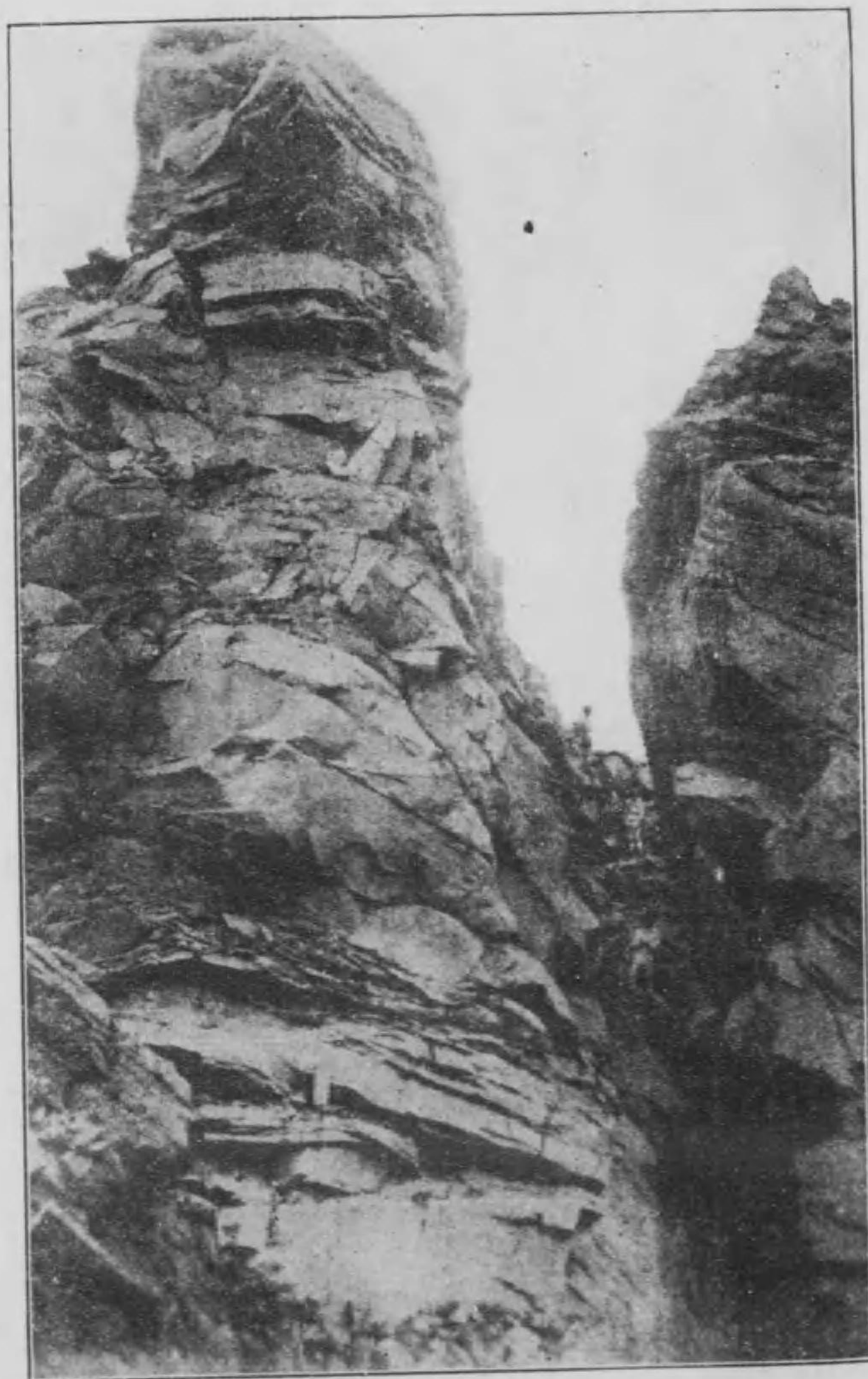
學生甲「直ぐ其處に里程表が有つたばかりで、もう次の里程表に來たてすね。」

五九郎「彼は一哩足らずは來て居ませう。」

學生乙「一哩足らずで一里になるのです乎。亂暴な里程表だね。」

三太郎「登山用の里程表は、平地のとは違ひます。我々が旅行する場合に、里程表の必要を感ずるのは、幾何學的の距離が知りたいのでなくて、其處を歩くに要する勞力の多少が知りたいのです。夫ですから、平地で一里歩いたと同一の勞力を要する丈の山道を一里として里程表を立てたのです。あそこらから茲迄は、僅に一哩弱でも、こんな急坂であるから、平地を一里あるく丈の勞力と、時間とを要するのです。」

大約千四百尺程登つて、大物忌神社の宮祠に到着した。此處から東南を眺望すれば、仙者谷を隔て、右には御峯、文珠岳、伏拜岳あり、續いて左方には行者岳、七高



仙 和 岳 (照參頁六二二) 圖九一第

山等がある。是は何れも單獨に峯と乎、岳と乎言ふ名を持つては居るが、其實は爆烈せる熔岩塊の高大なる突起に過ぎん。宮祠の左後方に當りて暗灰色なる裸岩が疊々として堆積せられて居るのが、特に吾人に驚異の念を起さしめる。是が即ち新火山の中央丘で、新山或は享和岳と呼ばれ享和年間に噴出して、鳥海山上更に山を築いた部分である。天然に生ぜる大龜烈の間隙を蟻の如く這ひ行き、其絶頂に登る事が出来た。鳥海山頂一隻の手は、臨時に奥羽地方に屹立せる最高のものもある。

頂上に達したのは午前十一時であつたが、無上の好晴天で、日本海は勿論、兩羽の連山廣野は一望の下にある。南の方を見下せば、蕨岡口よりの登山道あり、北に向て右手に、矢島口への降り道は、蜘蛛の絲を引けるが如くかすかに認められる。神社の隣には板敷の掘立小屋があり、登山者假泊の便に供して居るが、僅に雨露を凌ぐに足るのみなる事は言ふ迄もない。

三太郎「此處に泊れるんだね。どうです、勞れたなら泊まりませう乎。」

學生甲「正午少し過ぎた丈ですよ。今頃茲に泊つても、日の暮れる迄が退屈して仕様がありますまい。」

學生乙「登りとは違つて是からは降る丈ですから、大した事はありませんまい。」

五九郎「私が富士山に登つた時は、御殿場を暗い内に出發して、絶頂に夕方五時頃着いたが、降りには、頂上から僅か三時間餘で須走迄來ましたから、高山は登りが苦しいけれども、降りは案外楽なものです。」

案内者「一時頃ですから、是から降れば、明るい内に矢島迄は樂に行かれます。」

學生乙「勞れたら轉がつても獨りて降りて行くてはない乎。こんな板敷の上に寝て澤庵を噛ちつて居るよりは、矢島に降りた方が氣がきいて居ます。」

三太郎「夫ては行きませう。皆さん膝栗毛は大丈夫でせう。」

案内者「是から先は御覽の通り一本道で、峯傳に下りさへすれば矢島に行けますから私は是で歸ります。今日は矢島へ下りましては、非常に勞れて、明日復た山を越

えて歸る事が出来ませんから。」

我等一行四名は、案内者に別れ、斷岩を飛び下り、氷雪を涉り、山麓を見掛けて急行直下した。道が険はしいので、話をして居る程の餘裕がない。午後四時には平野の如き地形の場所に達したが、茲に一軒の行者宿があり、多數の宿泊者が居る。是を見て一と安心し、少しく前進せる後に、平野に立ちて後方を顧みれば、山頂は遙に雲を突いて、其雄姿を示して居る。半分残して居つた握飯を此處で喰つて居ると、二人の學生が一人の案内者に連れられて登つて來た。

五九郎「今行つたのは二高の學生ではないです乎。」

學生甲「先刻見た行者宿に一泊するのでせう。」

五九郎「物好きですね。矢島を中食後にも出發したのだらう乎。朝立ちさへすれば、何もこんな山中に泊らなくても良い筈ですのに。」

學生甲「午後から立つたとしても、茲まで登るに四時間かゝつた勘定だから、急い

て降らないと、我々は明るい内に矢島に著けませんね。」

平野乎と思つた地盤は、行くに従つて復び傾斜を増し、山らしく見えたり、平均らしく見えたり。二里行つても、三里歩いて、同一地形で、家も見えねば、通行人にも逢はぬ。將に暮れんとする午後六時半、道は森林中に在りて、岐路に會した。左せん乎、右せん乎、見渡す限り只樹木あるのみで、四方全く平等である。

學生甲「地圖には此道が書いてありません乎。」

三太郎「今我々は何處の邊に居るの乎、見當が付かんです。地圖には、矢島の手前一里位の點に岐路がありますが、夫が此所であると、左は釜ヶ臺に通じ、右は矢島に行く筈です。」

學生乙「夫なら右に行きませう。」

三太郎「けれども、其處ならば、海拔千百尺の高さですのに、氣壓計を見ると、此通り二千二百尺を示して居ります。夫ですから、氣壓計が正しいならば、更に千尺

以上降つてから岐路が有る筈になります。」

學生乙「岐路に現に茲に有るのですから、夫に間違ひはないです。氣壓計が違つて居るのでせう。」

三太郎「餘り急に高い所から低い所に降りましたから、氣壓計は狂ひを生じたのでは有りませんか乎。」

五九郎「今迄、そんな例が有りませんがね。」

學生甲「頂上から茲まで丸五時間あんなに急いで降つたのですから、矢島へは一里位しかない筈でせうから、氣壓計よりも地圖の方が信用されますね。」

三太郎「外に仕様がなから、右に行きませう。若し矢島に行く道でないとするれば、猿倉と云ふ地方に出る筈ですから」

進む事數町にして復び岐路がある。幾度も迂曲する。つまり迷ひ込んだのである。日既に没して星の光は漸く小路を認める頃には、殆んど夢中で歩きまはつた。

二十七 山中之一夜

登つたと思ふと澤に下る。右に曲つて少し行く、左に折れる岐路がある。分別して居る暇が無い。兎に角少しも早く樹木の無い所に、蒼天の見ゆる場所に、前方を望み得る地點に達したいのが、唯一の希望である。

五九郎「野原に出ました。併し一點の燈火も見えないから、まだ／＼村落は遠いやうです。」

學生乙「全く勞れて仕舞つたです。一寸休んではどうです乎。」

三太郎「こんな場合に一時休んだら、夫れ切りて其處に野營するより外に仕方がなくなります。兎に角村落の目當が付くまで我慢をなさう。」

五九郎「右手に屋根の様な物が見えますよ。」

學生甲「番小屋です。呼んで見たが人は居りません。」

三太郎「番小屋が有る位なら、何れ人里から遠くは有りますまいから、其内に燈火が目付かりませう。」

學生乙「七時半乎八時頃でせうね。村があるなら、燈火が見えさうなものだが、向ふの方面原野で、其先きは山脈が連らなつて居るでは有りません乎。」

五九郎「道は少し廣くなつたが、段々下りが急になつて谷底に行きます。こんなに暗くては危険で進めませんね。」

三太郎「戻りませう、先刻見た番小屋に一泊して、明朝行きませう。」

衆議一決して、數町戻り、火を點じて小屋を點検すると、掃鉢を伏せた様に、ラブランド土人の小屋其儘に作り上げたものに、中央に嘗て火を燃いた形跡があり、小屋の周圍には、丸太を以て嚴重に柵を作つてある。遙に前を望めば星の薄き光に見ゆるものは山又山で、一點の燈火もなく、後方を顧みれば、烏海山の雄姿は、暗みを破つて屹立して居る。

學生乙「丈夫な棚ですね。此邊は熊でも出て来る恐が有るのでありますまい乎」

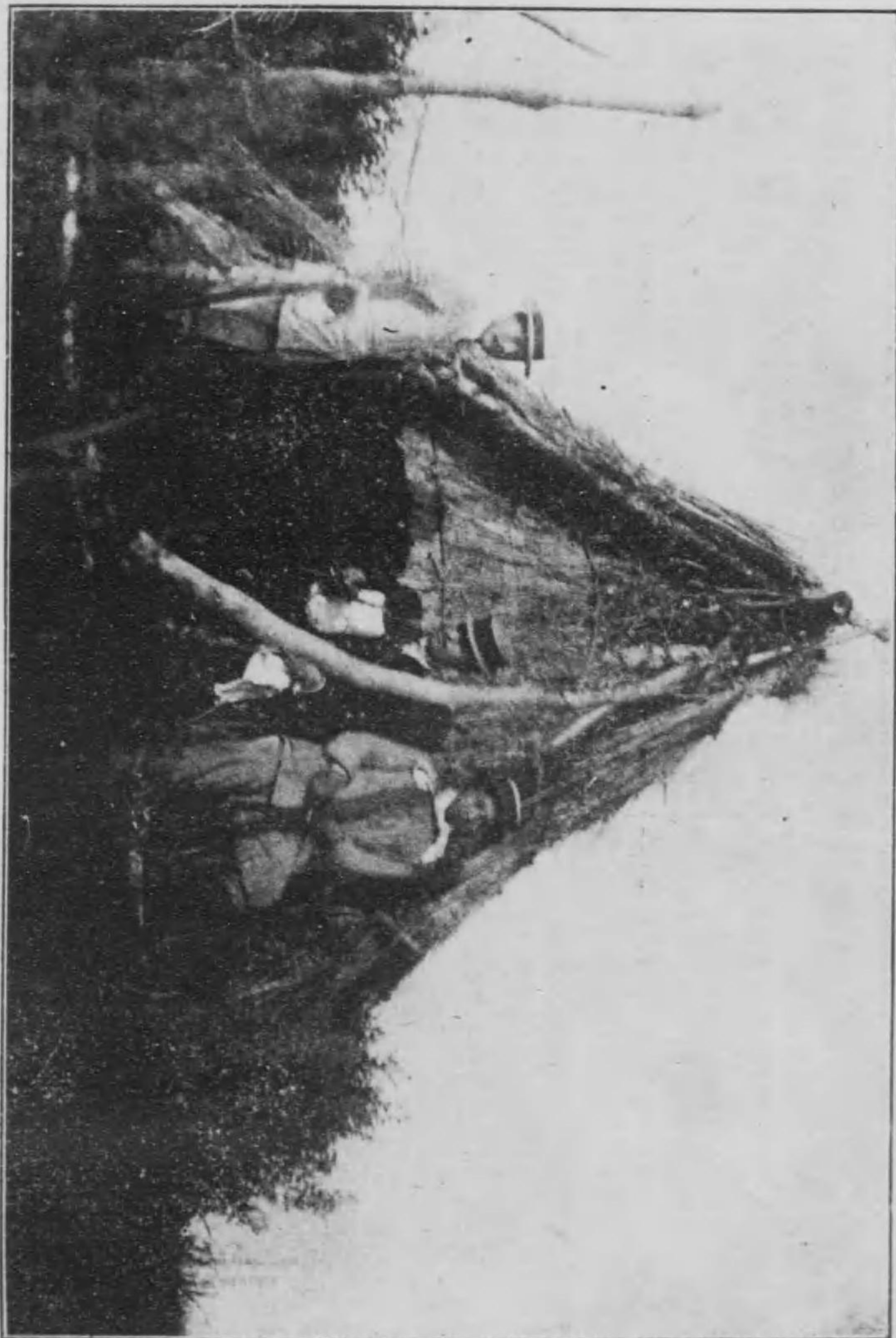
三太郎「そんな心配はないよ、兎に角枯木を集めて来て、盛に火を燃やし、其周圍に油紙を敷いて寝ませう。身體を冷やすのは何より毒ですから。」

五九郎「二三丁戻つて右に一丁程入りますと水がありますから吞んで來なさい、晩食の代りと思へば、一杯の水でも、シャンパン以上の味が御座います。」

學生甲「右手の方に、大きな川が流れて居る様な音がしよすね。」

五九郎「あれが鶯澤と言ふの乎も知れません。さうすると、氣壓計は海拔二千尺をさして居るから、地圖上で判斷するに、此處から東北に當つて、三里以内に村落がある筈になりますから、別に心配する事はありません。今夜ゆつくり休んで、元氣を回復すれば、明朝は三時間歩けば、必ず村落に出られます。鶯澤を下れば、夫が子吉川に入り、子吉川は矢鳥町に流れて行きます。」

學生乙「私は寝ますから、若し萬一の事があつたら、起して下さいね。」



(照參頁四三二) 圖〇二第

三太郎「安心して眠りたまへ。熊が居つても、雪が積つて食物の盡きた節でなければ、人を襲つて來ませんし、人間ならば我々を山賊と間違へて、先方が逃げて行きますから。」

氣が張つて居るので、少しも眠氣が出ないから、小屋の外に出て見ると、下弦を過ぎた月は既に可なりの高さに昇つて居る。一點の曇りもなく、大小幾千の星は燦爛として黄紅白紫の光を放つて居る。

三太郎「火星も土星も東の山から昇つて見えて來ました。今夜などは、天體の研究にはあつらへ向きて御座います。」

五九郎「是が禍を轉じて福となすと言ふ物乎ね。わざわざ修業の爲に、山に籠る人さへ有るのですから、路に迷つたと思はず、天體の研究に來たと思へば宜しい譯ですな。」

三太郎「まあさう思つて居るより外に仕方がないですな。浮鳥神社で御話した時

よりは、夜が更けて居りますから、北斗星は地向に近く下り、一部しか見えない様ですが、カシオペアが立派に見えますから、北があつちである事は直ぐ知れます。」

學生甲「丁度都合好く真北の方にあんな大きな星が有つたものですね。」

三太郎「こんなに澤山に星が有るのですから、どの方角を指して見たつて、其方に近い所に一つの大きい星が有りませう。」

學生甲「併し丁度真東と乎、丁度真南と言ふ事になれば、さうは行きませうまい。」

三太郎「北極星でも、正しく真北と言ふ譯ではないのです。少しは真北から外れて居ります。」

學生甲「北極星が真北でないとなれば、真北は磁石で決定するてせう乎。」

三太郎「磁石は丸であてになりません。精しく言へば、一日の内でも、磁石の向く方角は少し宛變ずるので、三百年、五百年と經つ間には、二十度も三十度も方角が違

つて來ます。例へば、巴里で十六世紀の中頃から、十九世紀の初まで、二百七十年間に丁度三十度變化しました。従て、先祖の代に磁石を當てにして南向きに當てた家が、今ではずつと東南の角によつて居ると云ふ事になります。」

學生甲「夫ては、家相見などが方角を八ケましく言つて、便所を辰巳の角に置いては悪いと乎、東北が鬼門だから門を建てるなど乎言つて、彼等は凡て磁石をあてにして方角を決定するのだから、時々便所や門を引越さなければならぬ筈ですね。」

三太郎「折角御幣かつぎが家相を八ケましく言つて建築しても、二三年立つ内には、病人が出來たり、主人が死んだりするのが當然でせう。家相や地相を見る本人が、其原理を誤解して居るのですから。」

五九郎「鬼門と言ふのは何てす乎。」

學生甲「東北の角が鬼門で、此方を塞がなければいけないと、昔から言つて居るのです。」

三太熊「東北と言へば、丑寅の間だが、牛と虎の相の子なら、頭に角があつて、虎の皮をふんどしにして居る鬼に相當するてせう。其處で東北の方に門を付ければ鬼が入り込むから、禍があると、講談師が笑談を言つたのを、本氣に信ずる者が出来たらしいです。迷信と言ふものは、起源は大概そんなものが多いです。火事の際に女のゆもじを張れば、類焼を免れるなど言ふのも夫です。」

學生乙「私が東京に著いた晩に、火事があつたが、其際に旅籠屋の女中が赤い旗を竿の先につけて掩つて居つたらをかしな事をすると思つて居たが、あれが火事に焼けた禁壓なんてす乎。」

學生甲「赤い旗と見たのは、矢張その女中の腰巻だつたてせう。腰巻を振つた位で、火の子を追ひ拂ふ事も出来すまいがね。」

三太熊「婦人が自分の腰巻を利用して、防禦する事の出来るのは、火の子ではないので、ひとへと一字違つて居るのですが、發音が似寄つて居るから、夫を禦ぐには、

腰巻を嚴重にすればよいと言ふ落語から出来た迷信です。丑寅の間だから、鬼であると言ふ説明は、言葉の上から言へば、甚だ面白いですが、事實の上からこんな説を立てた人もありません。夫は支那では歴代の皇帝が、三百年と乎、五百年と乎で滅亡するが、其際に前者に代つて皇帝となる者は、大概支那の東北方から起つて、京畿地方に南下するのであります。秦の始皇帝が、萬里の長城を築いたのも、此東北地方の強敵を禦ぐ目的なので、支那では、東北の方が、何朝の代でも、恐るべき強敵であつたのです。夫ですから、此方角を鬼門として、要塞を堅固にしたので是が其後日本に傳つて一種の迷信と成つたのです。」

學生甲「さう言へば日本でも鬼門を恐るべき理由があつたてすね。京都に攻め上つて、政權を握つた者は、大概京都より丑寅の方角から起きた者であり、徳川時代になつて、最も恐れられたのは、江戸から丑寅の方に居城を構へて居る、伊達政宗ですから、鬼門を堅く塞ぐ必要があつたてすね。」

五九郎「徳川は東北の方に、夫れ程注意して居りながら、却て反對に、西南の方から攻められて、亡びたては有りません乎。」

三太郎「夫が即ち裏鬼門に當るのです。」

學生甲「さうすると、必しも迷信でなくして、相當の根據がある事になるてすね。」

三太郎「夫を一個の家などにまで適用するから、迷信であると言ふのです。」

學生甲「東北大學では、正門をわざ／＼丑寅の方に設けたのは、其迷信を破る積りなのかね。事實上東北大學は、鬼門の方に門を建て、非常に發展して居るから、鬼門の説は全く迷信だね。」

對話がますます佳境に入るので、鳥海山中で迷子に成つて居ると言ふ事などは、全く念頭を離れて仕舞ひ、夜の明けるのにも氣が附かずに居つたが、其中に寝込んだ學生も目がさめ、有明の月も其光を失うて來たから、各自交代に双眼鏡を手にして、登山者の通行を發見せんと展望の任に就いたが、午前六時頃幸にして、約十町

の距離を隔て、三名の通行者を遙に認めた。我等は竟に救はれたのである。彼等三名は、茵子採集の爲に、附近の村落から、未明に登山したのであつた。吾等の窮狀を物語り、彼等が携へたる辨當の一半を乞ひ受けて、空腹を充たし、教へられたる道を辿りて、矢島に著したのは、午前十時頃であつた。山腹にて出逢ひたる二高の學生は、矢島を早朝出發したのである。彼が早朝から午後四時迄費せる道を、我々が午後四時過ぎから降つたのは無理であること言ふまでもないが、無事に矢島に著いて見れば、道に迷つたのも亦一つの餘興で、終生忘るゝ事の出來ない思ひ出の多い事件となり、却て面白かつた様な感じがする。

二十八 釧路行

内地の行脚は千篇一律、多少倦み飽きた感があるので、昔の蝦夷島、即ち今の北海道へと足を向けた。甲乙丙丁四名の學生が同行に加はり、一行六名である。津輕

海峡を無事に越え、函館棧橋から汽車に乗ると、一室は恰も我等に依て買占められたる様なもので、他に一人の乗客もない。新開地の汽車は贅澤だなどと、口から出まかせの批評をして寝轉んで居たら、次の停車場で乗込む事夥しく、空席どころ乎、二席に三人と云ふ迄に押込められた。學生の一人は携帯の油紙を床板の上に敷き、其上に寝轉して、希臘の哲人を氣取つて居る。夜十一時頃最終驛に著いた。宿るに足る程の町でもないが、宿らざるを得ぬ。寢床の用意も出来ぬ前に、既に睡つて居る學生もあれば、空腹であるからと言つて外出しか者もある。

五九郎「北海道名物に襲はれぬ様に、澤山撒きなさい。」

三太郎「二三匹位來ても知らずに寝て仕舞ひさうだね。甲君撒きません乎。」

いや／＼ながら起き上つた甲は、ねむい目をこすり乍ら除蟲薬をふりまいて居つたが、粉が鼻に這入つたので、急に活氣が付いた。暫くすると外出した學生が戻つて來た。

甲「何乎甘い食物が見付かつか乎。」

乙「筋向にそばやが有つたが、北海道は馬鹿に物價の高い所だね。」

三太郎「そばは北海道の名物だから安いでせう。山でも寒い國でも澤山とれますからね。」

丙「玉子二つとそば二杯で、一圓ですよ。」

五九郎「どうしたんですか。」

乙「そばが有る乎と聞いたら、二階に御上りなさいと言つて、玉子やビールを持ち出したのです。ビールは注文したので無いからつて、代價を拂はずに來ましたがね。」

五九郎「こんなに夜遅く出掛けたから、先方が氣をきかしたんです。まさかそばか喰べに來たとは受取れんからね。」

乙「さう乎知らん、夜遅くては、そば丈は食はせない乎ね。」

甲「君のスタイルから察すれば、どうしても豆親方と見えるからね。良い鳥が飛び

込んだと、先方では早速網を張つたのだよ。」

乙「失敬な事を言ひ賜ふな。」

五九郎「豆親方で、なんの事です乎。」

丙「豆成金の親方と言ふ略稱だ。」

翌日は一番汽車で出發したが、停車場には、赤色の板に「強風雨雪」と書いた警報が掲げてある。

甲「未だ八月中旬なのに、いづら北海道でも、雪は降るまいがな。」

三太郎「支那の歴史を讀んで見ると、夏の月に雪が降つたと言ふ記録が、往々見えますから、開けない國には、さう云ふ事が有るかも知れないな。」

乙「測候所の豫報係も、内地で教育したのは、北海道には駄目乎も知れんてすね」

丙「雪はどうか知らんが、山の草花を見ると、全く内地の秋ですな。」

分水嶺を越えると、急に濃霧に包まれて仕舞つた。道は蛇行して何度も元に戻る

様な感がある。此坂は、登りには汽車よりも徒歩の方が勝つ位なものである、と隣席の若者が説明したら、

甲「夫て此邊を、十勝(徒歩勝つ)と言ふのです乎。」

とは大出来であつた。一人の佛教布教師が途中から乗り込み、北海道の噺や宗教上の噺で、時間をつぶしたが、最後に、

布教師「北海道はそんなあんばいで、眞面目に働けば眞面目でも成功するし、ずるく立ちまはれば、ずるくしても成功が出来ますから、心配は入りません。安心して北海道に来るが良いです。」

と言つて降車して行つた。成る程現代式の宗教家であると感心せざるを得ない。

汽車は釧路驛が終點であるから、其先は膝栗毛に乗りて釧路川を北上し、午後二時に塘路湖に着いた。湖岸に約二十戸の小部落がある。是が北海道第一のアイヌ町で、入口の右側にシャモの家が一軒ある。標札は山形縣士族と記されたるが何とな

く眼を引いた。驛遞に就て晝食を注文したが、容易に膳立てが揃はぬ。

丁「中食がから遅れてはたまらんね。目がまはりさうだ。」

甲「今アイヌの若者が、獨木舟を漕いで海老を取つて居るから、あれを御馳走するかも知れん。」

丙「さうでないよ。あの海老を餌にして、大きな魚を釣つて、其魚を料理するのだと言ふから、充分に空腹にして待つが良いさ。」

乙「御腹がすいてもひもじうないと、言ひ張つた仙臺公の城下に育つた人なら、半日位飯を食はんでも良いではない乎。」

丁「何とでも言ふが良いさ。」

其中に家婦が來たので、それ飯が出来たと思つたら、大間違で、風呂がわいたとの通知であつた。湖畔に据えた五右衛門風呂に這入り、青天床の下で、太古其儘の塘路湖上を漕ぎ行くアイヌの姿を眺めた時は、なかくに趣味深く感じた。



(照參頁六四二) 圖一二第 ヌイアの湖上



(照參頁三五二) 圖二二第 ヌイアの家

甲「彌次郎兵衛が踏み破つたと言ふ、五右衛門風呂に這入つたのは今日が始てだ。」
丙「膝栗毛を読んで居た御蔭で、足の裏丈はやけどしなかつた乎ね。」

丁「あれが五右衛門風呂と言ふのです乎。徳川時代に東海道の宿場に在つたのが、
今では北海道の山奥まで引込んだわけですね。」

三太郎「時間と空間とは互に獨立なものでなく、其間に一個の離るべからざる關係があるのです。支那では空間を宇と言ひ、時間を宙と稱するが、此兩者は一體にて離す事の出来ないものであるから、之を合せて宇宙と言ふのです。其處で、時間的に長く古今を通じて調査しても、或は空間的に廣く東西に涉りて調査しても、同一の結果を得るのです。早い話は今の五右衛門風呂が其一例で、内地では二三百年の昔有つたものでも、都から二三百里の山奥に引込めば、現在見る事が出来ませう。物事を時間的に丈見る人は、年功に重きを置くが、之を空間的に廣く見れば、若い者にも老人以上の人物が出来る筈です。」

乙「何もかも凡てさう都合好くばかりは行きますよ。」

三太郎「何でも同じ事です。第二の例を舉げて見ると、曲亭馬琴が京都に旅行した時の日記に、京都にては富家の女房も小便は盡く立つて居てするなり。但し良賤とも紙を用ゐず、妓女ばかり懐中紙を持ちて便所へ行く。或は供二三人つれたる女が、道ばたに立ちながら、尻の方を向けて、小便をするに、恥づる色なく、笑ふ人なしと珍らしさうに書いて居るが、京都から三百里離れた仙臺にては、今日でも其通の實況を見る事が出来ます。」

甲「皮肉な實例を引き出したものですわ。しかし一つや二つの例があつても、一般の法則にはならんではありません乎。」

三太郎「夫丈とは限らんです。更に第三例を言へば、芭蕉の書いた奥の細道を見ると、那須の黒羽村に友人を訪問する條に、此野を縦横に分かれて旅人の道ふみ違へん恐れあれば、此馬の止まる所にて馬を返せとて、地方の人が馬を貸してくれたから、

目的地に著いて、徒に駄賃を鞍壺に結付けて馬を返したとある。是も矢張り、其頃は那須野邊で實行した方法を、現今では北海道の此邊でやつて居るので、馬子なしに馬丈貸し、馬はちゃんど道を知つて居るから、馬に乗せられて行けば良いのです。」
色々な嘶をして居る内に、漸く食事の用意が出来たので、中食兼晚餐を午後四時頃にして居ると、七八名の若者が竹竿を肩にしてやつて來た。笹刈の人夫である。此處に一泊する積りて有つたが、此驛處には二室あるのみで、我々六名が優占權を持つて居る爲に、門前拂を喰つたのは氣の毒であつた。此次の驛處迄には約四里の山道を進まねばならん。其中途には一軒の人家も無いのである。愈々寝る頃になると、座敷は二間あるが、蚊帳は六疊づり一張しか有りませんが如何致しませうとの問題が提出されたので、別に名案も出來ず、兩室の境界に蚊帳をつり、三人づゝ二室に別れて、腰から上丈を蚊帳の中に入れ、足は外套で包んで寝る事にしたが、晝の疲勞の爲に、夢中で馬脚を露はし、蚊に喰はれた者も少く無い。

晝食に苦しんだので、翌日は辨當持參て出掛けたが。夏日の炎天を歩いて、握飯
 丈ではなか／＼呑み下す事が容易でない。橋の下なる釧路川の流は大なるも、一杯
 の飲水が得られぬのを怨みながら、握飯をかちつて居ると、郵便馬車が馳せて来た、
 黄塵萬丈と言ふ程でもないが、馬糞の乾いた粉が飛び上るので、あわてゝ飯を包ん
 だ。橋を過ぎて間もなく、馬車が停止した。行つて見ると、小さな家がある。早速
 鐵瓶を借りて来て食後の渴を醫した。

甲「標茶には仙臺人が澤山来て居りますので、仙臺辨が通ずるさうです。」

三太郎「標茶と言ふ名が既に仙臺言葉でせう。」

五九郎「標茶と言ふのは變な名だから、アイヌ語乎と思つたら、仙臺言葉です乎。」
 丁「まさかさうてはありますまう。」

三太郎「仙臺人が喰へなくなつて、北海道に良い處があるまいかと探しながら、此
 處まで来たんです。其所で、

がす乎、がへんと、來したわ、やつと

此所で、とまると、おら、しべちや

と此處に尻を据ゑたから、村の名を標茶と附けたのさ。」

北海道の旅行は變化がない。山と言ふ程の高山もなく、見渡す限り、皇孫が降臨
 された太古の内地其まゝ、今も猶豊葦原である。切り開かれた一本路、何里進んで
 も先後の區別なき故に、進んだ甲斐が見えぬ。第子屈温泉に浴して數日來の垢を流
 したが、學生の一人は萬年筆を標茶に遺失したと言ふので、電報にて旅館に問合せ
 に出掛けた。翌朝起床すると、早速コーヒートライスカレーが出た。

思ひきや釧路の奥の第子屈に

ライスカレーを我食はんとは

一皿では足りさうにも無いが、去りとして盛換を請求するにもきまりが悪い。是て晝
 食迄我慢するの乎と、學生連には不満の色があり／＼と見えた。然るに豈圖らんや、

十分間程を経て、正式の朝飯が運ばれた。今度は朝飯を丸ツきり喰はないでも良くあるまいと、無理につめこんで、出發の際に、靴の紐が結ばれない者もあつた。

甲「いくら田舎では、物を買ふのに値切るのが通例だと言つても、電報料を値切つた人は、外に類があるまいと思ふね。」

乙「黙つて居るやい、人の中でそんな事を言ふ者でなうよ。」

丙「何か彌次喜多々やつたの乎。」

甲「昨夜萬年筆の事で電信局に行つた時には、十時十分頃であつたのさ、夫て時間外だから、電報料が普通の二倍だと先方て言ふので、夫を時間内同様にして呉れと値切つたのは大出来だつたね。」

丁「是は奇抜だね。玉子一つとそば一抔で五十錢を黙つて拂つたから、今度は電報料を値切つたの乎。」

奇「電信局ではまけました乎。」

甲「どうも致し方が有りませんと云ふ返事なので、さうかなと言つたきりです。」
五九郎「夫に就て一句讀みませう。」

標茶に忘れた萬年筆を

電柱見るたび思ひ出す」

甲「電柱見るたびは意味深長だね。」

乙「何とでも言ひなうさ。」

既にして屈斜路に着いた。アイヌとシャモの雜居せる部落であるが、屈斜路湖畔の陸地にして未來の大都會たる事論を待たず。旅籠屋と言ふ者も無ければ知る人を頼みて雜貨店に宿を取つた。庭に井あり。部落内唯一の飲料水なるべく、汲みに來るアイヌの姿勢なか／＼面白く、白さひげを腰に届く程長くはやせる丈低きアイヌが獨木舟に乗りて行くを見ては、何となく昔嘶にある一寸法師の事が想出された。

二十九 湖上の一日

六十歳近いアイヌを雇つて、船を湖上に浮べた。午前四時と言へば、都ては夜半と思ふかも知れんが、船を出して間もなく輝ける星も消え、谷間から立ち昇る霧は緑の山にヴェールを懸けたるが如く、知らぬあたりで鳴く鶏の聲も近く聞こえ、黒く映じたる山の影も、次第に緑色を帯び、向ふの峯には早く旭のさし來るのが眼に付く。暫く漕ぎ廻る程に、アイヌは腹が痛む故に歸りたいと言ひ出したのには閉口したが、嘗て南洋の占領地に旅行した際に、土人を使役した事を思ひ出し、携帯せるビスケットを分けて與へた。

三太郎「腹が痛くなつては大變だね、夫ては薬をやりませう。君其罐を開き給へ。」

乙「此ビスケットです乎、是て腹の痛いのが治まるか知らん。」

三太郎「大丈夫です、少し分けてやりなさい、直ぐなほりますから。」

其所で二握程のビスケットを紙に包んで與へると、夫を半分ばかり喰へて、唄を元氣好く歌ひ出した。

乙「爺さん、毎日何を喰へて居るのかい」

アイヌ「今ては米の飯を喰へます、昔は熊の肉だの、落だの、魚だのばかり喰へて居つたが、三十年ばかり前に、釧路に行つた時に、始めて米を喰へてから、大變甘いので、今ては米でなくては暮らせません。」

乙「今幾歳乎、熊を捕つた事が有るだらうね。」

アイヌ「六十五歳に成ります。中島で、平負にして向つて來た熊と取り組んで、殺した事があります。昔は此邊にも澤山居つたが、今ては貉や狸位なものです。」

奇「段々シヤモが入り込んで來るので、熊が居なくなつてこまる乎ね。」

アイヌ「色々な甘い物も喰べられるし、面白い物を見られます。第一、家にも人も名前までもらひました。」

乙「何と言ふ名てす乎。」

アイヌ「元は私の事を、只ノオキリ〜と呼んで居たのだが、今では、大場嘉市と言ふのです。大場は家に貰つたので、嘉市は私に貰つたのです。」

丁「先刻のは、アイヌの唄かい、今一度歌つて見ない乎。」

アイヌ「ピリカメノコ、ツウナミノ、モコロイシャツタ、バシクリ、チ、コロ」

五九郎「夫はシャモの言葉で、何と言ふのです乎。」

アイヌ「ピリカは佳いと言ふ事、メノコは女子で、つまり女の子の佳いのと、夜早くから寝て、明日の朝鳥が鳴くまで、寝て見たいと言ふ事だ。」

乙「食ふ事と寝る事との外には、何も望を持たないのが野蠻人の特色だね。」

五九郎「生物の最終要素は、食慾と生殖慾だからね。食慾の無い者は、生命を持続する事が出来ず、生殖慾の無い者は、子孫が盡きるから、假りに其様な生物が居つたにしても、一時的で、其種屬が滅亡する道理でせう。」

乙「夫ては矢張り、色慾と食慾とは人生缺くべからざるものです乎ね。」

三太郎「人生には必要なる條件では有るが、夫丈で十分なる要件では無いです。最下等の生物でも、此二條件は満足して居るのだから、人類が萬物の靈長たる爲には食慾と生殖慾とを無くする必要は無いが、是等は殆んど勘定に入らない程に、他の方面が発達して居なければなりません。つまり言へば、生物が持つて居る慾望の何割丈が、食慾と色慾とに屬する乎が、生物の優劣を判定する標準です。割合が少いと云ふ事と、絶対値が小さいと言ふ事とを混同しては、大間違ひになります。」

「其論法から言へば、僧侶などが妻帯せぬのは、良くない事になるですね。」

三太郎「悪い事は無いが、不完全なやり方です。理想的に言へば、名僧でも聖人でも、英雄でも、優良な人物は、成るべく其子孫を後世に残すのが、人類を發達せしむる所以でせう。所が、エネルギーは不増不減であるから、生殖の方にエネルギーを費せば、他の方面に發達する事が困難であるから、兩兔を追ふ者は一兔を得ず止

むなく生殖慾を去りて、修養三昧に入るに過ぎないです。従て無妻主義は、人類全般に應用する事の出来ぬものである事勿論です。」

乙「日本人は體格が悪いから、今の主義から言へば、徴兵に合格した甲種兵を種にして、其子孫を大いに繁殖させるが良いですね。」

丁「馬匹改良の必要上、日露戦争後に、馬政局を置いたから、今度は大戦後の軍國主義を徹底させる爲に、陸軍省に優勢局を設け、人種改良をやる様になるかも知れんや。」

三太郎「軍人萬能の日本でも、其所まで實行するには容易でありますまい。」

丁「六ヶ敷い事は無いでせう、種馬所を日本の各地に設けた様に、現在師團や聯隊の所在地にある遊郭を官有にして、毎日曜に屈強な軍人を其所に連れ込み、生れた子供は官費で育てる丈です。設備は既に、出来て居るのだから、買ひ上げる費用さへ議定すれば、直ぐ實行出来ませう。」

三太郎「遊郭を官營にすると云ふのですか。」

丁「さうてはありません。今の遊郭を全部買ひ上げて、陸軍の人種改良工場にするのです。勿論甲種合格の者でなければ、其所に入る事を許さぬので、遊郭では無くなりすから、公娼全廢と言ふ事も同時に實行される次第で、一舉兩得でせう。」

乙「馬鹿な事を云ふね、第一そんな工場の長官になる人はあるまい。」

丁「心配はないよ、元帥や大將の令夫人で、其道出身の者を長官にし、上長官より下士に至る各階級の奥さん方の間で、藝娼妓の經歷ある者を、夫れく相當官に配當すれば、立ち所に出来るではないか。」

三太郎「夫では、人間を丸で動物扱ひにするのですね。婦人の貞操も、兵卒の人格も認めない事になるのですね。」

丁「下士や將校が兵卒を引率して、遊郭に出掛ける事は、現在でも既に實行されて居る事です。況んや強兵の爲に何物をも犠牲にするのが、軍國主義の主張でせう。」

國家も人間も、凡て是等を強くせんが爲に必要なもので、軍隊側から見れば、人間は畢竟生きたる兵器に過ぎないものです。兵器に人格を認むる事は出来ません。」

乙「假に君の意見が採用されて、陸軍省に優勢局が設けられたとして、其附属工場て生れた子供は、法律上何の部類に属する事になります乎。」

丁「夫は無論公生兒さ。」

乙「公生兒よりは寧ろ私生兒に近いではありません乎。藝者や娼婦が産んだ子供と大差がない譯ですから。」

丁「さうてはないさ。一體今の法律家が名稱の選擇を誤つて居るのです。藝娼妓の様に、公衆を相手にして出来た子供こそ、公生兒と言ふ可き筈で、一個の私人がこしらへた者は、當然私生兒と言ふべきでせう。」

五九郎「公生私生の區別はそんなものではあるまい。法律上正式に出来た子供ととし、法律上の手續を経ないで、私かに産んだのが私生としたのでせう。」

丁「夫ならば、娼妓の産んだ子供は、公生兒ではありません乎。生殖器の使用に對して、税金まで納めて居るのですもの、私は産んだとは言はれませぬ。」

三太郎「一體小兒に、公生や私生などを區別するのが不都合です。學校の私立と公立との肩書を無くする程なら、夫よりも先に人に附けた公生私生の肩書を削るべき筈です。」

此議論の最中に、乙は實驗用の馬蹄磁石を弄んで居たが、ビスケツトを入れた鉢力の罐を磁石で吸付けビスケツトを取り出して喰べた。アイヌは不思議さうに夫を見て居つたが、其磁石を乙から借り受けて、自分が先に貰つた紙包のビスケツトを之に近付けて見た。少しも吸附かぬので、色々と試みて居る。

乙「只さうやつても駄目だよ。私がやらなければ吸付かない。」

アイヌ「旦那は魔法使ですね。是でビスケツトの箱を引き寄せるのは。」

乙「何もビスケツトの箱に限らないよ。自分の欲しいと思ふ物があれば、今の様に

食物でも美人でも引き寄せる事が出来ます。」

アイヌ「本當にシヤモは神様の様ですな。色々不思議な事をするから、アイヌは迎も駄目です。此頃も山を測量に來た人は、三日ばかりでも行けない程遠方にある山の上を見る機械を持つて來ましたが、見た丈であの山まで何里あるか知れると言つて居ました。」

「不思議と言ふ事は絶対的のものでは無く、つまり其人の知識の程度に依つて決定せられるもので、知つて居る人から見れば何でも無いが、無智の人から見れば不思議に思はれる。箱根から東に化物は出ないと、江戸子が自慢したのも、理由の有る事て子供や未開人には凡ての者が化物に見え、不思議な現象が到る所に現はれる。従て阿呆を相手にすれば、何人も魔法を行ふ事が出来る。昔は種々の魔法が實行されたに關らず、現今是を行ひ得ざるは、民衆の知識程度が高まつた結果に過ぎぬ。慾が深くして馬鹿な人間を相手に、魔術を行ふのは朝飯前であるが、無慾の者に對して

は成功し難い。先づ之を誘惑して、十分に利慾の念を起さしめ、然る後に其無智に乗じて事を企つるのが魔術師の秘訣である。

丁「紙に包んだビスケットは駄目だよ。磁石が引くのはビスケットでなくて、其鐵力に鐵があるから引くのさ。魔法でも何でも無い。誰がやつても同じです。」

三太郎「觀察の困難は其所にあるのです。罐入のビスケットを磁石が引いた場合に磁石に引かれる要素は、ビスケットであるか、罐に使用したハンダである乎、其包紙である乎、夫を區別するが容易でなく、一度其判断を誤れば、間違つた途を進む事になります。他の例を擧げて見ると、佛國でモンゴルフイエールが風船を昇せる目的で、盛に烟を袋に入れたのは、觀察の錯誤で、日本て死人を六枚屏風で取りかこみ、刀劍を其上に乗せて置くのも、觀察の錯誤から起きた迷信です。」

乙「夫はどんな事實を觀察したのです乎。私が聞いた處では、猫の靈魂が死人に入つて動き出す恐があるからだと言ふ事ですが、何乎夫に相當した事實が、有るので

せう乎。」

三太郎「伊太利で、ガルバンニ氏が電流を発見したのは、死んだ蛙が動いた事からであると言ふ事は御存じてありません。猫は魔物で、夜間に其脊を逆さに撫てれば、光を放つと昔から言はれて居るが、云ふ迄もなく、夫は電氣の火花が飛ぶので、今でも小學校などで、電氣を起すに猫の皮を使用するのは普通の事です。其所で、古猫が死人に近寄つた爲に、電氣が死人の筋に感じて、其手足が動いた事が、嘗て何所乎に有つた事と思はれるのです。其際に萬一にもガルバニの如き理學的天才家が居たならば、東洋で電流の現象が発見せらるゝ筈であつたが、不幸にして、迷信家揃の事である故に、是を猫の靈が乗り移りたるものと認め、竟に六枚屏風や刀劍を持出す様に成つたのです。」

乙「猫の靈が移らん様に、死人の前で、ナムカラタンノ、トラヤイヤと、虎を引合に出すのであると言ふ事を聞いたが、馬鹿げた事ですね。」

案内者「あの向ふの方に赤く見える火口壁があります、あの山の下が摩周湖です。あの山は、アイヌはイケシイヌブリと呼びますが、シヤモ語で言へば、腹立ち山と言ふ意味です。」

五九郎「面白い名の山ですね。あの山に登れば腹が立つ様な事でもあるのです乎。」案内者「左様ではありません。アイヌが信じて居る傳説に依りますと、昔あの山が屈斜路湖の近所にあるオプタテシケ山と喧嘩をした事がある。オプタテシケは其名の如く、槍を彼の敵に投げ附けた所が適中した。其處で、イケシイヌブリは、腹を立て、こんな亂暴な者の近所には居られんと言つて、虚空を指して飛び去つたと云ふのです。」

火口壁にある赤き酸化鐵は、其創傷より流れた血で、其立退いた跡が即ち我々の見る噴火口である。アイヌが言ひ傳へて居る事は、即ち噴火作用に對する彼等の考である。

三十 騎馬旅行

昨日までとは打つて變つた今日の天氣、モコト風吹きまくり、立ちさわぐ波は、湖の遙か向ふに見ゆる中島方面より、白蛇の押し寄せ來る乎とばかりに物すごい。今日はピルワに競馬ありと乎にて、店の者は子供も大人も馬車にて見物に出掛くる有様、西洋の田舎を思ひ出さしめた。我々も續いて出發したが、道中は蟲の多いのに閉口し、携へたる蚊やり線香を四方に立て、路傍に坐を占めて、中食をなし居れば、競馬見に行く人々は、變な顔色にて顧みて行く。

甲「茲に紙が張り附けてあり、博士一行是より右に入れば、競馬場ですと書いてあります。」

丙「親切な人ですね、馬の嘶く聲が聞えるから、遠くは無い様です。」

乙「近郷近在の者が全部集るのだと言ふから、非常なものでせう。」



(照參頁七六二) 圖三二第

人婦×イアの上馬

甲「馬は流石に北海道丈澤山集つて居たが、人は割合に尠いですね。是で此地方の人全部かね。内地なら村社の御祭りでも、是よりは人出が多いですな。」

五九郎「競馬を見物するのだから、人などは尠い方が我々には都合が好いでせう。」
招かれるまゝに淺敷に昇りて見物した。幾組乎の勝負の後に、餘興としてアイヌのメノコが出馬した。白髪を交へた老婆と、中年増と、少女と三人何れも騎馬袴を着け、白き布にて鉢巻をなし、結目を後に赤き襷をかけ、砲聲一發我先にと馬を走らする様は、巴御前を見る様な氣がした。年小のメノコが始終先頭に立つたが、一回まはりと言ふ意味を誤解せる爲に、出發點に歸着して馬を止めた。決勝線は出發點より三四間先に有るのである。未だ〜と呼ぶ聲に氣が附いて、再びかけ出したが、今度は決勝線が何所だか知らんから、猶一回走るものと誤解して、唯一騎飛んで行く光景は、實に愛嬌者て有つた。

甲「決勝線まで達せずにはめるのは、さすがにアイヌ流で面白う。」

乙「一回と言ふ事を嚴密に言へば、出發點で止まるアイヌの方が正當です。出發點より五六間も先に決勝線があるのは、本當の一回ではあるまい。」

五九郎「アイヌを相手にするシヤモは、そんな事で意思が通ぜぬ事になるのです。」

乙「昔はアイヌから鮭を十匹買ふのに、始め、一匹、二匹、……九匹、十匹、終りと數へて、都合十二匹持つて來たさうです。」

翌日は、摩周湖の探検である。排水口を持たぬ深山の湖水で、アイヌさへ此所には其獨木舟を浮べた事なく、神湖かみいとして崇拜されて居ると言ふ所であるが、サンシヨウ魚が居ると言ふから、多分其大なるものを見て、アイヌが恐をなし、是を湖の主と崇拜して居るものと推察せられた。

案内者「往復八里の山道で、殊に人跡稀なる所ですから、徒步よりも騎馬の方が宜敷う御座いませう。」

丁「僕は徒走します。八里でも十里でも差支ありません。早朝に出發すれば、下手

な騎馬武者よりは先に着します。」

案内者「北海道では、女でも子供でも馬に乗るんだと云ふから、馬に乗れんと言つては、人間の仲間入りは出來なくなるよ。落馬する迄は受合から乗つて見給へ。」

色々相談の結果、竟に一行残らず騎馬登山と決定し、午前七時半出發した。軍隊で乗馬の練習をしたと言ふので、得意に手綱をさばいて居る騎手も居れば生れて初めて馬に乗つたので、一生懸命で鞍につかまつて居る者もある。山に入れば樹木生ひ茂り、熊笹は馬上の騎手を隠す程に延びて居る。道の有る無しなどは問題でなく、兎に角アイヌの後に從て、峯を涉り谷を越え、山に登り絶頂に達して、後を顧ると釧路の山野は眼下に擴がり、遙に北太平洋が見える。茲に馬を止めて行手を見ると、谷間に雲のかゝれる如き物が目に附く、言ふ迄もなく摩周湖である。義經と雖も此先は馬で降る事が出來ん。況んや始めての乗馬隊が、此所まで無事に來たのが、天祐と言ふべきである。此湖を探検する見込で、折角新造の獨木舟を準備して居つた

が、昨日の天候險惡の爲め、波高くして、幅員僅に一尺五六寸の獨木舟では到底漕ぎ出す事が出来ん。

アイヌ「此所の湖水は靈水で、特別に甘味があるので有名な所です。」

案内者「兎に角一杯づゝ飲んで行きませう。」

乙「甘い乎と思つたら、格別の事はない、寒くて震へるから、湯でなくては駄目だ。」

甲「名所に見處なし、名物に甘い物なしさ。」

丙「天氣が好くて渴いた際ならば、是でも甘露の味がするさ。今日の様に雨や風で散々の天氣には、ラムネ乎サイダーでも、格別の有難味はあるまい。」

三太郎「君等の腹は贅澤になつて居るから駄目なのさ。アイヌの様に簡単な生活をして、且つ此附近の山を朝から歩きまはつて、此所に來て此水を吞んで見玉へ。夫こそ天下第一品の飲物ですぞ。名物などは昔の儘で、何時迄も改良せんから、遂には食へない物になり、名所でも其通り、餘處が段々進歩するから、時代遅れになる筈

No.1

嘶をしながら再び絶頂に昇り、寒さに震へながら晝食をすましたる頃には、天候再び悪しくなりたる故に、急ぎ馬に乗りて歸つたが、將に本街道に出でんとする數丁手前にて、一人の同行者の姿が見えず、呼べど返事もない。街道に到り馬を止め待ち合はす事にした。是より昨夜の宿所までは一里足らずなるが、我が一行は是より案内者と別れて、川湯に向ふ筈である。馬は折角歸り來りたるに、宿所に行き得ざるが故に私に不平を抱けるならんも、言語不通なれば、我等何の氣もなくて休み居たが、竟に馬の不平が爆發した。

乙「誰か來て呉れ〜」

案内者「どう乎しました乎」

五九郎「馬が逃けて行きました。轡がとれて仕舞つたので、捕へる事が出来ません。」

乙「私の馬も逃げさうです。誰乎押へて下さる？」

案内者「あの馬は子馬が家に待つて居るから歸りたがるのです。」

三太郎「丙君が落馬したよ。怪我しません乎。」

丁「あぶない〜エツ此畜生、到頭人を落して仕舞つた。」

暫くの間は大騒動であつたが、次第に治まり、道に迷うた者も來り、アイヌは逃げた馬と其子とを伴ひ來たから、此處で告別して、第子屈と川湯とに分かれた。是より四里の道は平坦であるが、既に朝からの乗り通しなので、なか〜に苦しい。乗つて居る人が苦しい位だから、載せて居る馬は更に苦しい筈で、打てども〜進まず、アイヌのみは思ひの儘に馬を走らせて、其姿は竟に見えずなつた。野中の一本道なれば、案内なくとも迷ふ心配なく、乗り行く程に、「待て」と呼ぶ者あるに後方を見れば、數年來乗馬を練習せるとて、殿をなせる自慢の騎手が落馬して居る。河童の川流れとは此事だと思つた。始めて乗りたる者は石の如く堅くなりて、鞍にすがり居る様、氣の毒に見たが、兎に角無事に乗つて居る。

乙「火山でせう乎、烟が出て居ますね。」

五九郎「硫黄山です。明治の始には可なり多くの礦夫が居つた様に、記録に見えますが、今では二三十人丈だと言ふ事です。」

丙「此邊一面に茂つて居るのは何でせう。綺麗ですね。」

五九郎「姫しやくなぎでせう。硫黄氣のある火山性の土地に能く育つと見えて、駒ヶ岳にも小さいのが有りましたよ。」

甲「其處の川からは蒸氣が一面に昇つて居るから、もう川湯か知れませんか。」

乙「向ふに一軒家が見えます。あれが温泉場らしいです。」

間もなく宿に着いて旅装を解いた頃には、日既に没して燈火が點ぜられて居た。アイヌは是から六匹の馬を引いて第子屈まで歸るのである。彼が急いだのも無理はない。兎に角温泉に入浴した。浴湯は川の底なる天然の岩を掘つたもので、誠に川湯の名に相應して居る。泉質は湯と云ふよりも、寧ろ稀硫酸を沸かしたと云ふ方が適

當乎も知れん。馬ですれた股にしみて、痛む事夥しい。僅か一度入浴した丈で、こりた者もある。

翌日は徒歩である。生れて始めて馬に乗つた者は、今度は殺さるゝとも馬には乗らないと言つた。釧路と北見との國境を今日越ゆるのであるが、此山奥は熊の出沒するので有名であると度々聞かされたので、一行は元氣のない事甚しい。先頭に立つのも恐しいが、後れて行くのも氣味が悪い。一行六名は密集して、軍歌を歌つたり大聲を上げたりして、前進した。何でも騒いで行けば熊が逃げ行くが、黙つて行つて不意に熊に出會へば、熊も驚いて逃げる暇がない爲に、飛びかゝつて來るのであると聞いたからである。濕地には大きな路みちが生ひ茂つて居る。其の路を一本取りて傘にさして見ると案外に涼しい。日本の先住民族にクロボツクルと言ふのがあり、アイヌよりも以前に住んで居つた小人であると云ふ人類學者の喩を思ひ出した。クロボツクルとは路の下の人と言ふ意味である。路の下に住む位であるから、小人に

違ひないと考へて居たが、路と言つても、一尺二尺の小さいものばかりではない。大きい路に成ると、其葉の下に吾々も雨宿りをする事が出來さうである。少くとも之を傘にして日光を遮る事は十分出来る。従て路の下に休んだとて、必しも小人と言はれまいなど言ふ喩が出た。北海道も始は珍らしいが、五十里の山野を横斷して見ると、何所も同じ秋の景色で、次第に飽いて來る。熊の出る恐が無くなつたので同行六人は散々に分れ、宿を指して急ぐもあれば、途中で緩々休む人もある。北見の海岸に近づけば、所々に人家が見え、何縣移住者入口など書いた、柱や、開墾地に大木が半分焼けて倒れて居るのが、特に目に付き、勿體ない様な氣がする。途中小清水に一泊し、翌日は綱走に着し、再び汽車の人となり室蘭へ向つた。

三十一 百物語

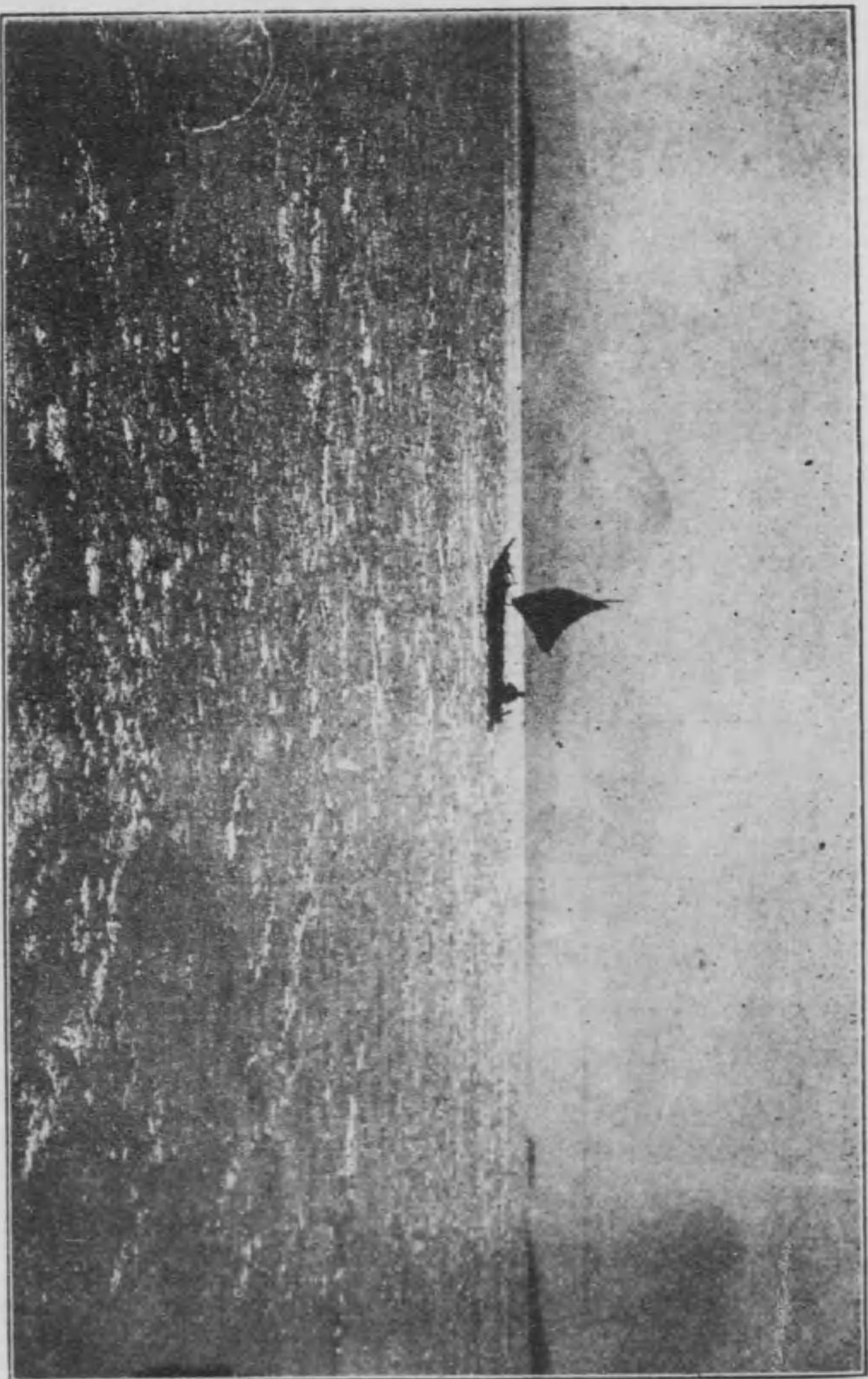
室蘭港を解纜したのは午後五時である。昨日は天候が悪い爲に出港を中止したと

かて、二日分の乗客が込み合ひ、筑後川丸の甲板上也船室も非常な混雑である。荷物の輸送が停車して居ると見えて、船室を除くの外は木材其他の荒物が萬載されて全く足の踏み所も無く、サロンは手荷物で埋められて居る。

船客甲「昨日は切符を買つて待つて居ると、時間まぎはになつてから、しけて出られぬなんて突然止めて、あればかりの波に恐れるぼろ船に、木材をこんなに積むと云ふ法が有るかい。」

船客乙「船賃丈あたりまへに取つて、居る所も無いとは何暴てはない乎。そんな荷物なん乎下して仕舞へ。」

非常な元氣で怒鳴るので、船員は僻易して小さくなつて逃げまはつて居る。夕陽は噴火灣の彼方に沈まんとしつゝ、眞赤な光を投げた。やがて暮れ果てし月の影が海上に浮んだ頃には、一行の大半が顔色を失つて床に就いたが、室がせまい爲に到底眠れないから、甲板上に出て材木の上に腰を下して天體を眺めて居ると、三人五人



(照參頁六七二) 圖四二第

と次第に集まり、一團の集會が出来た。下からは苦しむ聲が聞える。小間物店を擴げて居るらしい。

船客乙「明日の朝までは未だく長いから、一つ順番に何乎嘶をして夜を明かす事にしてはどうです乎。」

船客丙「それは面白いでせう。一つ君から始めたまへ。」

船客丁「誰彼と言ふと面倒だから、闇を引ませう。一番から番號順に話をすれば良いです。」

此動議が採用されて直に實行する事に成り、先づ一番に當つた船客から嘶を始めた。

第一席

一番「私の村に近頃歸つた豫備軍人があります。或日色の黒い衣ころもを着て、不動袈裟をかけた修驗者が入り込み、浮世の凡夫が無始より此方、生死せいじを流轉りゅうてんするは、詮せんず

る所煩惱に引かれて迷ひの種子を播く故である。是を以て先づ煩惱の根を切り捨てて、偏に生死の境界を脱離せんと修業中の者なれば、合力寄進を頼むと説き廻り、多数の信者を得て、殊に若い後家さんの歸依する者が澤山ある。煩惱の根を切つたと言ふのは何の事乎と問へば、一物を切り去つたのである。然るに此修験者の舉動が如何にも怪しいので、軍人は疑つた。議論の結果身體検査をした所が、體に有る等のものがないので、衆生は益々奇特の事と信仰の念を高めた。「一寸見ると茶色の毛が茂つて居るのあてであるが、下の袋が少し變つて居るのは注目したので、

軍人「維摩經には、妻子ありと雖も常に梵行を修むと言ひ、華嚴經には、菩薩は家において妻子と俱なれども未だ嘗て菩提の心を捨離せずと論じて居り、四十二章經には、陰を斷ぜんよりは、心を斷つに若かず。内心に色慾の心盡きずんば、陰を斷つとも何の益する所ぞとある。果して色慾の心無きや否哉を試して呉れる。」と言ひながら、彼を大之字なりに寝せ、子供を呼び寄せて、

シヨウガツ、ガンジツ、ガンザンビ、アサニ、オンマラ、オンガシテ、アカス
ヂ、ハツタリソハカ、オンハラタ、ハントメイウン、オンハン、トマナンド、
マニシンバラウン、

と繰り返して唱へながら、股のあたりを軽く、佛國傳來のマッサージでやつて居ると、松崗が出て來たので、一同は笑ひ出し、修験者は逃げ出して行方不明になりました。」

第二席

二番「京都の五條で天神様の社の近所に柿の木の大いのがあつた。或日其木に佛様が降臨したと云ふので、京都の人々之を參拜に出掛ける者數限りなく、往來も之が爲に止まる程に群集した。五六日経てから、此佛様が地上に墜落したので、近寄つて見ると、何の事はない、羽の折れた糞齋であつたさうです。

五九郎「今の話で思ひ出したが、私が子供の頃に、或時天から寶物が降つた事がある。其實物と言ふのは、直徑一分程の平な品物で、其表面に凹凸あつて、恰も大黒

乎夷子の様な顔に似て居る。是が不思議な事には、鎮守之森や、寺院などの大木の附近にだけ降つて居るので、迷信家は之を拾ひ集めて、神棚に祀り、或は病氣の際には之を服用した者もあります。」

三番「そんな物が天から降つて来る筈はありますまい。誰乎がいたづらをしたのでせう。」

五九郎「人の仕業で無い事は慥ですが、段々研究して見ると、何の事は無い、鷺乎さぎの様な大きい鳥が、山中で木之實を喰つて、夫が里の大樹に休息した際にした糞が、雨に逢うて不消化な實だけが残つて居たのでした。」

五番「誰も見たわけであるまいし、そんな精しい事は知れますまい。」

五九郎「鳥の糞が十分碎けないで、バナナの様な形で、其内に寶物が澤山入つて居るのが見付つたのです。」

一番「それでは鳥之糞を拜んだり、飲んだりしたのです乎。」

三太郎「迷信家のする事は、大概そんなものです。」

三番「先の嘶はあれだけで、濟んだのです乎。」

五九郎「まけて置く事として、次の人がやりたまへ。」

第三席

三番「京都の愛宕山に隠れて、多年苦行せる高僧あり、殊に此山奥に住んで居る一人の獵師から、厚く歸依されて居た。或時久しぶりに參詣して見ると、永年の功德で近頃は普賢菩薩が奥之院にあらわれるから、參拜して行けと言ふので、有難き事に心得一泊した。愈々夜更になつてから、僧侶が熱心に讀經をして居ると、嶺之嵐か松風か、淋しき音が聞え、奥の方が少し輝きたるを拜すると、白象に乗りたる普賢菩薩が出現した。僧侶は叩頭禮拜して居るが、獵師心中に思ふに、普賢菩薩は神道自在であるとしても、こんな山中に、象が居る筈がない。本當の象なら射殺しても差支ないし、佛様なら矢でも丸たまでも中るまいと考へて、一發放つた所が、非常な音

を出して、谷底に落ちたものがある。僧は飛んでもない事をしたと泣いたが、翌朝見たら、谷底に大きな狸が一匹、死んで居つたさうです。」

五番「世之中に神様を見たなど言ふのは、大概そんなものでありません乎。つまり一種の狂人で、それだけを考へて居ると、實際見える様になるかも知れん。」

一番「勿論です。私の村に一人の色情狂が居りますが、年頃の男を見ると、直にそれを自分の情人だと思つて、飛び附きます。彼女の目には、本當にさう見えるのですね。」

七番「信者と色情狂とを、同一に見るのはかあいさうです。」

二番「神は即ち愛なりと云ふから、信者も一種の色情狂ではありません乎。」

第四席

四番「私の癖は少し昔の事で、文徳天皇の齊衡元年七月に、京都の真中しかも神泉苑で起きた事實であります。其頃永年の間五穀を断ちて、木之實このみや木之葉このはのみを

喰ひ苦業して居る上人がありました。」

三番「木之實を喰ふのがなんて尊いのですか。南洋の土人などは、誰でも五穀を喰はずに、生れるときから死ぬまで、椰子と乎、バナ、とか、パン之實など言ふ果物はかり喰つて居ります。」

三太郎「佛教は印度から來た爲に、僧侶たちは、何でも南洋方面の風俗習慣をまねれば、良い事と思つて居るのさ。蓮の葉に飯を載せて、大變神聖な物の様に考へて居るけれども、印度に行けば、労働者などがやつぱり蓮の葉に飯を載せて手づかみて喰つて居る。近頃の宣教師やハイカラ婦人などは、何でも西洋のまねをすれば、文明人だと思つて、パンを喰ふのを自慢にしたり、眞直な髪をわざ／＼縮らかしたり、糞の仕方まで西洋人をまねて、得意で居る様なものだね。」

四番「其議論は預りとして、兎に角其當時は木食上人もくじきと言つて、非常に崇拜されたもので、竟には文徳天皇の歸依を受け、神泉苑に一室を賜はりました。所が若い公卿

達は、面白半分に、此上人の許に出掛け、穀斷こくだんは既に何年ほど實行して居る乎と質問して見たら、小僧の頃から繼けて居るので、彼是五十年にも成ると答へたので、衆皆感心したけれども、唯一人の不信者が居り、上人の糞を見た事がないから、七十五日長生する様に、見に行きませうと言ひ出したので、忽ち二三人の同行者が顯はれ、便所をのぞいて見ると、上人のも自分等のと變つて居らぬ。是は怪しいと思ひ、上人が外出した留守に、室内を詮議して見ると、疊の下に穴藏があり、其所に白米を入れた袋が澤山貯藏されてあつたのを發見し、其後は穀糞こくくそ上人と云ふあだ名を附けたので、夜逃して行方不明に成つたさうです。」

五番「木食上人の大便検査は良い思附きだね。それまで誤魔化す手段はありますませうから。」

七番「大便検査と言へば、それで近頃大成功をした學者がありますよ。」

三番「赤痢乎コレラの研究でも出来たのです乎。」

七番「そんなものではありません。姦夫の一件で、一晚に五萬圓貰つたのです。」

一番「それでは順番を繰り上げて、其噂を先に聞かうてない乎。」

第五席

七番「今度の戦争で出来た船成金ですが、年來の宿望を遂げるのは此時であると、藝者の買占を三日間やらかし、其内て一番の流行兒を受け出して、船板塀では、職業上廢物を利用した様で面白くないと言ふ所から、現代式に人造石で高塀を築き、鐵條網も張つて圍つたさうです。男と名の附く者は、猫の子でも禁じてある筈なのに何時の間に乎盗みに來る者があると云ふ噂が耳に這入つたから、成金大に苦心して調査したが、證據を見附ける事が出来ないので、女を詰問しても白狀しないです。そこで金五萬圓の懸賞で、證據發見の方法を求めたのです。」

三番「五萬圓とは馬鹿に奮發したものですね。」

七番「我々から見れば大金だが、何千萬圓を一年乎半歳で握つた成金から見れば、

五萬圓ばかり何でもあるまい、女を盗まれては、夫以上の恥辱ですからね。處が、さすがは理學者だね。隣家の博士が早速名案を考へたのです。」

十番「姦夫の鑑定まで理學者がやるんです乎。科學萬能も極端だね。」

七番「理學者のやる事は違つたものです。一寸見ると間が抜けて、時世に逢はん様だが、一々數量的に出來て居るから、結論は慥かなものです。」

三番「情夫の入り込んだのを數量的に研究したと言ふのは、どんな事です乎。」

七番「何でもカリバーだと乎、マイクロメーターなど云ふ、舶來の機械を一通携へて、其妾宅に出掛け、便所を檢查して、直徑三十八ミリメートル、長さ百七十五ミリメートルある、左捻固形物を摘出し、是を研究した結果、此太さの固形體が、人體から排斥せらるゝには、腸内にて水分が完全に吸収せられるので、平均固形分は水分の約三倍強に當るのが通例である。然るに、今回摘出したものは、水分が固形分と半々に成つて居るから、是は排出後に吸収したものと見なければならぬ。處が、

人糞の表面積一平方センチメートルから、一秒間に吸収する水分を測定した結果を土臺として、逆に算定して見ると、全面積二萬一千平方ミリメートルから、是だけの水分を吸収するには、約十七時間を要する筈である故に、此大便が排出された後十七時間便所にあつた勘定である。而して、是を便所から上げたのは、木曜日の午後三時十分である故に、それより十七時間以前即ち水曜日の午後十時半前後に、此便所を使用した者があると言ふ結論に達したのです。そのみならず、其女の健康状態は、當時便秘して居らぬ事が他の方面から證據立てられたので、いくら太い女でも、こんなに太い物が出まいと言はれ、時刻まで指定された爲に、白状したさうです。」

一番「それで五萬圓にありついたので乎、馬鹿くしい。苟くも大の男が、事もあらうに、成金の妾宅の便所をあさつて、謝禮を貰つたのが、何て成功だい。それだから、役者に學者に藝者は、大正の三幅對だなんて言れるのだよ。」

十五番「君などは、どうせ大金にありつけない人物だから、空景氣を附けて、威張つて居るが良いさ。」

七番「何と言つた所で、金の世の中ですからね師範學校卒業しても、やつと學校教員で、教育界の末席を汚す位が關の山だけれど、金さへあれば、教育會長にても、文部大臣にても、成れる聖代ですもの。」

五番「金なくてなんのうぬらが學者哉、と言ふ句があるが、學者ばかりではない、官吏が金もうけに殺人をやるんだからたまらない。尤も月給以外に収入を増す事を考へると訓示されたのだから、それも一つの方法乎も知れんが。」

七番「罐詰に砂をつめ込んでさへ、成功すれば男爵に成れるのだから、トランクに死骸を詰めて成功したら、伯爵ぐらゐに成れる考かも知れんさ。」

三番「評論はそれで終結として、次の噺を聞きませう。」

第六席

五番「天竺にて、釋迦如來の滅後百年程經て、優婆曇多と言ふ上人があり、常に其弟子を訓誡して、女子は最も恐るべき者なる故に、之に近寄る勿れと口やかましく言ふので小僧たちは、又例の説教かと思ふ程であつたが、或時一人の小僧が使に行つての歸り、船も橋もない川を徒渉たじやうの際に一人の少女後から來り、水が恐ろしくて逆も一人では涉れないから、手を取つて助けてくれと頼んだ。始の内は、師の説教に女人に近づくなどあるは、此處の事であると思ひ、一旦謝絶したが、見て居る内に其少女が流されて行故に、人を見殺しにするは出家の道でないと悟り、近寄りて手を取り、無事に川を涉つた。」

浅い河なら膝までたくれ

深くなるほど帯を解く

と言ふ俗歌に違はず、手を接觸した瞬間に、發生した動物電氣は、青年の全身に衝動を感じたものと見え、竟には川を涉り切つた後にも、手を離す事が出来なくなり、

萩薄はぎすきの茂れる野中に引き入れ、女の上に乗るかゝつた所を、師の優婆堀多に見咎められ、諸弟子の前にて深く懺悔して、竟に阿那含果を得て佛道に入る事が出来たさうです。大宗教家たるには、兎角一度は大罪を犯して見なければ、本當に懺悔する心が出ないから、駄目と見えます。」

十四番「キリスト教にも、丁度それと似た噺がありますよ。」

三太郎「佛教でも、耶蘇教でも、大同小異だから、そんな噺は何處にでもあるよ。」

十四番「西洋のは、終りの方が、もつと奇抜に結んで居ります。」

二番「それでは、一つ順番を繰り上げて談りたまへ。」

第七席

十四番「西曆紀元十二三世紀の頃、伊太利國のカラブリア洲サン、ピエトロ町のモナステ、ルと言へば、國內に響いた立派なる耶蘇教の寺院で有る。其所に修業して居る多くの耶蘇坊主の内に、ゼオバンノと云ふ小僧があり、年は若し容姿が奇麗で

ある爲に、往來に出れば、老婆も娘も振り返つて見守るので、同輩からは非常ばうらやまれ、大僧正からは小言を喰ふ事も度々であつた。或る夏の日の中食後に、寺院の者どもが、午睡の夢を結んで居る頃、此ゼオバンノ唯一人が、庭園の樹林内を散歩して居ると、附近の在家の者らしい小娘が、伊太利名物の密柑を畑に採りに行つた歸りと見えて、冷涼の木陰に休息して居る。ゼオバンノが、一寸目禮をして其前を歩き過ぎると、小娘は愛想よく答へて、暑さしのぎに、密柑を進上したのが縁の始で、竟に兩人相携へて、ゼオバンノの寢室に隠れた。勿論誰も知る筈が無いのであるが、ベツドががたのくのので、恰も其附近を巡回中の大僧正が、靜に戸口に近寄つて見ると、扉に錠が下りてあり、慥に女の聲が聞える。何れ後に制裁を加へ様と、靜に立ち去つた。其足音を聞き附けた小僧が、驚いて鍵孔からのぞいて見ると大僧正である。是は一大失策、寺院を逃出す外はあるまいと思つたが、最後に名案が浮んだ。其所で少女を室内に残し、再び錠を下して大僧正の室に來り、何喰はぬ

顔して、自分は是から裏山に枯木を採集に行きますと述べ、規定の如く、鍵を大僧正に渡して出掛けた。小僧が見えなくなつたから、大僧正が早速ゼオバンノの室に入りて見ると、果して女が居る。ゼオバンノ乎と思つたのに、案外にも、大僧正が来たので、少女は恥かしいやら恐ろしいやらで、ベットの上に泣き倒れた。それを見て、さすがの大僧正も氣の毒になり、次第に同情の念が湧き、神は即ち愛なりとの信條が生きて来た。可憐なる此少女を救ひ、彼女の心から恐怖の念を取り去るには、自分が彼女を愛すれば善いのである、恥と恐とに充ちたるまゝ、彼女を此室から追出すのは、無慈悲である。宗教家の取るべき道でないと感じた大僧正は、突如として少女の手を握つた。但し肥滿せる豚の如き大僧正が、○○○○○○○○○○であるから、自分が○○○○○○、ゼオバンノの計略が適中したのである。彼が裏山に行くと言つたのは虚言で、此光景を鍵孔から見物して居る。暫時にして、大僧正が自室に歸りたるを見計らひ、大僧正の前に鍵を受取に行つた。此時大僧正は、眞面

目な顔で、其方は小僧の身でありながら、女に○○○○事がある乎。不都合千萬である。今日限り破門するから、即刻出て行けと云ひ渡した。其所で小僧の返答が振つて居る。私が女○○○○○○、重々相済みません。此次からは、貴僧の御手本通りに、○○○○になりますから、今回だけは特別に御見逃がしの程を願ひます。是を聞いた大僧正は、急に聲を和らげ、今の事は秘密ですぞ、早く出してやりなさい。小僧が去つた後に、大僧正は暫らく祈禱を捧げた。天にまします我等の父よ、明日も亦、我等により清き、更に綺麗なるものを與へたまへ。神の子キリストの御名に依て、祈り奉るアーメン。」

第八席

六番「嘗ては政治家として、内務大臣まで勤めた事のある人が、出家して寂心と號し、道心堅固を以て尊ばれ、古社寺を修理し、教會堂を建つるは、最上の國民教育法である」と、所々方々に勸進して歩いた。或年の事、佛堂建立の材木を得る爲に、

飛彈の山奥に行つた事がある。其際に、僧侶とも附かず、宣教師の様にも見える小學校教員が、神官の態度をまねて、祝詞のりとを讀んで居るのに出合つた。寂心は是を見て、怪しからぬ事と思ひ、國民教育の任に當る身でありながら、其状はなんだ。一體何をして居るの乎と詰問した所が、月給は増さんが、収入を増す事を考へると言ふので、色々考へたが、貴殿の様に佛教一點張りでは、僧侶の形を忌み嫌ふ門口に立つ事は出来ないの、祓をする間は神官となり、それが濟めば衣を引掛けて、托鉢をなし、何宗の信者か知れない家の前では、高天原に南無やアーメンと唱名しながら、世渡りをして居ますと答へた。寂心はそんなまねをしては、無限地獄に落ちるではない乎と泣き出したが、上人の仰せらるゝ事は御無理御尤であるけれども、浮世に在る間は、佛堂の建立よりも先づ鼻之下に供養する事が急務で、こんな事でもしなければ、妻子を養ひ、自分の生命をつなぐ事が出来ません。道心を起す事も上人に出世する事も、生命あつての後であります。上人が若し人を救はんが爲に、

佛堂を建立せんとの思召ならば、何も面倒な事をせず、其金を私に下さい。それで私一人が菩提に進むのみならず、一家一門の者が佛心を得る事になりますと、逆に説法されたので、上人もあきれ歸つたさうです。」

三番「それが神道の流義であるとか、是が佛教の主義であるなどと言つて、居ても仕様がなから、何でも利益のあるものは、自分の方に取り入れるのが、良いです。昔から八宗兼學と言ふ事があるからね。」

十番「教員と言へば、先月私の町で面白い問題がありましたよ。豫算の事ですがね。縣立の師範學校で、實習として養蚕をして居るが、桑葉の値段が騰貴した爲に、豫算の範圍では、上簇二三日前に桑葉を買ふ事が出来なくなつたものです。其所で、どうする乎と言ふ議論です。一方では、生物を飼育して居て、食物を與へんと云ふ法は無いから、豫算外支出をやれと云ふのです。他方では、寄宿生も生物であるに關らず、物價が騰貴しても、食費を増加しないのであるから、蚕の食費を増す理由が

ないと主張するのです。其處蚕と教員との優劣論が始まつたのですから大變です。」

五番「蚕は何と言つても、日本の主要産物たる生絲を吐くのだから、教員など同日に論ずるわけには行きます。」

二番「結局どうなりました乎、蚕の方が勝てす乎。」

十番「つまり、蚕に一日でも桑を興へざれば、繭を結ばん故に止むを得んが、教員は喰べさせんでも働くから、其儘で良いと言ふ事に決著したのです。」

七番「それは實際だね。郵便局では配達夫が定員に足りんからと言つて、配達度数を減ずるし、鐵道では現業員の待遇が悪いければ、時々衝突をさせるから、自然手當を餘計にくれる氣にもなるが、教員はさうでないからね。學校教員が定員の半分に減つても、生徒の卒業期を延長したと言ふ事は聞かんね。」

二番「教員が半分に減つたら、六年の國民教育をするに、十二年かゝるとなれば、文部省だつて其儘には置くまいが、同じく六年で教育が出来るものならば、教員に

成るべく多くの缺員ある方が、經濟上利益に勘定だね。」

五番「其問題はそれ位にして、次のを聞かうてはない乎。」

第九席

七番「中欧露西亞のウラヂミールと言ふ田舎町に、東京駿河臺のニコライに比しても何倍と云ふ程の廣大な舊教の大寺院があり、其所の長老は、國內でも盛徳の聞き高き大僧正でありました。或年の事、一人の若い婦人が參詣に來り、大僧正の足下に懺悔して、浮世の苦みを免れたいと申し込んだ。婦人の言ふ所に依れば、二三年前、ノロスキと云ふ男と結婚したが、其後一日も楽しく暮した事が無い。去りとて一旦結婚した以上、離婚する事は宗教上絶対に禁ぜられて居る。大僧正の方で、何と平此苦みから救ひ上げて下さいと云ふ願であつた。」

大僧正「夫には、ノロスキを、暫らくの間、地獄に落して改心させるより外はありませぬ。」

婦人「生きたまして、地獄に行けますか。永く歸らないでは、後に残る私が淋しくてたまりません。」

大僧正「決して心配には及びません。地獄にやつても、改心さへすれば、直に戻します。キリストは墓に埋葬されてから、僅かに三日にして蘇生して居りますから、又御留守中には、私が慰問して上げますから、淋しい様な事はありません。但し此事は全然秘密であるから、何人にも口外してはなりませんぞ。」

七番「茲に相談一決して、二三日の後に、ノロスキイは妻の勸に依り、寺院に行つた所が、大僧正は是を迎へて、葡萄酒を御馳走した。暫くすると、ノロスキイは卒倒して假死の状態に落ちたので、頓死と言ふ事になり、其日の中に埋葬して仕舞つた。夜半に及んで、大僧正は墓をあばき、ノロスキイを暗室に移し、着物を着換へさせた後に、相當の手當をすると、蘇生した。小僧が毎日僅かのパンと、コーヒイとを運んで来るのみである。」

ノロスキイ「茲は一體何所です乎。」

小僧「地獄です。最早娑婆に居るのではありません。」

ノロスキイ「私は死んだのです乎。死んでからも、パンを喰べるのです乎。」

小僧「是は娑婆に居る細君が、朝晩寺へ參詣して、御膳を供へて行くから、其供養が届くのです。」

ノロスキイ「それでは私の愛する妻の差入辨當です乎。私が死んでも、私を忘れずに供養してくれるのは、有難い事だが、地獄の暗いには閉口する。」

小僧「それは、小さな燈明を供へるから暗いので、外の室はもつと明るいです。地獄でも色々あります。みんな娑婆に居る人の心次第で、寺に澤山供養料を奉納すれば、立派な膳部も地獄にあります。」

斯の如くして、ノロスキイが暗室生活をして居る間に、大僧正は、ノロスキイからはぎ取つた著物を著て、毎晩ノロスキイ未亡人の寢室に忍び込み、天使ミケール

であると言つて、極樂の生活を味ははした。長い間には、途中で村の人に出逢ふ事もあるので、頓死したノロスキの幽霊が浮ばれない爲に、時々寺院の方から自分の家に迷うて來ると云ふ噂を廣めた。其幽霊に誰も逢つた。彼も見たと云ふので、近郷近在一般に信ぜられるまでに到つた。斯くして、數個月を経る程に、愈々ノロスキを蘇生さすべき時節が來た。未亡人が精靈に感じ、天使の情を宿したのである。」

小僧「大僧正や未亡人が、御前の爲に熱心に菩提を祈り、殊に御前も改心したから今度地獄から出す事に成りました。本來ならば、蘇生してキリストの如く、昇天する筈であるが、娑婆に居た際の勤めが悪い爲に、未だ天國に行く資格がない。それで猶一度娑婆に戻つて行つて、修業をしなさい。猶娑婆に於て、一人の子供を授けるから大切に育てるがよいぞ。」

七番「と言ひ渡して、最後の御馳走を置いて行つた。是を喰べ終ると、間もなく熟睡したが、其間に再び著物を換へさせ墓の中に入れて置くと、暫らくして眼がさめ

た。夢を見た様な心持で居ると、小さな穴から日光がさしこんで來たので、大に喜び、飛び上る拍子に、腐された箱が破れ、再び外界に飛び出す事が出來た。近所では、ノロスキの幽霊が來たと言ふので、大騒ぎをしたが、幽霊でなく、本人が地獄から戻つて來た事が知れ、未亡人の貞節と、大僧正の功德とは、國內に傳はり、ノロスキが、口から出任せに談る地獄物語は、世界の宗教雑誌に轉載せられ、其後九個月目で、男子が生れたので、神の御告が適中したと、大に喜び、ノロスキも大正僧を崇拜し、夫人は日夜の別なく參詣に出掛け、生れた子供は大僧正の門に入つて、高僧と成つたさうです。」

三番「露西亞人も馬鹿の骨頂だね。迷信も其邊まで行けば、最早行き止りでせう。」

十五番「信仰だ宗教だと言つて、迷信で固めた社會は、一朝事があれば、あんな風に瓦解するんだね。」

十二番「露西亞では、離婚する事を宗教上許さないのださうだね。」

五九郎「私が佛蘭西から米國に渡る時に、露國の移住民と一つ船に乗つたが、其話に依ると、米國へ出稼して五年も居て歸つて見ると、自分の知らない子供が、二人も三人も生れて居るさうだ。そんな不貞な女でも、宗教上離婚を許さないから、浮む瀬がないと言つてましたよ。」

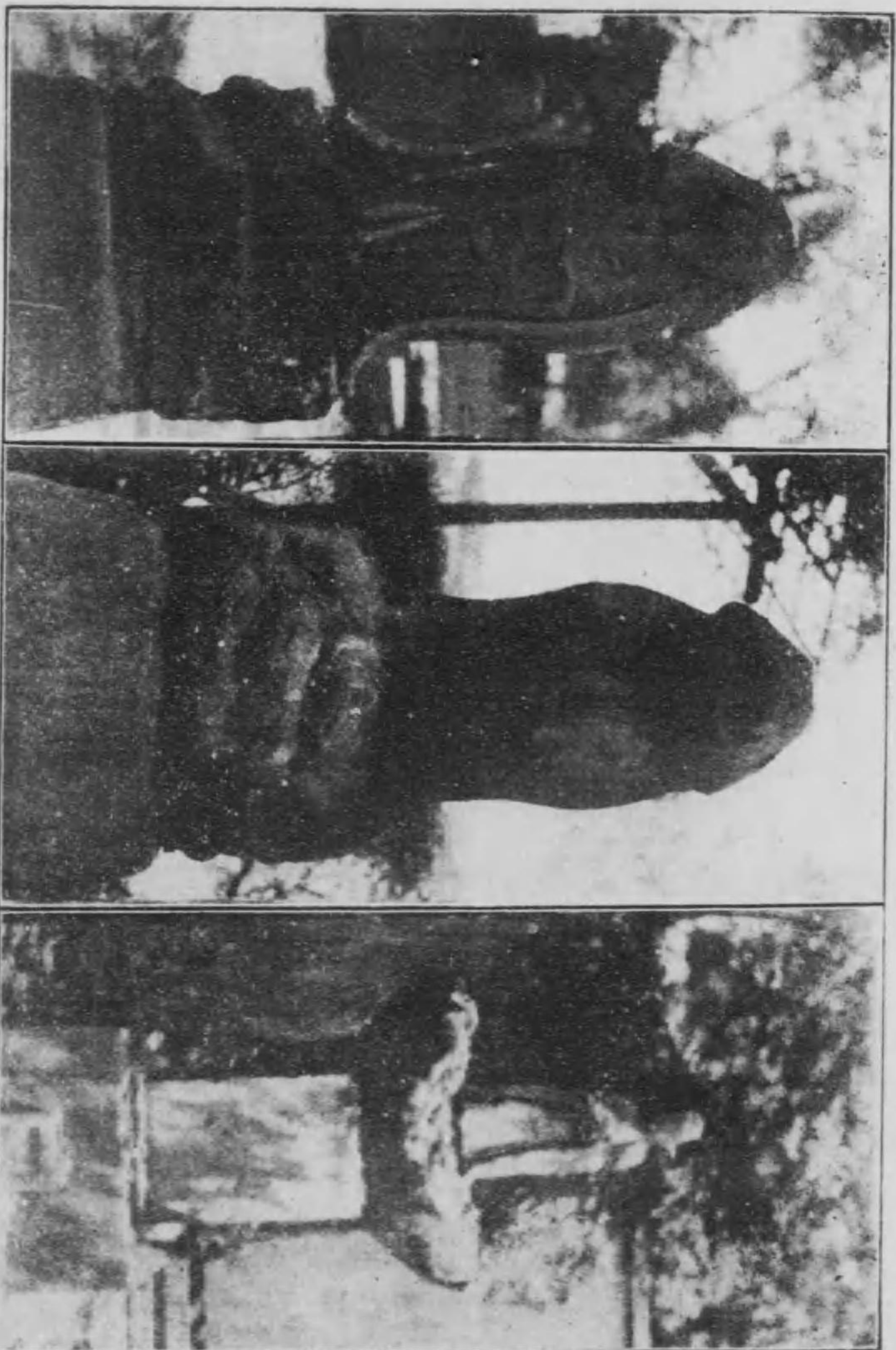
九番「そんな風だから、今度は反對に、結婚を禁止して、婦人國有など云ふ法律が發布されたの乎ね。革命の目的がそんな所に有つたの乎。」

五番「近頃は牧師と馬との結婚式を擧げさせたと云ふ噂だが、婚姻問題では、宗教家が餘程國民から惡まれて居つたと見えるね。」

第十席

八番「私のは、日本の内地で、山陰道は丹波國にあつた噂であります。一人の老尼が、熱心に經文を習ひ覺えたが、延命地藏經の一節に、地藏菩薩は、毎日晨朝に諸定に入り、六道に遊化し、苦を抜き樂を與ふと云ふ所から思ひ附いて、或善知識が

(向つて右)延命地藏尊(中)石佛の表面(左)石佛の裏面



(照參頁八〇三) 圖七十二第

(照參頁八〇三) 圖六二第

(照參頁三〇三) 圖五二第

朝早くから起きて散歩すれば、地藏菩薩に逢ふ事が出来ると説教したのを聞いて、大に感心し、自分も一度は地藏様に出會ひたいと念願を掛け、毎朝早くから郊外を歩き廻つた。」

五九郎「朝起に三文の徳ありと云ふから、假令地藏様に逢はんでも、人の落し物を拾ふ位の御利益は有つたてせう。」

三太郎「山門の徳と言ふのは、一文二文の三文では無いよ。山門は寺の事で、僧侶や尼さんの徳の有無は、朝起の遅速に依て判定する事が出来るもので、朝寝坊主に有徳の僧は無く、山門の徳は朝起にあると言ふので、金銭上の利得とは關係のない事です。」

八番「其論は別問題として、兎に角、尼さんが一週間ばかり朝の散歩を續けた後に朝歸りの若者に出會つた。若い婦人なら兎も角、こんな婆さんが、今頃野原に居るのは、不思議であると思ひ、何をして居なさる乎と尋ねて見たら、地藏菩薩に逢ひ

に來たと談るので、迷信の深い婆さんだがそんな事を説教する坊主も悪い。犬もあるけば棒に當ると言ふてない乎。若い女だつたら、飛んだ地藏さんに逢はんとも限るまい。など思つて居る内に、名案が浮かんだので、其地藏さんなら、私が案内しませうと言つて、自分の隣家に連込み、其母親に、此尼さんが、一寸仁造さんに逢ひたいさうですと、紹介した。婦人は、只今其邊に散歩に出掛けたが直ぐ歸りませうと答へたので、尼は是を聞いて、成る程地藏さんが朝早く出て歩くのは本當であるとうなづいた。三十分程経て、子供が歸つたから、若者は、只今仁造さんの御歸りと言ふたら、尼は是非の分別もなくてむやみに有難がり、顔も上げずに三拜九拜し、是で漸く日頃の念願が届いたと、厚く禮を述べ、若者に一包の謝金を手渡しち去つた。若者は後を向いて、舌をペロリと出したが、隣家の婦人は何の事やら少しも分からず、只不思議な尼さんと思つて居た相です。」

十六番「唯今の嘶て思ひ出したが、其延命地藏と言ふのが、東京の不忍池の、辨天

様の社内にも一つありまして、臺石には、其經文が刻まれてあります。其地藏様は臺石の上に直接立つて居なくて、船の様な形の物が、臺石の上であり、其船の真中に、地藏様が立つて居るのは珍しい形だと、私思つて居ります。蛭子命は船に乗せて流されたと云ふ傳説もあるが、地藏様が船に乗つて居ると云ふ事は、未だ聞いた事がない、あれは何でせう。」

三太座「辨天島の門を潜つて、右側にある地藏様でせう。あの形は、元來陰陽和合の形式を採つたもので、延命地藏として、正式の物です。船の形は陰性のもので、其上に立つて居る地藏様は、陽物を人格化した物です。」

十六番「成る程さうです乎。陰陽和合の像ならば、あんな形になる勘定ですな。」

七番「さう言へば、私が東京に行つた時に、辨天様へ參詣するには、夫婦同行して行つては悪いと言はれたが、そんな物がある故です乎ね。」

五九郎「外國では、よく梅毒や淋病などの病氣を公衆に知らせる爲に、生殖器の模

型を蠟細工にして、展覽に供するが、やはり、男女が一所に入場するのを禁じて居ります。」

三番「そんな男女の生殖器などに、延命地藏など云ふ名稱を附けて、祀つて居るのは不都合ですね。」

三太郎「必しも不都合ではありません。一寸考へると蠻風の様ですが、冷静に熟考すれば、宇宙廣しと雖も是以上に靈妙不可思議なるものはありますまい。天に口なし人をして言はしむと言ふ事が眞理ならば、造物主に代りて萬物を造りたまふのは是でありません乎。従つて造物主を祀り、靈妙なる物を崇拜すると云ふ思想を根絶させぬ限り、神として崇拜せらるべき最初の者は、是でありませう。」

十番「左様言へばそんなものですが、それに延命地藏と云ふ名稱を附けたのはなぜせう。」

三太郎「延命とは生命を延長すると云ふ義です。吾々個人は、三十年平五十年、極

端の説を採つても百二十五歳で壽命が盡きて仕舞ひます。それにも係らず、幾千年の昔から、今日に到るまで、人類が滅亡する事なく、其生命を保存し得た所以のものは何の爲です乎。全く此延命地藏の御利益に依るのでせう。或は又個人にした所で、此延命地藏を汚さん様に謹めば、長命疑ひないので、是を粗略にする神罰で、短命に了る者が澤山あります。」

五番「それにしても、こんなものを公衆の前に出して置くのは、徳川時代ならいざ知らず、大正時代の八釜敷警視廳の御膝下たる東京の真中に置くのは、餘りに不似合では有りません乎。」

三太郎「馬鹿な事を言ひたまへ、東京だからあんなものが有るので、田舎ならば遠くの昔に取り拂はれて仕舞ふのです。石地藏や金佛ばかりでは無い、生きた神様や佛様が、田端と乎、大久保と乎、東京近郊に澤山轉げて居るでせう。つまり、東京は日本の掃溜です。一番良いものもある代りに、一番悪いものもある。一番舊式な習慣

でも、一番腐つた人物でも、一番馬鹿氣た虚禮でも、兎に角一番と名の附くものなら凡て東京に残つて居ると思へば、間違ひないです。延命地藏などは、陽性の方が立派な地藏菩薩の像に出来て居るから、格別通行人の目を引かぬが、更に進んで本堂の右手から、右に曲つて半島の形になつて居る場所に行つて見ると、まだく露骨なものがあります。」

五番「それ以上に露骨なものと言へば何てす乎。」

三太郎「高さは四尺前後もある大きな石像だがね、名前は何と言ふのか知りません。つまり鹿島之要石を二つ割りにしたもので半面丈ではあるが實に完全な模型です。」

十六番「あれだつて、池の方に向いた面には、地藏様乎観音様か知らんが、兎に角人間の像が刻まれてありますよ。」

七番「人間は此内から生れて來ると云ふ事を、像形の上に表はし、公衆に知らせる積り乎も知れんさ。」

五九郎「上野の展覽會などでは、幕を張らなければならんと乎、特別室に押込めると乎、大騒ぎをしながら、あんな物を往來に出して置くのは、怪しからんてすね。」

三太郎「地藏様は美術品でないから、取締る必要を認めぬのでせう。神佛は崇拜すべきもので、人間以上ですからね。」

六番「美術品で無くとも、金山踊や、ハットセさへ、禁止されると云ふてはありません乎。」

三太郎「踊りと言ふから禁止などを喰ふのさ、ナントカダンスと言ふ風に、西洋の名を附ければ、却て奨励される筈なのに、神様や西洋の風俗なら、規則がありませんからね。」

六番「規則は何であつても、生殖器の模型などを往來に陳列して置くのは、春畫を掛けて置くよりも烈しいてありません乎。」

三太郎「君等は生殖器くくと、大變なものの様に言つて居るが、九段や上野の櫻は何

んてす。神や佛の前に捧げる花は、何だと思ひます。何れも生殖器でありません乎。」
 延命地藏の嘶から、思はず横道に這入つて、議論が段々烈しく成つた爲に、集會せる人々は、何時の間か乎、一人去り、二人逃げ、我々三人のみ残つたので、百物語も自然中絶となり、各自に寝て仕舞つた。

三十二 恐山參詣

港が白らむ頃に甲板に出て見ると、金星は約三十度の高度を以て東天に燦爛として居る。間もなく上陸して、直に汽車に乗り、途中淺蟲温泉に浴して疲勞を去り、午後二時半野邊地驛に下車し、運送店に問へば、今日の汽船は既に解纜し、明日は汽船の有無未定である。兎に角明後日ならば、間違ひなく船が出ると、頗る呑氣な事を言つて居る。一行何れも膝栗毛に乗る事に一致したが、横濱までは七里あり、其途中なる有戸は小部落で、宿屋などはあるまいが、宿惣代に頼んだら、止宿し得る

乎も知れんと、頗る心細い嘶である。午後三時を過ぎてから、七里の途は無理である故に、野邊地に一泊と決定した。旅館の二階には、黄白の繭が山の如く積まれて居る。恐らく信州邊の繭商人の定宿乎と推定せられた。夜半に歸り來りて、騒然我々の夢を破る事一再でない。

噂には有戸の里に宿もなく

野邊地に夢を結びかねけり

今は三伏の候である。涼しい内に途を急がんと、午前七時に出發したが、同行者の一學生は落伍した。風邪の犯す處と成つたのである。九時頃に有戸に着いたが、宿屋は勿論のこと一軒の茶屋もない。晴天ではあるが、綺麗な白い羊毛を散らした如き雲が、高い高い天空の其處此處に見える。あの邊が五六萬尺と云ふ高さ乎と思ふと、更に其二三倍の距離にある恐山を青森灣頭に眺望して、上市と前方とに於て、距離の目側に大差ある事が明白に經驗せられる。

甲「此邊は是でも日本の内地乎な、丸て北海道の奥そのままだ、二里も三里も一直線の道で、家も田も有りはしな。」

乙「何が一直線なもの乎、登つたり降つたりする坂道ばかりで、丁度波動の模型の様でない乎。左右にこそ曲つて居ないが、上下には出来るだけ灣曲して居るよ。」

丙「今迄に坂が幾つ有つた乎、推定して見玉へ。」

甲「數へて來たの乎、當てゝ見よう、十八だね。」

乙「そんなにあるもの乎、僕は十個位と思ふ。」

五九郎「峠の數は十三だね。」

丙「峠と坂と同じですか。」

五九郎「違ひます。峠とは山邊に上下と書いてせう、上り坂と下り坂と一組で、一つの峠です。」

乙「夫ては坂の數が二十六あると云ふ事です乎。」

三太郎「此先に幾つ有る乎言つて見玉へ。過ぎた事を當てるのは、田舎の八卦師ばかりだよ。豫言ならば未來の事を言ふものさ。」

五九郎「必しも左様とは限りません。官報に出て居る天氣豫報は、何日でも昨日乎一昨日の天氣だが、夫ても天氣後報とは言ひませんよ。」

乙「丹波の綾部に出來た皇道大本と乎言ふ宗教では、矢張り過去の事を豫言して居ります乎。」

甲「何の豫言です乎。」

乙「明治二十七年には日清戦争が起り、三十七年には日露戦争が生じ、大正三年には世界戦争が始まると云ふ豫言です。」

甲「何時そんな豫言を發表したのです乎。」

乙「多分二三年前でせう。」

丙「夫ならば誰でも出来るではない乎。」

乙「ずつと以前から知つて居つたのであると、註譯附きの豫言です。」

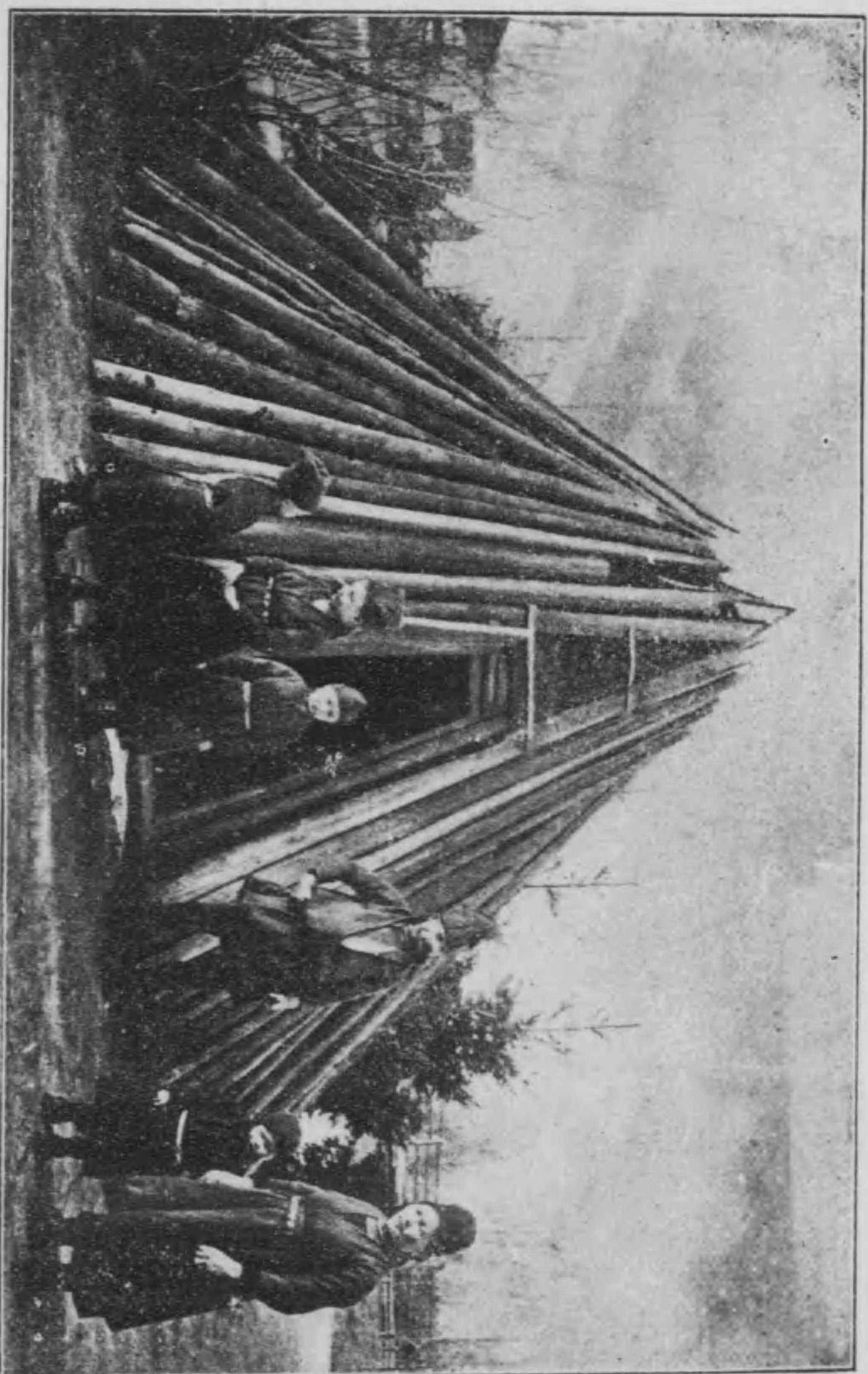
丙「過ぎてから豫言するならば、百發百中な筈だね。」

五九郎「豫言に百發百中など言ふ事は有り得ない筈です。第一豫言者に必要なる條件としては、其事實を正確に知らざる事です。知つて居て云ふのならば豫言でありません。第二には豫言すべき事に就て、多少の知識を持つて居る事です。尤て知らぬ事に就ては豫言する資格がありません。従て百發百中と言ふ事は出来ぬ筈です。第三に豫言者たるには大膽にして無責任なる人物でなければ駄目です。責任を解する人には豫言など出来ません。」

丙「變な家が有るね。人家でせうか、四方は残らず土を積み上げて、柱も窓もない只屋根ばかりだ。」

乙「屋根ばかりでは家とは言へまいさ。」

甲「中に人間が住んで居るなら家でせう。西洋館だつて、柱などはなく、石や瓦で



(照參頁五一三) 圖八二第

家の人上トシラナラ

積み上げるのですよ。土でも石でも大差は無いさ。」

五九郎「ラブランド土人の家でも、是よりは立派でしたね。無人の地を開く先住者は、何所でもこんな辛苦をなめて成功するのであるが、愈々物になりさうになると、金持が来て、其効果を横領して仕舞ふのだからたまらないよ。」

甲「横濱と言ふ名は立派だが、小さい村だね。」

丙「村は小さいが、此海岸一帯の景色は佳いではない乎。鎌倉の七里ヶ濱でも是には及ぶまい。」

三太郎「武藏の横濱だつて、開港前には是と同様さ。田名部迄の汽車道があゝの通り出来かけて居るから、二三年経てば非常に發達する乎も知れん。此附近一帯の海岸は、夏の別荘地として無上ではない乎。」

午後四時横濱に着して旅装を解いたが、夕方旅店の二階から往來を眺むれば、子供が居るのが殊の外に眼に付く。試に之を數へて見ると、左右一丁以内に二

十八名の男女が遊びまはつて居る。他日の發展期して待つべきものがある。

翌日も午前七時に出發したが、村はづれに村社八幡神社があり、社務所に石器時代の遺物が保存されて居る。長さ尺餘の棒の折れた物で、其説明に依れば、采配に使用した物であると言ふが、石器時代の人類も、真田や上杉などの如く、采配を振りまはして戦争をしたものでせう乎。門前には

一、車牛馬乗り入る事を禁ず

と書いた青森縣の制札が建てられて居る。別に珍らし事でも何でも無いが、車馬と書かずに、車牛馬と書いた所に當地方の特徴が表はれて居る。大豆田まめがたの附近は、海濱の景色殊の外に良く、恐山の姿も引き立ちて見える。

乙「皇道大本の信者が、降神かみくだりの状態になつた時に、山で圍まれた中に、大きな沼の様なものがあり、其岸にある山の中に、鐵礦が澤山埋まつて居るのが明かに見えたので、不思議の事と思つて居る内に、旅行して此邊に來た時、其夢に見た地形そつくりなので、恐山の下に礦山あるを知つたのだと、何時乎大本の深野文學士が説明して居ましたよ。」

甲「夫ては、萬一其礦山が失敗する様な事があれば、神様が虚言を教へた事に成るですね。」

乙「そんな事はないさ。掘つて見て、若し鐵礦が豫想どほりに良いのがなかつたら礦員に不信神の者がある爲に、神様が罰を下されたのだと言へば夫て濟むさ。」

丙「降神とは一體何の事です乎。」

乙「宇宙の大靈と人間との間には、幾多の階段に分かれたる無数の幽身即ち神がある。其形體は我々の凡眼には見えぬが、大本の修齊に依て身心を靈化した人の眼には明瞭に見える。單に人間の靈魂や、狐狸の靈魂を見得るのみでなく、高級の神々をも拜する事が出来る。然るに、靈魂界でもやはり人生が行きつまつて、生活難に追はれて居るから……。」

甲「靈魂界があると假定するは良い。が其人生が行きつまると乎、生活難と乎言ふのはどう云ふ事です乎。」

乙「私は信者では無いので、單に先日聞いた事を受賣りするのだから、質問には答辨出来ません。兎に角生活難に追はれた靈魂界の喰詰者が、人間に憑依して、寄生的生活をするので、人間が旨い物を喰べたく成つたり、酒を呑みたくなつたりする、是は皆狐や狸の如き下等動物の靈魂の仕業であると言ふのです。」

甲「靈界の喰詰者でなくして、宗教家の喰詰者ではありません乎。」

五九郎「昔は何處の宗教家もそんな事を説いたものです。キリスト教でも、病氣にかゝるのは悪魔が憑依いた爲であると云つて、祈禱して之を追出し得ると信じ、古い本を見ると、病人の口や鼻の孔から、色々の形をした悪魔が逃げだして行く圖まで書いてあります。今よりも僅二十四年前の近頃でさへ、英國スコットランドの田舎で、ミカエルと云ふ百姓が病氣になつた妻君を實父や兄弟立會の上で、悪魔を追出す爲

に火中に投じ遂に之を焼き殺した事があり、二十年の重刑に處せられた實例があります。」

乙「大本で右の手の母指の爪先から、狐狸の靈が人體に出入すると説いて居ります。其處で左右の手指を組み合せ、左の母指で右の母指を押へ、審神者が笛をならしながら、一二三四なんかかんと乎唱へて居ると、精神状態の劣つて居る者は、容易に降神状態になるから、良の金神さんと言ふ言葉を初に練習させると、段々色々な事を話す様になるのです。」

五九郎「夫は昔から日本に行はれた神憑依と云ふのと同じ現象ですな。私の子供の時にも、村社の神官があるのを見ましたが、私の家の雇人で少しうすのろな者には直に憑依したが、私の弟にはつきませんでした。」

乙「先日も三十名程志望者があつたが、降神したのは一人だけでした。兎に角最後の審判の日が近いから、早く大本に這入つて滅亡を免れようと言ふのです。」

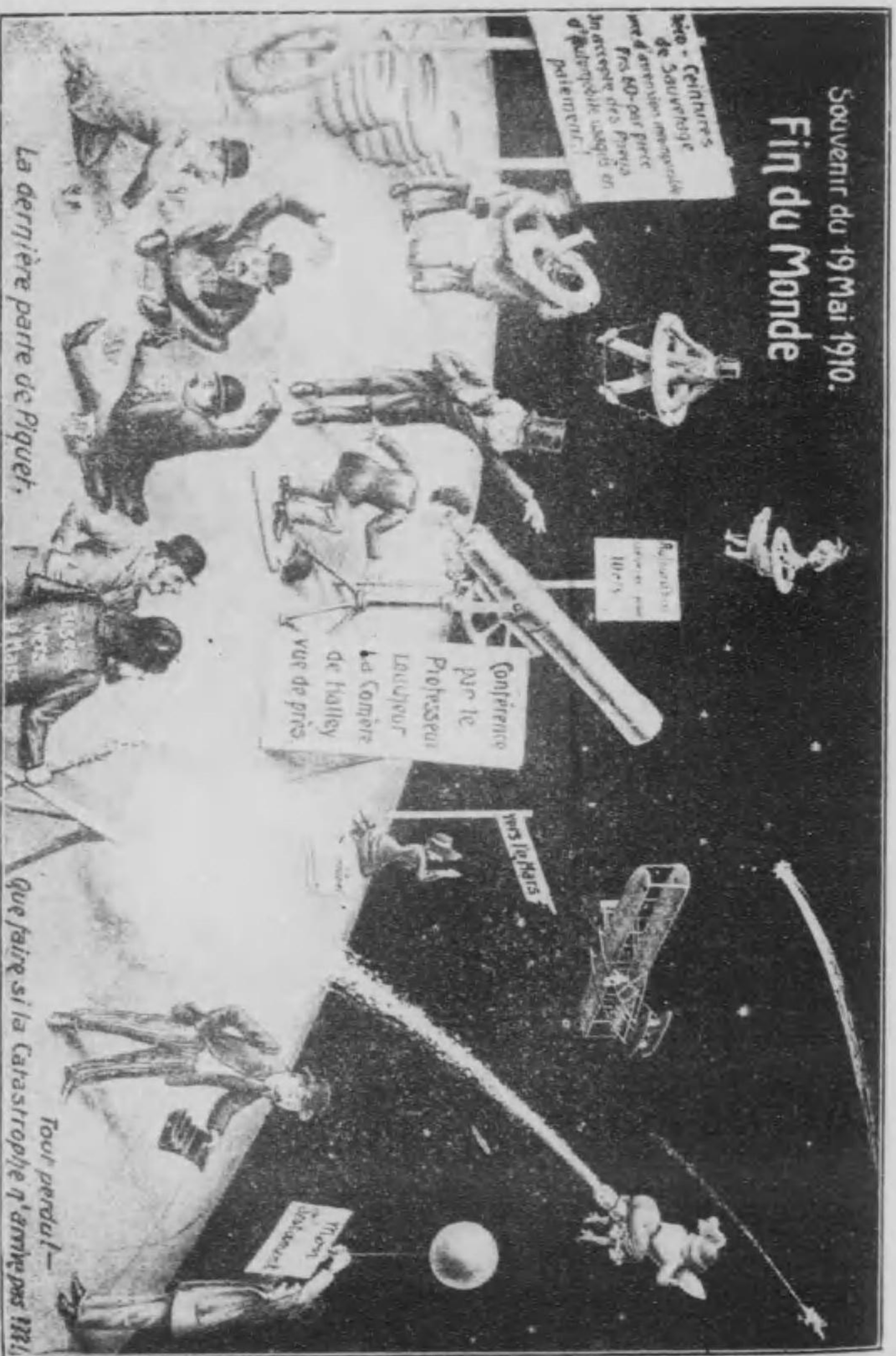
三太郎「最後の審判の日が近づいたと言ふ事は、何宗教でも言ふので、ブラマの經典や耶蘇の聖書にあるが、實現せんから面白いよ。」

五九郎「今世紀の初頃に、ハレイの彗星が現はれた時に、西洋では、愈々最後の審判日が來たと宣教師が盛に絶呼したものです。其所で或信者は、本音をあらはし、どうせ此世間が滅亡するなら、面白く遊ぶのは今の内であると云ふので、全財産を上げて大盡遊びをやつたが、今日になつても世界は滅亡しないので、無一文の漂浪者となり、米國に移住した者が、其翌年急に増加したさうです。」

三太郎「迷信と言ふものは恐ろしいものですよ。」

甲「天理教などでも信者になると財産を無くするので、屋敷を拂つて田賣り玉へと祈禱するのだと言つて居ます。」

鵜坂を過ぎ、有畑を出でんとする頃に、第二の落伍者があるのに氣附いた。前進を中止し、一部の者が探がしに戻つた。民家に休養して居たのを見附けて連れて來



(照參頁〇二三) 圖九二第

たが、下痢がするので土用の炎天の下に旅行するのは甚だ困難である。正午迄五時間に進距離僅に二里である。宿泊すべき旅店はなし、人力車などは無論ないので無理にも徒歩しなければならぬ。其内に柏の深林内に入ったので、少し冷涼を覺え、生氣を恢復した。

丙「東京邊の華族などは、柏の林があると言へば、柏餅が澤山なつて居ると思つて居るだらうな。」

乙「まさか、近頃は華族さんも、なか／＼下情に通じて居ると言ふてはない乎。」

丙「華族さんの事を本當に知つて居るかい。」

乙「新聞にさう云ふ事を時々書いて有るてない乎。」

五九郎「華族にも一びんより桐まであるから、土工か車力などをやつて居る華族は、下情に通じて居る事勿論だが、米價騰貴でこまると言へば、米の飯などは喰はずに、西洋料理を喰へば良いてない乎、など、主張する者もある程ですから、東北の田舎

では、柏餅が澤山なつて居る林があると言つても、そんな事は珍らしくない。南洋の占領地に行けば、パンの實が成つて居る大木さへある。などと平氣で居る乎も知れんよ。」

中野澤に到れる時、既に午後二時に近いが、行程は其半に過ぎないので、心細い事此上もなし。約半里行つて奥内と云ふ部落にて、漸く一臺の荷車を雇ふ事が出来たので、落伍者を之に載せ、大急ぎに前進した。田名部町の附近に到れば、御料地と言ふので、案外整理されて居る。街道の兩側に散在して居る家の屋根、殊の外に低いのは、寒氣烈しき故なるべく、句配の緩きは、大雨なきためならんと推察され、軒下の僅に六七尺なるは、北國と言へど、積雪必しも深からざるもの乎と想像した。圓通寺の深林を右に眺め、田名部川を渡り、旅館の三階に昇れば、室内には既に電燈點せられ、大港要港部の燈火は、遙に螢火の如く灣内の波に漂うて見える。

田名部町は、日本本土の最北端にある斗南半島第一の郡邑で、人口四千餘あり、嘗

ては渡海役所の設けありて、蝦夷や、鞆靴に通ずる海路の要で、明治維新の後には舊會津藩君臣の左遷された場所である。此町から恐山までは百十三町あるが、目下は宇會利地藏菩薩の發日に當るので、老若男女の参拜者は陸續として登山する。野邊地にて落伍せる者は汽船にて來り會し、第二の落伍者を此所に静養せしめて出發した。一町毎に里程標が建られ、立派な新道が出来て居る。左手に高く見えるのは釜伏山で、一個の寄生火山に過ぎぬ。本物の恐山は隠れて顔を出さず、登るに従つて涼風が吹いて來た。一里半登つた所に、臨時に出来た掛茶屋があり、一行の内には氷水を三杯飲んでも物足らぬ顔色の者あれば、双眼鏡を逆さに持ち天空を眺め、何も見えないとつぶやいた給仕女も居り、山てさへ一杯五錢であるのに、此所で六錢取るのに高すぎると不平を言ふ老翁もあれば、十錢紙幣を出して釣銭が無いならもう一杯くれと、畢竟十錢で二杯を飲んだ伶俐な婆さんも居た。

林間に設けられた頗る悪い道路をたどる事暫くにして、遙に湖水が見える。問ふ

迄もなく恐山湖である。湖岸は傾斜甚だ緩かにして火孔趾らしくないが、聞く所に依れば、硫黄採掘の爲に河床を破りて排水し、六尺以上も水面を下げた故に、昔の湖底の一部が陸地と化したのである、従て湖岸の景色は全く破壊されて、地獄の一丁目に適當した殺風景な場所である。

甲「此湖水に魚が居るてせう乎。」

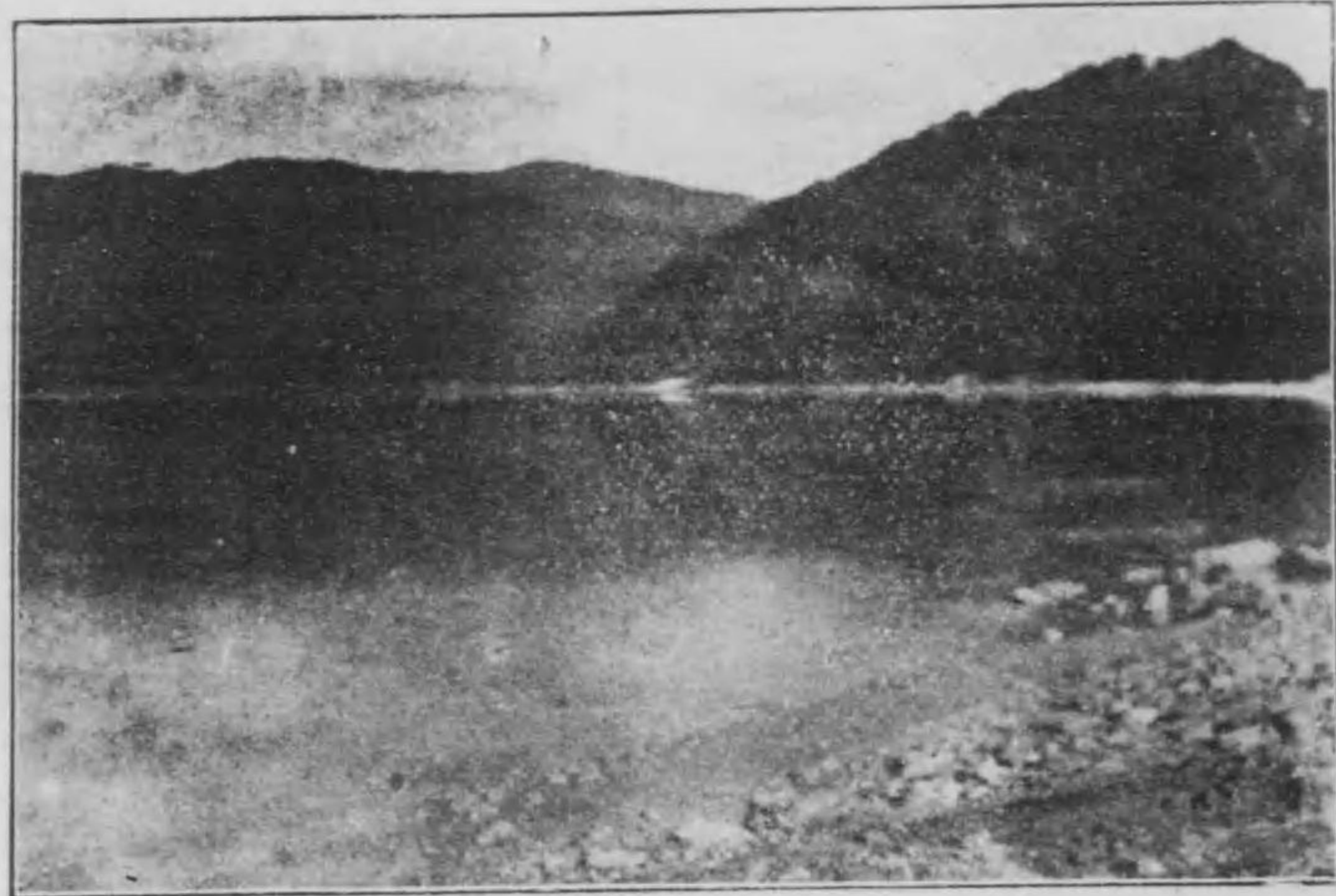
乙「こんなに硫黄分が多くては魚も居られまい。」

丁「其邊に澤山あるのは、もうせん苔の様だね。」

甲「右側の池は盛に沸騰して居る様だが、蒸気が少しも昇らないね。」

五九郎「唯の水より少し暖かい丈です。水底から瓦斯が噴出して、景氣を附けて居るのです。」

乙「是が三途之川乎、名前は恐ろしいが、水は綺麗で、是ならば飛び込んでよさうだね。」



(照參頁四二三) 圖〇三第 湖 山 恐



(照參頁五二三) 圖一三第 内 境 山 恐

甲「青いのは苔でせう乎、夫とも水の色があんなだらう乎知ら。」

五九郎「月が出ました。今夜は月齡十三乎十四程に見えるね。」

丁「何の音でせう。牛の鳴くのもないし。」

乙「死んだ人の聲乎、夫とも牛頭馬頭の聲が聞えるのでない乎。三途之川を渡つたから、此邊は最早地獄の構内でせう。」

丁「未だ聞えて居ます。ゴト〜と云ふ様な、靜にして此處で聞いて見たまへ。」

三太郎「此道の下だよ。地下で音がする。ゴト〜ポコ〜と云ふ様な、是は地下に水溜があつて、其底から瓦斯が吹き出る音です。湖水を見玉へ、あの邊處々に波の立つのは、凡て瓦斯が吹いて居るのです。」

甲「賑かですよ、茲が恐山乎、丸て東一番町の様だ。」

丁「一週間の祭日で、參詣者は二千人位集つて居るさうです。」

宇曾利菩提寺の門前に立ちて、來し方を聞れば、湖水を隔て、南の方には大盡山おほつくし

小盡山あり、左に屏風山、右に朝比奈岳、天狗山など、直徑約一里の火孔趾を圍める舊火孔壁は、八葉蓮華の形を表はし、數千の善男善女は其内に集まり、脚下には八大地獄があり、湖水の北方なる谷間には、殺生邪見の徒が墜る筈の焦熱地獄や、破戒の比丘が墮る筈の大焦熱地獄が實現されて居る。破戒姦淫の衆生や比丘が多い末世を戒めんが爲に、眼前に示されたる此大焦熱の地に群集せる僧俗の内にて、六根清淨なる者果して幾人乎有る。

三十三 盆 踊

恐山と云ふ名が誤解を招く一つの原因でもあらうが、奥州の極北なる南部の恐山に登ると言へば、十萬億土の先にある地獄にでも行く様な感がする。然るに、見ると聞くとは大違ひで、實際に来て見れば、凡て浮世の苦みを知らぬ極樂世界とは、斯の如き場所を指すものであるまい乎と疑はれる。蓋し宇曾利山と云ふのが本名で

語原は恐くアイヌ語であらう。ウシユロは灣の義で、此地方の名であり、青森灣頭にある山であるから、宇曾利山と言ひ、其麓を流れる川は今も宇曾利川と言つて居る。其宇曾利と恐と音譯した爲に、近頃では却て、恐山を東北人が假名違ひして、ウソリと書くなど、攻撃する東京者のあるのには驚くの外はない。

宇曾利山菩提寺の拜殿も本堂も、善男善女で一杯に成り、立錫の隙もない。壇上には百を以て數ふべき燈明が點ぜられ、其前には

ナーム、ズンゾーダーイボサーヅ

と變な調子で、鉦を打ちながら念佛を申して居る一團が居ると言へば、誠に殊勝な心掛け、奇特の至りと賞むべきであるが、周圍を見まはすと、行李を枕にして寢て居るのは月並の所で、右の方には丸裸で酒を呑んで居るのもあれば、左の方には車座になり、手拍子面白く歌つて居るのもあり、更に後を顧みれば、本堂前の中庭で若い女が二十人程一團になり、

盆が来たのに踊らぬ者は

腹にこどもが出来たらう

踊りおどらば三十前よ

三十過ぎれば子が踊る

と足ふみ鳴らして盆踊をやつて居る。宇曾利地蔵大士と書いた旗の下に立つた三十四五歳の巡査は、面白さうに之を見物して居る。今晚夜勤の役徳とても思つて居らしい。拜殿に足を運べば、左側の廣場には中婆さんの一團が、二十人程あぶない腰をよろ／＼させながら、

スツカリ、オドレヤ、ホドケノタメダゾ

と言ふ様な相の手を入れながら、昔に返つて跳ね廻つて居るが、さすがに見物人は混雑して居らぬ。赤い信女が此元氣は、先に往つた信士も心配が多い事と想はれる。右側を見れば、山の様に人が立つて居る。押し分けて其中を見れば、三十名程の男

赤い信女の
またまた
おどらぬ者は

女が非常な景氣で踊つて居る。ビールを片手に携へて時々喇叭呑をやりながら、踊つて居る兄さんもある。

前に立たせて後から見れば

てな上の句が、高い音調の透る聲で唄はれたと思ふと、大勢之に合唱するのと、特有なる青森地方の方言が入るので、下の句がわからなくなる。暫くすると今度は悟りあすれども籠の鳥

と言ふ句が良く聞えて来た。時には筆にするを憚らなければならん程の奇抜な歌が出ると、笑聲は四周の火口壁に反響して、湖水に波を立たせる程の馬鹿騒ぎを起す事がある。

乙「盆踊は何所でも盛にやつたさうだが、大正の今日では珍しいね。」

丁「新潟縣や福島縣でも、可なり盛大であるやうですよ。」

甲「兎に角風俗を害する事があるので、追々禁ぜられるのは無理もないね。」

五九郎「盆踊と言ふのは、元來結婚の相手を選択する公設機關に過ぎないのであるから、風俗を害すと言へば害する様なものの、止むを得ない順序です。西洋では盆踊を禁じた故に、今では温泉場と海水浴場が其代りになつて、盛に風俗を亂して居るのです。」

甲「西洋にも盆踊が有りあります乎。」

五九郎「盆踊と盆火とは、世界各國の民族に共通な享樂法ですから、何處の國にてもあります。」

乙「盆と云ふのは佛教固有のものではないです乎。」

五九郎「西洋にもボンファイアーと言つて、時を定めて火を燃やす儀式があります。何れも佛教やキリスト教の出来ない以前に、人類の祖先が太陽を崇拜し、之を祀らんに爲に火を燃やし、其周圍で踊つたのが根柢となり、後世各國民が其趣味に應じ氣候季節に適する様に宗教家が鹽梅したのです。従て盆踊は元來盆火を燃やして、

其火を圍んで男女が踊り巡るのが正式です。」

丁「夫ては西洋のダンスの様にやるのです乎。」

五九郎「西洋のダンスも盆踊が少し進化して丈です。白耳義ては此盆火を點火するのが最新婚者の仕事として居るが、是は明かに盆踊に参加した者が結婚し得るを希望する縁喜から來たので、盆火を飛び越えた者は良縁があると言ひ、或は七個所の盆火を見れば、其年内に結婚が出來ると信じて居ります。」

三太郎「一晚の内に七個所も盆火を掛け持ちし、盆踊をやり結婚の相手を探したら一人ぐらゐは見附かる筈ではありません乎。」

五九郎「露西亞の盆踊は少し風變りて、男と女とが別々に分かれて踊ります。」

甲「夫ては折角踊つても、つまらなくてはありません乎。」

五九郎「踊り半ばにして男子の組が女子の組に突貫して行くので、此際に女子の組の内て若し手を離れた者があれば、情人の愛を失ふと云はれて居ります。」

乙「つまり手が切れると云ふ意味ですね。」

五九郎「英國スコットランドのタイ湖附近では、湖水の兩岸白晝を欺くまでに火を燃やし、老若男女踊り狂ひたりし事ありしも、醜態百出し風俗を害する事甚しきに依り、堅く禁ぜられ、今では子供丈が許されて居ります。」

丁「子供が盆踊をするのです乎。」

三太郎「大概の風俗習慣は理學者の學說に基き、或は實益上の必要に迫られて起りたるものであるが、次第に宗教的色彩を帯びて簡単な儀式化し、最後には子供の遊戯と成り了るものであります。」

遙に山門の左側を眺むれば、子供の頃に見た覺えのあるノヅキカラクリがある。藝題は佐倉宗五郎と言ふ様な舊式のもてないが、屋臺は徳川時代の物其儘で、五十年百年の昔に時を逆行せしむる事は出来ずとも、田舎に行けば昔其儘を見る事が出来る。是と向ひ合つて活動寫眞の有るのは非常なコントラストではあるまい乎。恐

山て活動寫眞の見物が出来るのは、慥に大正文明の誇である。フィルムは川中島合戦其他三種で、料金が五錢、辯士は小さな聲で説明して居る。見物人が十二人あれば満員客止となるので有るから、活辯先生必ずしも高い聲を張り上げる必要もない。常夜燈の側には館屋が居る、鮮朝語で客を呼んで居るのが珍らしいと見えて、見物人は澤山居るが買手は少しも無い。

朝鮮館の筋向には三十五六歳で洋服を着けた易者が居る。易者と洋服とは餘りに不似合である。恐らく此男は嘗て志を立て、東京に出掛け、彼處に半年此處に三月と私立學校に籍を移し、竟には本郷邊の夜店でキリストンパテレンをかつぎ出し、ハンカチーフの結び目を解いたり、水を一杯に入れたコップをさかさにしたりする魔法を種子に夕涼みの人々を呼び集め傳授本を賣つて居つたが、流れ／＼て恐山に入り込み、今夜は易者と早變りの手品をやつた者と判断した。無論當るも八卦當らぬも八卦である。二十二三歳の婦人が見て貰ひに來た。先生笹竹の中より少し下の

方を右手に握り、之を左の掌に乗せ陰陽の構へ宜しくあつて、南無宇曾利地藏尊の御利益を以て云々と唱へながら、天は左施し地は右施するの理に従ひ、左右の両手を數回廻轉したる後に、箒竹を左手に持ち換へ、右手で二本を取りて之を机上に置き、残りを二分して滅茶苦茶に數へるまねをして、出駄良目に卦を立てたのを見ると、離下坎上の卦 $\text{☲}\text{☵}$ と成つて居る。右の手先で此卦を弄びながら説明を初めた。易者「此卦を兌と言つてな、西の位に當つて居る。周の文王は西から起つて、仕舞には日本の天子様となられた。」

餘りに其説明が奇抜なので吹き出したくなつたが、我慢して見て居ると、易者先生横目でちらりと僕の顔を眺めながら、説明を續けた。

易者「是は至極良い卦だがな、御前は去年は悪かつた。けれども今年は運が向いて来た。去年はもう少しして成就すると云ふ處で、他人の邪魔が這入つた爲に事が敗れたのである。御前は今年大變良い事がある。しかし、此卦は外が陽で中に一つの陰

がある故に、外剛にして内柔なりと言つてな、御前は見た處が達者の様でも内臟に病氣がある。假令今は無いにしても病氣が出る恐がある。それだに依て、此七月八月は格別に食物や飲物に氣を附けなさへ。」

こんな口調で約十分間ばかり駄辯を弄したが、婦人は満足したと見え十錢紙幣を机上に置いて、是で安心したと獨言を言ひながら本堂の方に急いで行つた。時計を見れば既に十一時を過ぎて居る。月の光は皎々として群集を照らして居る。瓦斯や電燈の設備ある大都會では、月夜などは殆んど問題にならぬが、社會が進歩せぬ時代には、秋の月夜は重大な意味を持ち享樂の最好季節である。寝る積りて自分の室に戻つて見ると、隣り大廣間では難波節が大變な景氣で、騒々しく連も睡れない。十二時限り庭前の盆踊は差し止められて居るが、室内での騒ぎは無制限であるらしく、四時頃に眼がさめて見ると、未だに寝ないの乎、夫とも既に早起きしたの乎、上氣嫌て唄つて居る聲が聞える。八葉蓮花で圍まれた菩提寺の境内は、此世に實現され

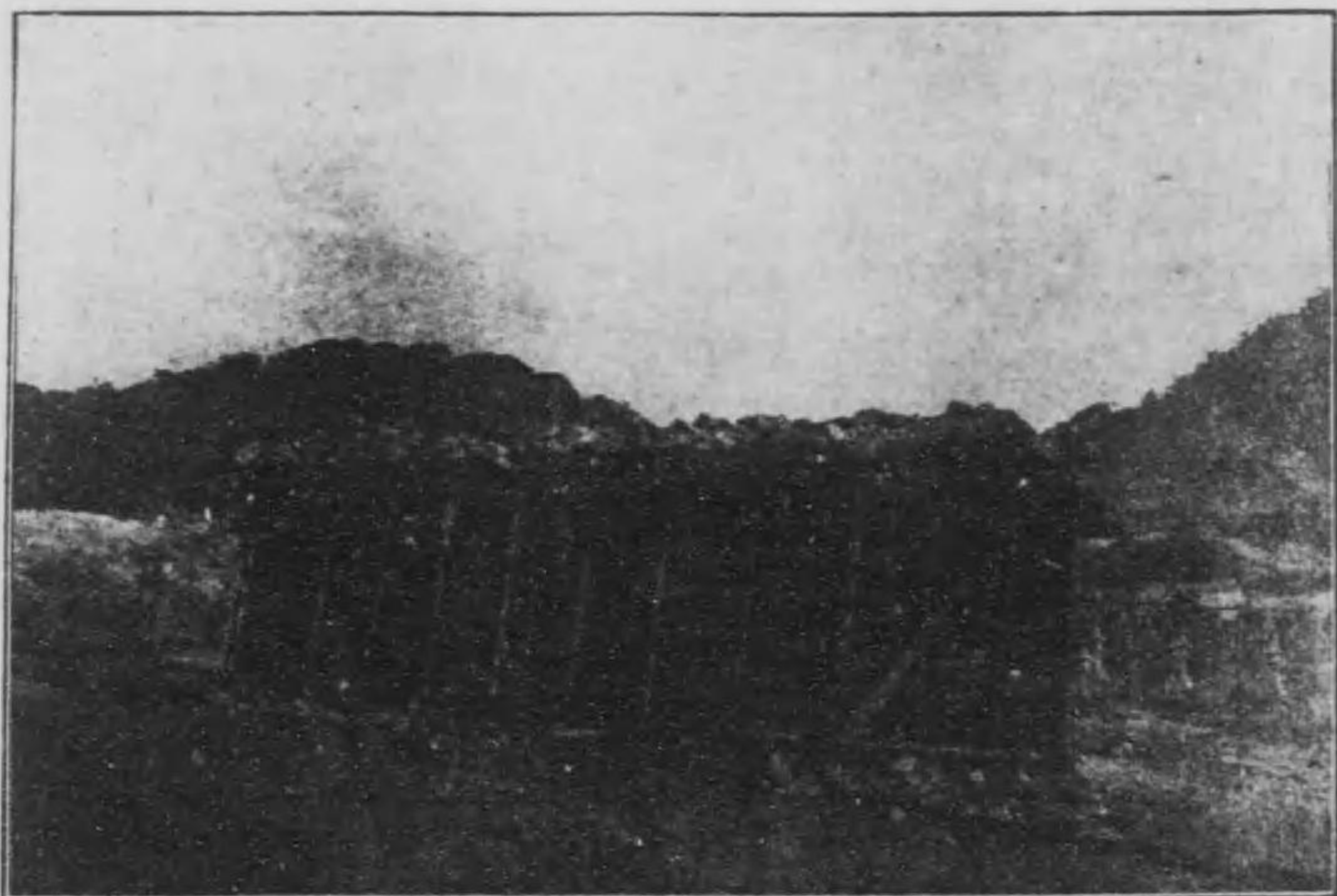
た極樂である。朝の五時頃には荷物を背にして既に下降の途に就いた衆生もある。昨日の内に早く成佛したものと見える。

三十四 地獄巡り

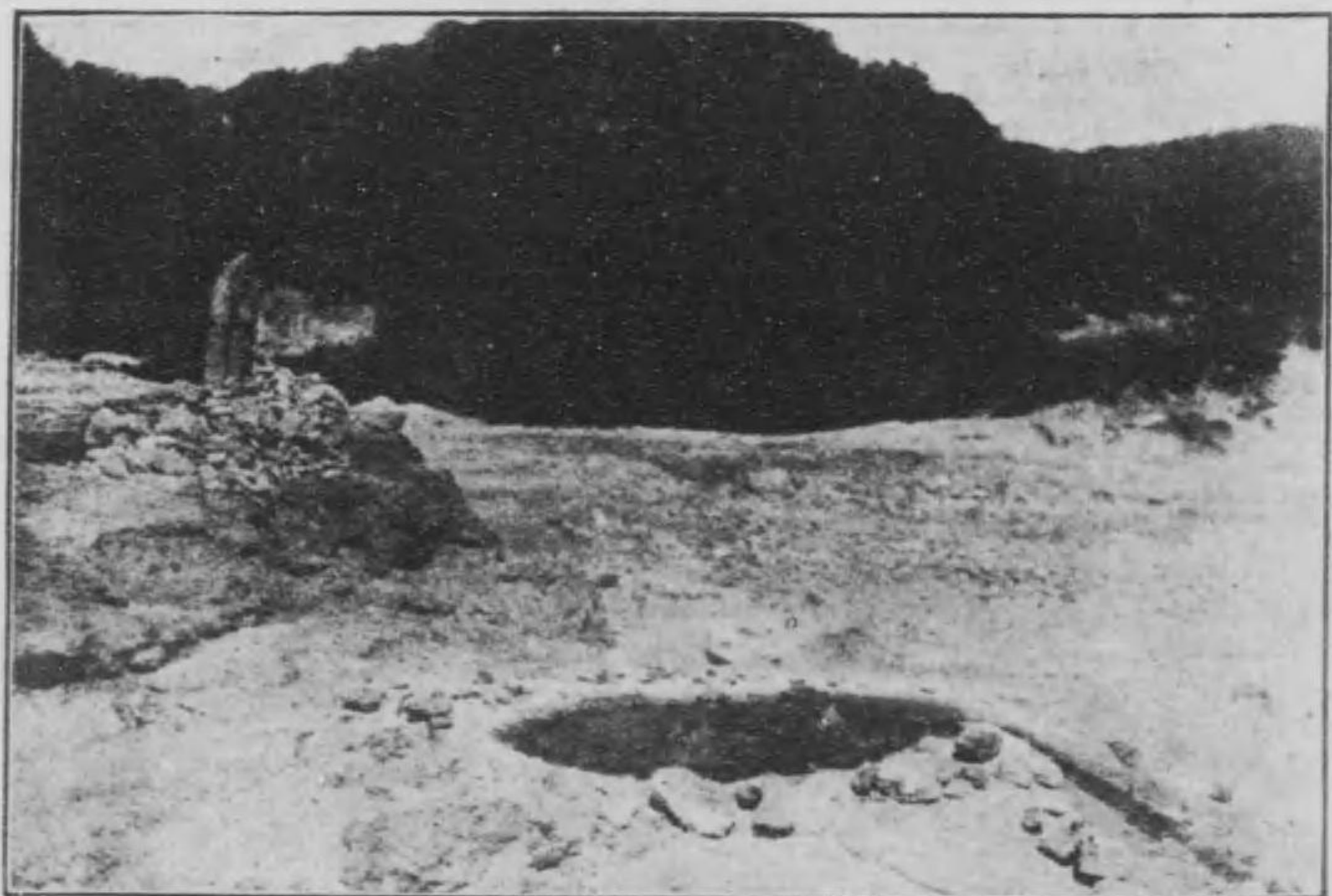
菩提寺の拜殿から本堂に通ずる道の左右に、大焦熱の温泉を利用した風呂場が澤山建設されて居る。昨夜到着した際に案内された風呂場には、漫幕を張り戸を釘附にして、衆生の入場するを禁じてあつた。今朝聞く所に依れば、役僧の垢離を取る處であると云ふ噂である。

甲「垢離を取るのなら、冷水でやるのが正當でない乎ね、湯で垢離を取ると云ふ事は始めて聞いた。」

五九郎「西洋では精進日だからと言つて、魚肉ばかり喰べる日がある。聞いて見ると獸肉を喰はないのが精進日の規則ださうだ。そんな事もあるから、温泉で垢離と



(照參頁六三三) 圖二三第 場呂風泉温



(參頁)四三)圖三三第 ず出噴湯熱りよ所個二右左の中池獄地道羅修

取るのが恐山の寺法かも知れん。」

「丙」それなら、私などは朝晩垢離を取つて、毎日精進をして一生暮して行きたいもんだね。」

「丁」垢離を取るつて一體何の事だい。」

「甲」垢離とは読んで字の如く、身體の垢を離す事さ。」

「丁」垢を離すのなら、冷水よりも湯の方が有効であるから、恐山式に温泉で垢離を取るのが、理學上から見て正常であります乎。」

「乙」それなら外の風呂場も同じ事で、一個所丈區別する必要は有りますまい。」

「丁」外の風呂場は垢を落す所では無いよ。今行つて見たら草鞋わらぢばきで來た衆生が浴槽の中で泥足を洗つて居た。泥足を洗ふ所で垢離を取る事は出来まい。却て垢が附くでは有りませんか乎。」

「五九郎」道理で外の風呂場の湯が眞黒に濁つて居るのだね。私は今朝入浴する積り

て行つて見たが、非常に汚れて居るから止めにした。到底這入れるものではない。一體温泉場の流し場は、床板が外方に低く傾いて四方に溝があり、汚水が流れ去る様に造るのが正式であるのに、此所の流しは、逆に一度使用した湯が再び浴槽に流れ込む様に造られて有るからたまらんよ。」

丁「泥足を洗ふ位は罪がない方だよ。私が今朝早く瀧の湯に行つたら、婦人が浴槽の中でユモジを洗濯して居つたには驚いたよ。」

甲「温泉の分量が不足して居るのでせう乎。」

三太郎「さうではあるまい。湯は到る所に噴出するのであるから、いくらでも集める事が出来ませう。畢竟衛生思想が無いから、何とも思はないのでせう。」

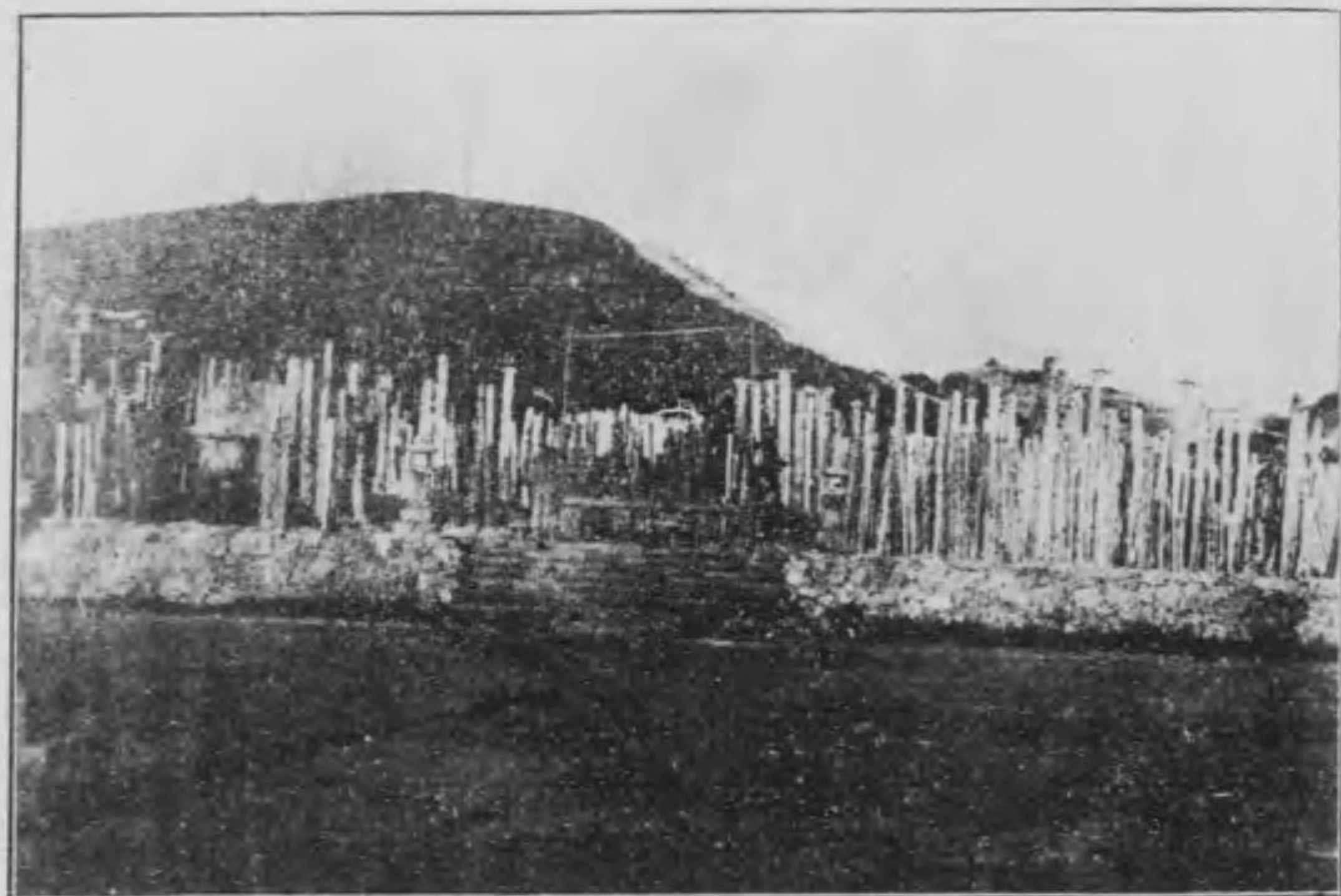
實際の所、此附近一帯の地は全くの焦熱地獄で、地下熱は到る所に其猛威を逞して居る。一寸二寸の割目から湯氣が昇つて居る所もあれば、一二尺の孔の中に黒色や黄色の泥水が恐るべき熱で沸騰して居るものもある。硫黄、硫化水素、鹽素、硅酸等

が重なる成分で、試に其一個に就て溫度を測定して見ると、華氏二百十一度である。此所は山上で氣壓が海面上より低いから、水の沸騰點以上である。後も前も乃至は脚下に到るまで沸騰する音がさまざま、今にも爆發して地盤が飛びさうな氣持ちがする。」

丁「嘗て胡庶允が鞆鞆の大軍を率ゐて、田名部長者の館を攻め落し、宇曾利の山街道を押し寄せた際に、平泉から應援に來た源九郎義經の家來、西塔の武藏坊辨慶の徒弟、出羽の住人羽黒坊が得意の鐵棒を以て敵の二三人を薙ぎ倒しか後に、鞆鞆勢三人に組み附かれ、谷底に捻ぢ伏せられた時、敵の一人が突きかけた鎗の穂先を口を受けて噛み碎いたが、續いて突き出す第二の鎗は、羽黒坊の喉を貫き、深く地中まで突き込まれたために、其疵口から非常の熱氣が吹き出し、血煙濛々と立ち上りたる故に、敵は顔色土の如く變り、慄ひ戰きて逃げ出したと言ふ記事を讀んだ事があるが、茲ならば實際ありさうだね。」

五九郎「北海道の駒ヶ岳火山に登りました際に、山上に幾筋となく、吾人の静朋の如く色の變りたる場所あるを見て、試にステッキで突き通したら、其孔から蒸氣が噴き出た事が有るから、羽黒坊の疵口から湯氣が噴出したと言ふ事も、或は事實乎も知れんや。」

右の方小高き所に登れば、修羅道地獄がある。圓形の孔が大小二個連続して、亞鈴形になり、兩圓の中央から攝氏九十四度の熱湯が猛烈なる勢で湧き出て居る。硫酸分が非常に多くて、昔は八九尺の高き自然の硅華噴泉塔から湧出したのであるが硫黄採掘のために砕いたと云ふ事である。此所ばかりではない。境内到る所の岩や砂が思ふ存分に掘り返されて、自然の風致は見る影もなくなつた。誠に惜むべき事である。地獄の沙汰も金次第と云ふが、金錢の前には地獄も何等の權威がない浮世である。賽之河原で石を積ませられるのは、子供ではなくして斯の如き山師の徒であるまゝ乎。



施餓鬼林場立せのもの供養の卒塔婆なり



首切られたる五百羅漢 第三五圖 (参照頁三四三)

本堂では方丈の讀經が始まつた、

がじやくしよぞうしよあくごう 我昔所造諸惡承 かいはうむしとちんち 皆由無始貪慎痴

何れ知らずして戒を破り、慾の爲に罪を犯した者に相違あるまい。讀經などは我關せずと云ふ風に、安坐をかいて飯を喰つて居る者もあれば、晩にゆるりと踊る準備に、書寢をして居る徒輩も尠くない。次には拜殿の右側で施餓鬼がある。幾百となく立てられた卒塔婆の前に、五色の旗が吊され、祭壇には小豆飯其他の供物が載せてある。方丈が永代回向帳を手にして、

僧「十一月二十九日 大山軒壽翁良椿居士

十二月二十一日 瑞顔妙相大姉」

と云ふ風に、幾多の改名を順次に讀み上げて、

僧「普ねく一切の餓鬼に施す……」

と云ふ所まで讀んだと思ふと、祭壇の附近に居つた善男善女は、我先にと五色の旗

を取らんと急ぎ、中には猿の如く柱に登るもあれば、泥足のまゝで祭壇を踏臺にし旗に手を延ばして居るものもある。到底五色の旗を奪ひ合ふ勇氣のない婆さんは、小豆飯を手づかみて口に入れるのもあれば、紙に包んで歸るのも見える。全く此世ながらの修羅道で、餓鬼が争ふ有様を實現して居る。聞く所に依れば、寺院の者を持ち歸れば御利益が有るので、本堂の千體佛は澤山盗まれ、甚しきは寺の焼印ある下駄を盗んで歸る善男善女が極めて多く、今年は五十四足既に盗まれたが、例年よりは少い方であるとは番僧の物語である。

修羅道地獄を過ぎて少しく坂を降れば、硫黄を採掘した跡が到る所に凹凸して低い丘や小さい池をなして居り、池からは赤い湯や黄色の礦泉が湯き、若しくは硫化水素が景氣良く噴出して、恰も沸騰せる如き状況を示して居る。高い點にも低い所にも、地藏尊其他の石像があり、何の因果か大概の石像は頭が砕かれて居る。

甲「此地藏さんも頭を取られて居るね。神や佛の頭を砕いて御利益があるとは、迷

信も極端だね。」

五九郎「房州の鋸山にある乾坤山日本寺の境内には、五百羅漢が有るが、一部分は斷頭の禍に逢うて居つたよ。古い首をせめんとて外科の厄介になつたものもあるが、新しい首を作り換へたものもあり、處々に「此處首三十」などと建札をして置くのは、一寸外には見られない事だね。」

乙「足利尊氏の本像の首を切つた主義から言へば、地藏さんの首を切るのは、地藏さんを信仰せぬ人の所爲では無いです乎。」

甲「けれども、番僧の話では地藏さんを信仰する人が持て行くと言ふ事でしたよ。」

丙「飼犬に手を噛まれると云ふ諺があるが、信者に首を切られると言ふ様では、地藏さんの教旨が何處乎に缺點が有ると思はれるね。」

太郎「宗教信者と言ふ者は一切盲目になるんですから、初の根柢を忘れて仕舞ふ故に、地藏様が有難いとなれば、手でも首でも砕いて持つて行く事になるさ。」